

夜にいつも見られるやうな群集で、飲んだり、しゃべったり、川のやうに流れたりして、のんびりとした楽しい気分にあちてゐた。ところどころで、カフェは洪水のやうな光を漲らして、酒客の群が、罎やグラスの一面に載せてある歩道の小さなテブルの前に坐つて急いで行く群集の通行を妨げてゐるのを照らした。車道は赤や、青や、緑やの光を持つた馬車が、馬の躍行して行く瘦せた影や、きつと正面を向いた馭者の横顔や、くすんだ色の車體などを、薄明りに、ちらりと見せながら駆けて行つた。(モウパッサン・前田晁譯)

私は的なく町を彷徨つく、暗くなりかけてゐる。河の向ふに燃えるやうな赤い入日があつて、くつきりとした尖塔が空を貫いてゐるのが見られた。牢獄の門

の檜樹の標柱のところ、三色に塗つた張番小舎がある。——廻廊の黒い口が白壁の後にある。足音の反響が石板の上に鳴る。……それから闇黒、閉ぢた窓……塔の時計の鐘のふるえる諧調。……全地上に廣い廣い憂鬱がある。(ロープシン・青野季吉譯)

巴里は溶けるやうなその年の十一月がふらした雨で溢れてゐた、街のアスファルトの上には兩側の家の影が屋根まではつきりと映つてゐた。街燈の灯を周る霧の中には桃色の微粉末が踊つてゐた。水を飲み飽きた歩道に沿うて不具者の並木が風に吹き曝されてゐた。夜になると街の下栓の穴から道路の下を騒々しく流れてゐる急流の響がきこえて來た。

(モオラン・堀口大學譯)

◇店

玉突屋から二三軒隔て、理髮店があつて、その直ぐ隣が八百屋だつた。土間を二つに仕切つて、斜面に並べられた野菜や果物は、夜目には殊に色取が美しい、バナ、だの、枇杷だの、夏蜜柑だの、甘酸ばい匂ひが店先に漂つてゐた。魚屋や牛肉屋の汚い臭ひには自ら顔を背けても、果物の色や香りには食欲が刺戟された。(白鳥)

豆腐屋の軒下に豆を絞つた殻が山の様に桶にもつてある。山の頂がぼくりと缺けて四面から煙が出る。風に連れて煙は往來へ靡く。鹽物屋に鮭の切身が錆た赤い色を見せて並んで居る。隣にしらす干が固ま

店

つて白く返返る。鯉節屋の小僧が一生懸命に土佐節をさゝらで磨いてゐる。ぴかぴかと光る。奥に婚禮用の松が真青に景氣を添へる。葉茶屋では丁稚が抹茶を緩くり〜臼で挽いてゐる。番頭は往來を睨め乍ら茶をのんでゐる。(漱石)

午後とは云つても片側にはまだ強烈な夏の陽ざしが残つてゐる頃の事だつた。店には何時ものやうにがつしりした幾つかの帳場を控へて、主婦を始め大小の店員たちが居並び、それから恐ろしく動作の鈍い主人が大きな角火鉢の前に、影のやうに陣取つてゐた。夕方の方の小買ひの客の集まる忙がしい時にはまだ早く、廣い土間の方はひっそりとしてゐた。(鷹野つき)

電車道を横切つて、古器類を鬻ぐ露店の灯影真

畫のやうに明るい東側の通りを歩いて行く。薄化粧した新橋藝者の浴衣着から匂つて来るそれとしもない香料の香ひが、人の香でいきれぬやうな此の狭い通りをなまめかせる。ふと眼に入つた春信の描いた版畫、それは墨一色で刷られた半身の女である。豊國の役者の似顔繪などの上に古銭が壓しになつてゐた。煤びた粗末な紙片れ、しかもそこに看過し難い線の面白味が、私の眼に溶けるやうに入つた。(薫園)

夕暮になると、大地の泥濘はすっかり乾いて、戻したやうな平らな地面が現はれる。さうした夜の縁日は明るい。カンテラの火の續く限り、うねくと立ち並んだ露店と、その間を潜る群集の雑沓とに、人ははじめて、夏の都會の艶かさと懐しさとを悟るであらう。(谷崎精二)

◇工場

そこには煤煙のくすぶつた鐵工場があつた。その工場の前には、四五人の淺黄服を着た職工が、路傍に工具などを放り出して、なにかの仕事をやつてゐる。孫治はなにげなくそれを眺めると、厚さが五分ほどもあらうと思はれる鋼鐵板に、大きい穴を穿つてゐるのであつた。

工場の中から一本のパイプが這つて出て、そのパイプの尖端からは、青白い焰が、強烈な勢ひで噴出してゐた。熟練工らしい一人の職工が、そのパイプの首を握つて、鐵板の面上にさしつけると、さすがに分厚な

鐵板も半紙を灼き火箸で突き破るやうに、脆くも吹き貫かれた。焰の閃光が、睹てゐる人の眼の瞳孔を傷けるほど強く刺戟する。職工達は、その光線を避けるために、眼鏡を箆めてゐた。(中西伊之助)

窓には新部屋のやうに金網が張られてある。ガラスは糊でも塗つたやうに埃りで汚れて、曇つて居る。彼はその窓から濁つた夕暮が、無性氣にものうげに、押寄せて来る往來を見下ろして居る。板仕切り一重の隣室ではガタンバタンと絶え間なく、機械の音が埃りを震はして居る。その赤い電燈の下では、少年の活字ひろひが、調子おもしろう永久の徒勞を、今日も、昨日も、明日も繰返しくうたひ續けて居ることであらう。(葛西善藏)

灰色の壁に、しかも高く手のやつと届きさうな處に、四角に切り抜かれた窓、其の窓は煙と埃のため、煙銀のやうにどんよりとした眼で、虚空を睨んでゐる。其の窓の下には、手足を鐵繩で縛られて、動く自由を押しへられた猛獸のうめきのやうに、蒸氣釜が毎日同じ熱苦しい響きを立てゝゐる。(未明)

顔に、黒いインキや、赤いインキの附いた若者が、彼方へ行つたり、此方へ來たりして、幾つもの大きな機械が据ゑられてあつた。見てゐる間に機械で刷つてゐる音がガタンと鳴る。又彼方で機械がぐるりと廻るのが見える。その度に白い紙が出て来る。白く見えて字が刷られてゐる。大きな鐵板の掌が高く上つて、びつたりと紙を挟んだかと思ふと、機械がぐるり

と廻つてまたガタンと鳴る。(未明)

機械の響のやかましい工場の長い堀……其の門の中の廣場には、荷車を運ぶレールが縦横についてゐて、事務室らしい入口には、自轉車が一臺横にして置いてあつた。高い窓からは職工や女工がいつも顔を出してゐた。(花袋)

低い木の柵で圍つた電柱置場には、根本にコールタアを塗つた太い木材が何十本となく左右に並べられて、其の間にはケエブルを捲いて納めた大きな丸い箱や、工事用の箱車などが亂雑に置いてあつた。裏門の側の小さな人夫小屋には、しよんぼり五燭の電燈がついて居たが、中には誰も居なくなつて仄白い月の光が漂つた小屋の周りには、紙屑や竹の皮が一面に落ち

散つて居た。(谷崎精二)

◇カフェー・酒場

町角の薄汚ない料理屋で、酒場を兼ねた家だつた。まがひ大理石の卓子の、しみだらけになつたのが、暗い電燈の下に並んでゐて、酔拂つた男や、あやしげな女が、てんでんに麥酒の酒杯を並べてゐた。錢を入れると鳴り出すピアノが、騒々しい室中に反響してゐた。罵るやうな話聲、叫ぶやうな笑聲は、霧より深く立籠めた煙草の煙の底に、混亂して聞えてゐた。腐つた果物の匂に似た、下等な酒場に限る臭氣が鼻をついた。(水上瀧太郎)

色硝子で四方を圍らし、天井には天女の畫模様

その光を薄く透いた赤い絹の障立とが覗かれた。

(久米正雄)

西洋の酒場に見るやうな、若者の小さい集りがそここの圓いテーブルを擁してゐた。女優のやうな給仕女が、客の求めを黙つて背きながら、酒を運び、肉を運んでくる。キュラソーを注いで、焼いた乾肉を食ひながら四邊のテーブルの集りを見た。髪を女優巻きといふものにして、夏コートを着た小造りの眼の細い女が、長髪の、黄な仕事衣を着た若い洋畫家と囁き合つてゐる。(薰園)

三階にある天井の低い室に煙と響とアルコールの匂との一團があつて新來の客が入つて来る度に風がその中に妙な洞穴をあけるのだが、それが人々の頭と

を描いた廣い一室の中央には、白い揃ひの衣服を着けた女の樂師が六人、一臺のピアノ、二挺のピアノ、セロ、コントルバツス、と各自樂器を取つて威勢のいいボルカの様なものを奏して居た。歩むだけの間を残して据並べたテーブルには、何れも若い女や若い男が、或るものは茫然と音樂に聞き取れ、或るものは夢中で骨牌を取り、新聞を読み、雑誌を開き、手紙を書いて居るものがあるかと見れば、大聲で議論をして居るものもある。(荷風)

すれすれに柵引いてゐて室に横さまに中仕切をしてゐるやうに見えるのである。室の奥には青と紫のランプがあつた、壁は一人の露西亞畫家が描いた壁畫になつてゐた、ひどく様式化された椰子の木の下を人を馬鹿にした土耳其帽をかむつてモスコオ人士が散歩してゐる所を描いてゐた。鳥打帽子をかむつてブラウスを着た白熊がセロを弾き乍ら指揮してゐる猿に假装した樂手から成るオオケストラに合せて女たちが踊つてゐた。柵引く煙の上に亭主の顔が浮んで見えた。

(モオラン・堀口大學譯)

◇劇場・其他

折柄舞臺には幕が下りたと見えて多勢の観客が

諸方のドアを一齊に排して、ぞろ／＼と細長い廊下に雪崩を打つて充滿した。白人とも黒人とも判らない美しい衣裳の婦人達が、馬鹿ではあるが禮儀作法をよく心得て居るらしい男どもと入り交つて、露臺の椅子や休憩室のソファや、階段の中途などに華やかな話をささめかして居る幕合の光景は、女優諸君の喜劇よりも何よりも最も「人生の歡び」を表現して居る藝術的な場面のやうに思はれる。今迄静かであつた食堂も俄かに沸き返る混雑を呈して、白く濛々たる煙草の煙が電燈の周囲へ海藻のたゞよふやうな大團を描き、蒸し暑く濁つた場内の空氣に壁畫の美女も汗を掻くかと疑はれる。(谷崎潤一郎)

舞臺には殊更に誇張した強い色で塗られた西洋

の田舎の光景らしい場面が現はれてゐた。正面から上手へかけても遠見の山や、こんもり繁つた樹立や、崩れかゝつた石階のやうなものが巧に現はされて、下手は窓の多い家の壁で仕切られてゐた。そしてその前の廣場には靄のやうな薄紅い光が一面に立ち罩めて、その光のなかには、異様な扮装をした男女が十人ばかりも打群れて、互に聲を争ひながら、美しい唄をうたつてゐる。(長田幹彦)

場内へ這入ると、多くの人の吐く呼吸や敷物から發散する塵埃の臭氣が、一時夥しく鼻につく。空氣が幕間に見物人の喫す煙草の煙で濁つて居るので、場内一面に眩しい程に輝きながら、それが却て薄暗いやうに、凡ての物が恐しく不健全に見える。(荷風)

明るい華やかな灯の光が眩しくきらめいてゐる劇場の中では、今が幕間の休憩時間と見えて、二階三階の昇降口には、女と女との美しい袂が柔かに摺合つてゐた。男と男とが立つてゐる廊下の隅々には、巻煙草の煙が白い渦を巻いて漾つてゐた。その裏の煙や衣の香や白粉の匂が一つに溶け澱んで、暮春の夜の生暖い空氣を呼吸苦しいやうに濁らしてゐた。(綺堂)

舞臺は一面に秋の山で三人の獵師が二匹の小狐を良にかけるが、すぐ親狐のために、たぶらかされて、また踊りぬいて幕がさがる——左う云つた實に莫迦げなお伽劇ではあつても、私は蘭子から眼を離さうともしなかつた。そして、そんな風な私であつたことも、其處で驚くべき發見をしなければならなかつたの

である。と云つても蘭子が舞臺で卒倒したと云ふのも何でもない。恐らくあの蘭子に注意力を怠つてゐる者は誰だつて見逃すに違ひない程微細な出来ごとと云ふのは、蘭子の左手の小指は痛々しげに眞白い繻帯で結はかれてゐた。踊りながら手を擧げる時も、またその手を降ろす時も、蘭子も苦しさうに眉を寄せてゐるのが、客席の一番前に坐つてゐる私にはよくわかる。(崎山猷逸)

家の近くには人の集る寄席がある。そこへ彼はよく出掛けて行つた。藝人が高座でする毎時きまりきつた色話だとか、假白とかい、それほど彼の耳を慰めるでも無かつた。彼は好きな巻煙草を燻しながら、後の方の隠れた場所に座蒲團を敷いて、獨りで黙つて坐

つた。(藤村)

新派悲劇、泰西活劇、舊劇、さういふ寫眞が彼の前に展開された。そして俗悪なる辯士の聲が彼の耳に響いた。群集の頭顱が重り合つて並んでゐて、温氣が館内に立ち罩めてゐた。凡て卑俗なもの、激情的なもの、混濁のうちに醸さるゝ好奇なもの、そんなものが彼の頭をぼんやりさし、彼の頭の中にもや／＼とした熱りを立ち罩めさせた。寫眞の合間にぱつと明るく電燈がついて、自分の側に眉の濃い鳥打帽の男や赤い手絡の女やを見出す時、彼は顔を上げ得られないやうな氣持に浸つていつた。(豊島與志雄)

◇場末・郊外

その所々に立つて居る烟突から、又家の連りの向ふの見えない果から、或は薄く或は濃く、幾線となく廣い汚れた空へ立ち靡いて居る烟、盲目者の白い眼のやうに光の無い、細く縫つてうねつて居る川の筋、あちこちから傳つて來る、激しい運轉をして居る機械の躁音、鈍い人間の呼び聲や鋭い細い器具の叫び、どこからともなく遠く響いて來る大氣の不安な震動、一種妙に混亂した、人の心をいら立たせずには置かないやうな微かな空氣の臭ひ……さういふ中の、泥と煤と埃とにまみれた、一つの茸の中に私達夫婦は住んで居るのだ。(藤森成吉)

場末・郊外

◇

湯末の殊更地面の低い根津の貧しい町を通ると長屋中の女房が長雨に着古したつき／＼の汚れた襦袢や腰巻や、又は赤子の襁褓や下駄の齒や臺所の小道具などを、氣の狂つたやうな凄じい勢で、洗ひながら干しながら大聲に話してゐる。其の周圍に無数の子供が騒ぎ喧嘩してゐる。さういふ狭い横町をば僅かな近道の爲にと包を持ち尻を端折つた中年の男が幾人も突當る人の中を忙しさうに通つて行く。溝からは悉く、濁つた雨水の流れもせず溢れてゐるのみか、道の上にも跨ぎ兼ねるやうな溜水の、幾個所と知れぬその面に今や白い雲の烈しく動き出す青い澄んだ空の色が美しく反映してゐる。其高い空から、細い鳶の鳴聲が遙かに落ちて來る。(荷風)

土は到る處に、緩漫に高くなり低くなつて不規則な波を打つて居る。どこか小高い丘へ登つても見ると、窪い底にもその向ふにうねりがあがつて居る丘の上にも、否その丘と窪みとの間の傾斜に沿うてすらも、まるで半分踏み潰された汚らしい奇體な茸が、土の上へ盛りあがつて來るえたいの知れない下等植物か或は高く光つた、或は低く角ばつた毒々しい花か葉でいもあるやうな形や色をした、數限りない人家がごとくと眞黒に塊つたり、又吹き飛ばされたやうに四方に散亂したりして、つゞいて居るかと思ふと焼け落ちでもしたやうに斷れ、途斷えたかと思ふと又どこまでも連つて居る。(藤森成吉)

新開地から野の林に入らうとする路の角には、

小さい酒屋があつた。初荷の酒樽が三つ四つ積まれた上に、赤い小旗が立て、あつた。櫛の垣が盡きると、日影が明かに照つた草叢があつて、萱や篠竹や脊の低い櫛の枯れた葉などがガサ／＼ざわついて居た。緩い斜坡をなした芝草地の上では、子供が繪扇や字扇を揚げてゐた。(花袋)

丘と丘との間に棟割長屋が一軒見え出した。路には靱殻が敷いてあつた。田の中には細い川が流れて居るが、一とこ大根や菜を洗ふやうに水が堰いてあつて、其の平らな静かな水鏡には、午後の晴れた空の雲が靜かに映つて居た。(花袋)

日が暮れるとすぐ寝て仕舞ふ家があるかと思ふと夜の二時まで店の障子に火影を映して居る家がある。

理髮所の裏が百姓家で、牛の唸る聲が往來まで聞える。酒屋の隣家が納豆賣の老爺の住家で、毎朝早く納豆々々と噺聲で呼んで都の方へ向つて出掛ける。夏の短夜が間もなく明けると、もう荷車が通り始める。ごろごろがた／＼絶間がない。九時十時となると蟬が往來から見える高い樹で鳴きだす。だん／＼暑くなる、砂埃が馬の蹄、車の轍に煽られて虚空に舞ひ上る。蠅の群が往來を横ぎつて家から家、馬から馬へ飛んで歩く。それでも十二時のどんが微かに聞えて、何處となく都の空の彼方で汽笛の響がする。(獨歩)

見ても濁つた、疲勞した色が少い。空が遠く續いて、すが／＼しい、仲々した心持になる……で、遠い……遠い處から響いて來る音が聞えるやうな廣い野の心持がする。空はゆるやかにその上にかゝつて居る。それを見て居ると、どうしても海の近い感じがする。遮るものがなく、空の廣い故かもしれないが、どこかに、一歩でも町を出端れると水のはてにある地平線が見えるやうな気がしてならぬ。黄昏には殊にその感じが深い。(葉舟)

橋が處々に架つてゐて、萱や薄の細い川を埋めるばかりに深く兩側から蔽つてゐる。秋が遅くなると、草刈が來て刈つて了ふので、白い尾花を見ることが出來ぬが、榛櫛が薄く紅葉して、小鳥が靜かな聲を立て

るので、盡きぬ興がある。此間に、寺もある、墓もある、別荘風の家屋もある、竹藪もある、垣に赤らんだ烏瓜もある。それに、此細い川が深く土を穿つて流れてゐるので、處々に小さい瀬をつくつて、都の近くにめづらしい感じを起させる。(花袋)

◇音響

すると突然聞えたのはたれかのピアノを打つた音だつた、「いや打つた」といふよりも寧ろ觸つた音だつた。わたしは思はず足をゆるめ、荒涼としたあたりを眺めまはした。ピアノは丁度日の光りに細長い鍵盤をひらめかせてゐた。あのアカザの中にあるピアノは。——しかし人かげはどこにもなかつた。

それはたつた一音だつた。が、ピアノには違ひなかつた。わたしは多少無氣味になり、もう一度足を早めようとした。その時わたしの後ろにしたピアノは確かにまたかすかに音を出した。わたしはもち論振りかへらずにさつさと足を早めつけた、濕氣をはらんだ一陣の風がわたしを送るのを感じながら。……(芥川龍之介)

しばらくして彼は、起ち上つて、両手を一杯にひろげて、ぐつと胸を突出しながら、深々と呼吸をした。それにつれて伸ばした両手を、目の前で、びしやりと合せた。その音は、小さく彼の耳を打つて、すぐ四邊に消え込んでしまつた。彼は、そんなことを幾度もくり返してゐるうちに、ふと、自分の小さい手で打

ち合つた音が、四邊のものとあまりに交渉がなさ過ぎるやうな気がした。咄嗟に反抗的な心持になつた彼は思ひきり強く手を打ち合つた。どこかで微かに反響したが、それつきり何の手應へもなかつた。(細田源吉)

早春の夜は、更けた。いつしかあたりは、静まつたけれど、おそくなつてからも、歩く人があると見えて、下駄の音が往來の上に、はねかへるやうに鳴つてゐるのであつた。(未明)

音響音はごつちやになつて低い天井へ渦を巻きながらがあつくと打衝かつてゆく。(長田幹彦)

(今野賢三)

夕日は、然し、永くは射してゐなかつた。頂上から消え去つたと思ふと、見る／＼山の若葉は動ずんで来た。そして、俄かに溪の瀬の音が耳に立つて来た。うすら寒い夕闇を感じながらもなほ其儘欄干に凭れてをると、何やらぱち／＼と物の燃ゆる音が聞え出

した。見れば、宿の前からとろとろ登つて行つた坂路の真中に、百姓の女房たちが二三人せつせと麥の粃殻を燃やしてゐるのであつた。(牧水)

森の終つた向うに、白樺の木立があつて、其の幹と枝との間にきら／＼と霧が閃いてゐた。誰か其の白樺の向うで手製の牧笛を吹いた。樂人は唯だ半ダズンの音を旋律には無頓着で、懶げに吹いた。其の音調は粗雑で且つ言葉で言へぬほどに退屈に響いた。

(チエエホフ・前田晁譯)

群を集めてしまふと、牧者は白樺の木に凭りかかつて、空を見ながら、大儀さうに懐ろから牧笛を出して吹き初めた。以前のやうに機械的に、まるで始めて牧笛を手に取りでもしたやうに、半ダズンの音だけ

を吹いた。で其の音は何の次第もなければ、想像の出来るやうな旋律も持たずに、のべたらに出て来た。来るべき世界の破滅のことをちつと深く考へてゐたメリトンは、其の音色をいやな不愉快な氣がして、止めればよいと思つた。高く鳴る笛の音の響へてそして消えて行くのは、まるで牧笛自身が心を痛めて恐れてゐてもしたやうに悲しんで泣くやうに思はれた。そして低い音は、霧や、灰色の空や、沈鬱な木立のことを話してゐるやうに思はれた。其の音色は、實際、天氣と、爺さんと、爺さんの言葉との爲めに作られたやうに思はれた。(チエエホフ・前田晁譯)

メリトンは河まで歩いた時に、緩やかに消えて行く牧笛の響を聞いた。すると、また泣き言を言ひた

くなつた。彼はあたりを物悲しげに眺めて、空や、地球や、太陽や、森や、ダムカなどを堪らぬほど可哀さうに思つた。そして牧笛の高い音が哀れに響へて耳に聞えて來ると、世界を遍く支配してゐる渾沌がひどく辛く思はれて氣がむしやくしやした。

高い音は顫へて、止んで、そして牧笛は靜かになつた。(チエエホフ・前田晁譯)

爺さんは續けざまに咳嗽をしては鉢の中へ唾を吐いた。咳嗽は長く後を引いてせい／＼云つた。が、一つひどくパンカを喜ばせたことがあつた。それは、爺さんが咳嗽をして息を吸ひ込むと、何やら胸の中が嘯くやうに鳴つて、色々の調子の歌を歌ふことである。

(チエエホフ・前田晁譯)

何の音もしない……やがて遠くの部屋で誰か『ああ!』と高い嘆聲を發した。と、ガラス戸が、恐らくは衣服室の戸が、しまつた……そしてまた全くしいんとなつた。(チエエホフ・前田晁譯)

村の方では村の娘達が、高い、少し兵隊染みた調子でうたつてゐる、文句などは聞分けられないが、一句々々の終りの一音が長く、美しく餘韻をひいて、丁度一人の男の力強い聲が響いてゐるやうに思はれる。急に、うたひ手が長いこと沈黙する、ヴァイオリンの快い音色がメロディを作つて靜寂の中へ溶け込んで來る、それに合せて誰か巧みに軽く小鼓を打つのが聞えて來る——ボン、ボン、カチ、カチ、ボン、ボン、ボン。(ラザレーフスキイ・白葉譯)

静かに、正しく食堂では時計が打つた、その打初めた時一同はそつとその重い響を數へた……出立迄の時は次第に短くなつた……そして室々は益々静まり返つた。(チリコフ・白葉譯)

オーケストラは鐵砲玉のやうに思ひがけなくはじまつて、ブカラ産の毛氈の躰せもので被はれてゐる喫煙室の長椅子の爲に、ソオダ水の空塵を集めて作つたやうな回教寺院のランプの爲に、一人の希臘の陸軍參謀士官の爲に、髪は黒い金モオルだらけの服を着た希臘兵の爲に圓舞曲を奏するのであつた。

夜が明けるがはやいかりブカの村の鐘はひつきりなしに鳴り出した。哀傷の響が瀟々とゆるく、その

鐘聲にもつれて、荒寥寂寞の野景を渡つて行く。心の底を深く洗ふ鐘だ。その鐘の音とともに温藉の涙、幽しい悲しみ、うるみ勝ちな心を抱いて人々は教會堂へと自らに誘はれて行く。夜は離れても霧が深いために曙は鉛の如く、しかも益々立ち罩める霧にうすれ、その霧を行く鐘の餘韻が遠く地平の彼方へと消えはてる。(レイモント・朝鳥譯)

其の繁華な町には、青い屋根を並べた上に光つたゴシック式の塔が方々に聳えてゐる。それは殆ど數へ切れぬほどで、雅致のあるのや俗悪なのやが聖堂の尖閣に依つて統御されてゐる。澤山の鐘は、其處から麗らかな朝毎に青空に響き渡つて、遙に快い鏗鏘の音を送つて来る。其の唐金の音色は、吹く風の或は強

或は弱きにつれて、乍ち遠く乍ち近く聞えて来る。

(モウパッサン・前田晁譯)

暗い、胸の悪くなるやうな恐ろしさが音楽から出て来て一同の上に擴がつた。音楽者の左の手はどうしても解けない結び目を結んでゐるやうに見えたが、右の手は、最高音部をあちこちと、焰のやうに、軽く小さく走りまはつた。それは丁度穴藏では何か氣味の悪いものが醸されてゐる時に、上では人々が焚松を燃して陽氣に騒いでゐるやうであつた。半ば叫ぶやうな溜息が、氣分の悪くなつた一人の婦人から聞かれた。けれども誰もそれには心を掛けなかつた。音楽者は今や全く低音に落ちて、其の疲れを知らない指はぐるぐると一緒に音をかきまはした。と、

冷たいぞつとする身震ひが一同の脊中を這ひ降つた。

所がこの、遙かな下で脅迫するやうな、唸るやうな響のうち、上の方へ出て行かうとする一つの運動が起り始めた。音は互ひに入り亂れて、踏み付け、踏み越え——上の方へ、常に上の方へ、けれども前へは進まないで、走つて行つた。其處には、さながら大勢の小さな、黒い姿の者が掻きむしつたり裂き合つたりしてゐるかのやうに、昇つて行かうとする凄じい争ひが、氣狂ひのやうな熱心と熱病のやうな性急が、手と齒とで撼んだり這ひ上つたりする音が、蹴る音、罵る聲、叫喚、祈禱の聲があつた——そして其の間始終音楽者の手は徐かに、痛ましいほど徐かに上の方へ這つて行つた。(ケラン・前田晁譯)

田舎

◇春・夏の野

淡青く柔かな色を漂はせた野の面は、まだ黄枯れた草に立ち去り兼ねた冬の姿が何處となく残つてゐた。明るい軽い日の光は廣々とした野を滑つて、草の根元へ沁み込んで行く。(孤雁)

田圃の一本路がうねりながら遠く私達の足元からつづいてゐる。そして末は朝霧のなかに消えてゐる。その一本路を、まつしろに洗ひあげた太葱を、浅い青竹の籠に盛つて、ゆたゆたと天秤で擔つてくる二人の

男がある。男が近くに來ると、強いねぶかの匂ひがふんふんと私の鼻を刺戟するので、思はず小さな嚏を二つばかりする。(夕暮)

青い生昆布を張りつめたやうな朝空に、ぼんやりあたたかい湯氣でもたちさうな裸の富士が、うす牡丹いろに朝日に染まつて、はろばろとつづく水田の向うに立ちはだかつてゐる。三月の深田には水がいつぱいに張られて、ところどころ落口からあふれてゐる。風でもあれば露の藁の青く萌えた畔を、さぶりさぶりと越えるであらう。(夕暮)

荒涼とした野が私達の前にあつた。幅の廣い、車の轍の深く喰ひ込んだ、昨夜の雨に半ば泥濘になつた路が、一直線に長く、一目では見通せぬ位に遙かに

山に向つてつけられてあつた。處々に林があつたが、それも次第に無くなつて、草藪の中に躑躅が赤く咲いてゐる。(花袋)

武蔵野の夏に於て特に目に立つのは砂塵の立つ事だ。若芽の木々に萌き出る頃——晩春から初夏にかけて、西北の風、山か海へ、野を横切つて吹渡る風の烈しいこと、武蔵野の中の砂地といふ砂地は悉く地皮を引きはがれるやうにして、濛々として天地を掩ひ包むやうな勢を見せる。(孤雁)

夕暮は何時の間にか過ぎて、もう夜になつてゐた。馬車の走るに従つて、麥の香の重く高い麥島の傍を過ぎたり、爽かな風の浪が、突然軟かく顔に吹きかかる廣い牧場の傍を過ぎたりした。空は煙のやうに田

◇秋・冬の野

風の立つ頃は、野は一層好かつた。收穫は半

園に降り立つてゐたが、やがて月が上つて、暗紅の色を見せる。(ツルゲエネフ・田中純譯)

午後は僕は野つばらへ出て行つた。そして穀物畑のなかへ青い皿のやうな具合になつて入り込んでゐる草地に腰をおろした。すいすいと並んで壁のやうに立つてゐる草の莖が、暑く強く匂つた。僕のまはりはぶんぶん云つたり、ひらひら飛び廻つたり、ちよろちよろと這つて行つたりする種々の生き物の些やかな營みがあつた。僕は兩方の目をつぶつた。(カイゼルリンク・中島清譯)

以上終つて、稲の束は既に野から家々の庭に移され、そこで唐蓑が動いたり粗が選りわけられたり、娘や若い細君達が、襷がけになつて働いてゐたりした。裏の杉の林は凄しく潮のやうな音を立て、紙屑や毛糸の屑が、それにつれて、何處までも街道を吹き飛ばされて行つた。(花袋)

日はもう暮れかゝつてゐた。際限もなく蔓つてゐる赤い草のあなたは薄い靄に包まれて、いくらか蒼くなりかけた頃である。明らかさまに眼に映るすぐ傍を能く能く見詰めると、乾いた土ではない。踏めば靴の底が濡れさうに水氣を含んでゐる。(漱石)

える。河がこのひつそりとした野原を流れてゐる。灰色の波の音の轟いてゐる沖の方へと流れて行つた。不穩な、又いつか降つて来るかも知れない雪空は、雲が重なり合つて、上の黒雲は眠としてゐるのに、下の白い雲は煙のやうに足速に野原の上を駆けて行つた。(未明)

野は段々寒くなつて行つた。霧の深く籠めた朝は朝日の影が金色をなして彩られた。木枯の吹く夜は松の嵐が潮のやうに鳴つた。二人は新しい年をこのさびしい幽棲に迎へた。(花袋)

黄褐色に霜枯れた石狩の原野は際涯なく小雨に煙つて、みるものすべて生氣を失つた冷たい黄昏の底に、ひろくと溢れた潮のやうな石狩川の河面が、

ほの白く浮き出して見えた。(長田幹彦)

この狐塚の上に立つてはるかに見渡す眺望はさすがに武蔵野らしい特色を持つてゐる。北から西、西から南にかけて、なだらかな傾斜を以て且つ高く且つ低く起伏しながら走つてゐる野は今冬の寂寥にはひつてゐるが、ところ／＼にこんもりと黒ずんだ森があつて、其處に一團、彼處に一團の人家の屋根は、穏かな村落の生活を暗示するものやうに静かに落ちついて見えてゐる。ほの白い炊煙が靄かとも見えるまでに野面を低く這ひ進んで、こもり勝ちになびいてゐるさまも平和である。(前田晁)

田舎町

障子を明けると、田舎町の裏らしい人家や畠が夕日に染つて、その向うにひろい關東平野を豫想させる長い赤褐色の丘陵が、形の好い松をその上に駢立させて、さながら塀のやうに連りわたつてゐるのを見た。赤い桃の花が畠の中に二三本雑つて咲いてゐるのも、私に田舎町の味はせた。斜に對した樹立の中の建物は警察署の裏に當つてゐるらしく、頻りに撃劍を習つてゐるシナヒの氣勢がした。(花袋)

有名な寺のある町と言ふよりも、山の町といふ感じを私は一番先に受けた。耳の立つた和犬、指物師の店、乾物屋、汚い旅館、のんきさうに子供を負つて

立つてゐる上さん、何年も挽いたことのないやうな壊れた車、さういふものが歩いて行く私の眼に映つた。それに町はS字形に折曲つてゐて、それを過ぎると、上に高く杉森と山の翠微とを背景にして久遠寺の山門が高く町に臨んで立つてゐた。(花袋)

町が少しづつ見えて来た。近づくに従つて、松の疎らに生え續いた丘陵を背にして、地面に押し伏せられたやうな雑然たる家々の家根が漸次とはつきりして来る。殊にその中でも、白壁が際立つて薄紅く輝いて、黄昏は夢みるやうに、ほのかに町の上に激んでゐる。(長田幹彦)

夕暮の町を通つて行つた。物賣の聲、近在から荷馬車や、荷車や、駄馬へ野菜物を積んで出て来た農

夫等の歸りを急ぐ騒ぎ、中學の學生が短い袴を着けて肩を怒らせて行く中を通ると、彼は以前皆自分が知つてゐた仲間のやうな気がした。袴の裾へ白く横に線を入れた女學生が二人、横町から出て、肩を並べて先きへ立つて行く。来る者も、来る者も、何だか自分の顔を見て「今時分なんだつて貴方は此處を歩いてゐるのです」と咎めるやうな気がして恥かしくもあつたが、また何となく、知らない人ばかりと定めてゐる東京の町とは違つて、逢ふものが皆懐かしいやうな氣もされた。(孤雁)

兩側の家は暗い穴の入口を閉ざしてゐるやうに黒い輪廓をわづかに雪のなかにあらはしてゐるだけである。人間が一人も、住んではゐないやうである。見

渡したところ、夜更けの町はあまりにも荒寥とした感じだ。街燈が點々と黄色い金屬的な光りをまきちらしてゐるのがわづかな色彩だ。若し、此の街燈がたゞ一つもともつてゐないとしたら、暗澹とした此の空の下に雪をかぶつて横はつてゐる此の町は死骸そのものではないか！(今野賢三)

◇村 落

私は顔をあげてはろばろと村々を見渡した。田圃と麥畑と竹藪と野の林と往還と田川との平面圖のなかに、ひとところうつすらと青く烟つた村があつた。山寄りの松林をうしろにした窪地で、竹がところどころになびきあつて、屋根屋根が黒く頭を出してゐるだ

けであるが、私はその青みがかつた霧の上に私の心を遊ばせてゐた。霧のなかに一つだけおほらかに屋根をみせて、桃の花を咲かせた家がある。(夕暮)

いかに静かな田舎であつた。かうしたところにも都會の文化の影響がやつて来るかと思はれるほどそれほど静かな田舎であつた。谷を窮めたところに坂があつて、その坂に添うて淡竹の藪がある。その藪の陰には鶏犬の聲が微かにきこえてゐる。かと思ふと、かうしたところに、かうした村があるかと思はれるやうな五六軒の人家がひよつくりあらはれて来て、それがまた次第に、私達を向うの谷地へと伴れて行つた。(花袋)

墓場を抜けて、葉の枯々になつた桑畑の傍を通

つて、ひろい野に行く路があつた。野には林があつたり、村があつたり、白壁がところ／＼に見えたりした。電信柱の並んだレール路には、をり／＼と汽車が白い煙を立てて通つた。夕日が秩父の山に静かに落ちる頃、清は一人でよく其路を通つて野に行つた。(花袋)

夕方になると、眞黒な家の軒から、夕餉の煙がむく／＼と白く太く上つて来る。夕顔棚、南瓜棚の下からは、若い父親が子供と一緒に、行水を使つてゐる聲が、樂しげに漏れて来る。夜は白地の浴衣に團扇を手にした男や女が、暗い家から晝の疲れなど忘れたやうな元気で、ぞろ／＼出て来て、南へ／＼と行く。南へ村を出はづれようとする所で、彼等を其處まで導いて来た秩父往還は、笛吹川を東へ渡る青梅街道と接続す

る。(前田晁)

かなり大きな村を通り過ぎて、ある川の流れに沿うて道が續いて居た。その川の下に見える松林の先が海で、その渡舟を渡ればもう私達の村の地内に入るのであつた。海は風ざらしかつたが、さすがに北國の冬の海の遠鳴りが、何處ともなしに轟々と響いて、思ひなしか空氣も鹽臭くなつたやうに思はれた。

(加能作次郎)

空にも山にも路にも橋にも、その住民にも、その使ふ言葉にも、アララギの緑の垣根にも桑畑にも否道傍に轉がつて居る小石にさへも、土の色にさへも彼女は恰かも赤ん坊のやうに驚異した。彼女のまだ知らない地上を見せて樂しませよう、と思つて居た私も、

彼女の知識が狭い都會以外にさつぱり達して居ないといふことを、よく嘸み込んで居た私も、彼女があまりにびつくりし餘りに知つて居ないのに驚かすにはおそれなかつた。さうして、私の今迄何の氣もなく見過して来た、昔に變らない故郷の多くの事物に對する彼女の純眞な驚きに依つて、それらに對する新しい原始的な興味を私が再び啜り返された。(藤森成吉)

下界は眼のとどく限り、茶褐色な田野で、それが丁度巨大な血かなんかのやうに縁が青黒い森で盛りあがつて居る。さうしてまたその巨大な血を貫通して丁度練絹でも引つばつたやうに、太陽に輝く一つの河の流れが、兩岸に赤楊や柳やを茂らせながらうねうねとして居る。その河は村の中央邊で、大きな長方形な

ものになり、それからまた山峽をとほつて北の方に流れて行く。谷の底のその長方形の水の溜りを繞つて村落があり、その營む果樹園には黄色の秋の太陽がさまざまな色彩に照り映えて居る。その村落から大森林のすぐ際まで長い帯の様に耕地が廣がつて居り、その間にはまるで網の様に縦横に道があり、道に沿ふところ必ず梨や小李やが繁つて居る。眼路一帯の色は灰色なのを、ところどころ黄金色の葉打豆が馨の高い花を咲かせたり、乾いた瀧の跡が燦銀の色に輝いたり、或は、静寂な砂道がそれを蔭するひよる長いポプラの並樹とともに遙かに山と森林とに達して居るので變化を添へて居るといふ有様だ。(レイモンド・朝鳥譯)

村ではもう毎日の働きが始まりつゝある。村人

達は特に此の朝の涼しい爽かさに一層活潑に元氣附いて見え、或るものは列をなして、耨や鋤や鶴嘴やバスケットや辨當などを持つて野畑を掘りに、或るものは車に把を載せ、種子の一つばい這入つた袋を持つて出かけ、また或るものは森に薪や乾草やをとり肩に草掻きを擔いで行くのであつた。大きな水溜りの兩側はいろ／＼な雑音が高まり、牧場に急ぐ牛馬がぞろ／＼動いて居る。犬が吠える。人が叫ぶ。夜の露ですこしは押し鎮められた土埃がもう道路の上では恐ろしく舞ひあがり初めた。(レイモント・朝鳥譯)

村は其處此處の納屋で打稗をやつて居る響より他は聞えぬ、死んだやうな静けさであつて、其の打稗の音すらも極めて稀だ。それよりも村人達は多く甘藍

の收穫のために出かけて行く。道路が泥沼に化し、その泥沼が小屋の軒にまでも及んで居るところに、時々霧のなかに幽霊のやうに人影がぼつと現はれ出て來るが、また朦朧のなかに消えてしまつて、たゞ泥道を足掻いて行くその木靴の音ばかりが聞えて來る。また時時甘藍を一つばい載せた車が、泥沼のやうな道の上をゆる／＼曳かれて行き、その物音に鷺鳥の群がおどろいて逃げるが、すぐとまた近よつて、こぼれて落ちた甘藍の屑つ葉を拾つて食はうと集る。

(レイモント・朝鳥譯)

◇漁村

私は松の中の祠の方から出て來た。静かな田舎、

半農生漁の村落、ところどころに黄い橙の鈴生に生つてゐるのがあつて、麥の青い芽が一面に遠く連つてゐるところなどもあつた。路は折れては曲り、曲つては折れた。全く漁村としか思はれないやうなところなどもあつた。やがて人家の間に碧く日に光る海が見え出して來た。(花袋)

折生迫はすぐれた漁村だ。これほど特色のあるチピカルな漁村は澤山はないと思はれる位である。庇の低い漁師の家、上つたり下つたりする石ころ道、銅色の肌をした漁師や漁師の鼻、生魚を一面に並べてわいらい嘖しく騒いでゐる朝の魚市、駄菓子を買つてゐる婆さん、あやしい女のゐる酒屋、さうしたゴタゴタした村の中を、そこで軌道から乗續いた馬車は静かに

海を塞いだ徒崖の方へと登つて行くのであつた。村を離れると、小さな谷があらはれて來た。そしてその谷には綺麗な水が流れてゐる。振返ると、折生迫の漁村の上に美しい海は展けて、青島がぼつたり繪のやうに浮んで見えた。(花袋)

低く孕んだ帆が海へと出て行つた。濁つた大きな川の岸には、船が幾艘となくかゝつて居て、大漁の模様の出た襦袢を着た漁師や、髪を無造作に束ねて大きな聲で子供を叱つて見る上さんや、日向で網の破目を繕つてゐる男や、粗朶の垣や、貝殻の屋根や、さうしたゴタ／＼したものの上に、此頃ではめづらしい暖かい冬の日が一面に静かにさし渡つてゐた。(花袋)

海濱に出て見るともう多勢の漁師達が彼方此方

に打群れて、忙がしさに出漁の支度をしてゐた。遅ればせのものは長い櫓や、漁具を擔いでぼつ／＼集つて来る、彼等は大方素裸體で日に焼けて黒ずんだ逞ましいその體は一種の誇りをもつやうに自由自在に立働く。準備の整つた船は一艘づゝ輾轉で渚へ引き卸され、砕ける波浪の中で軽く揺られながらシャン／＼柏手を打つと同時に、九挺の櫓拍子をそろへて、さつさと漕ぎ出す。朝風の海上には節面白船唄が流れて、體からは長い波紋が何處までも遠く曳かれてゆく。

(長田幹彦)

砂濱に繋された百艘近い大和船は、舳を沖の方へ向けて互にしがみ付きながら長い帆柱を左右前後に振り立てる。その側に、様々の漁具と辨當のお櫃とを

持つて集つて来た漁夫達は、言葉少なに物を言ひ交はしながら、防波堤の上に建てられた組合の天氣豫報の信號を見やつてゐる。暗い闇の中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の眼のやうにきらりと光つてゐる。赤と白との二つの球は危険警戒を標示する信號だ。

(有島武郎)

日暮方一しきり涼しい東風が、海にしまきを立てたが、それも何時の間にか止んで了つて、廣い灣内はとろりとして音もない。今宵も點された數點の漁火が闇の中に浮いて居た。

太助の家は一列に海に面した漁村の端に寄つた所にあつた。麻の葉を燻した蚊遣の烟が家一ぱいに立罩めた中に、太助は薄暗い釣洋燈の下にセツセと網を結い

て居た。女房のおみのは其側に並んで麻苧をうむで居た。家は明け放してあるので、坐つたまゝ海が見渡された。(加能作次郎)

舟は岸を離れ、入江を出て、だん／＼村から遠ざかった。海は穏かで、正午頃の残暑の陽光がざりざりと背に熱かつた。顧みると、海岸からすぐ高い崖の様になつた急な傾斜面の凹みに、周圍を木立に包まれた百戸足らずの家が、まるで小石を摺んで置いた様にかたまつて居た。其の上へ日光が直射して、所々の白壁などがきら／＼光つて居た。小じんまりとした美しい畫の様だつた。(加能作次郎)

田園

のんびりした地勢に耕地と耕地の續いた工合は見たばかりでも心地が好い。土の色の感じも柔かい。山の上の麥畑などは、深い雪に埋れてゐる頃にも、こは残雪の塊すらなく、麥の芽が豊かに延びて、青々としたのを見るも楽しい。(藤村)

見れば男女の農夫、そこに親子、こゝに夫婦、路に揚る塵埃を滿身に浴び乍ら、我劣らじと奮闘をづけて居た。靱を打つ槌の音は地に響いて、稻抜く音に交つて勇ましく聞える。立上る白い煙も處々。雀の群は時々空に舞揚つて、騒がしく鳴いて、聽てまたばつと田の面に散り亂れるのであつた。(藤村)

草原を切り開かれて、麥畑が所々に出来てゐる。その人の力の加はつた跡が却つて一種の寂しさを見せてゐる。麥の葉は恥かしさうに互に寄り添ふやうにして、少しの風にも揺れてゐる。他から侵入して來るいら草でもあるならば寧ろ悦んで同棲しさうな風をしてゐる。切り擴げられて、地皮の面を天日に曝してゐる畑の畝は、眩しさに耐へず、何物かゞ來て何處かに根を張つて呉れるのを待つてゐる。(孤雁)

徑を挟んで、水に臨むだ一方は、人の小屋の背戸島で、大根も葱も植えた。竹のまばら垣に藤豆の花の紫がほか／＼と咲いて、そこらをスラ／＼と飛交はす紅蜻蛉の羽から、……いや、その羽に乗つて、糸遊、陽炎と云ふ光ある幻影が、春の闌なる如く浮いて遊

ぶ。(鏡花)
 彼等は雨を藁の蓑に避けて左手に持つた苗を少しづつ取つて、後退りに深い泥から股引の足を引き抜き、植を退く。かうして宏潤な水田に、一日泥に浸つた儘でも愉快さうに唄ふ聲が、そつちからもこつちからも響くと共に、段々に浅い緑が掩うて、多忙で、且つ活潑な夏の自然は先に植ゑられた日から漸次に深い緑を染めて行く。(長塚節)

静かなひろ／＼とした山の中の田園がひらけて來た。陸稻、甘藷、蕎麥などの栽られた島、周圍をゆるやかな線で取巻いた山槽、流れは見えずに何處かできこえてゐる谷の微かな鳴咽、八月の夏の盛りではありながら、何處となく涼しい山の氣が漲りわたつて、

長い眞直につゞいた路の向うに、遠く山に添つて人家の白壁のごたごたに簇つてゐるのが、さながら水彩畫でも見るやうに一目に見わたされた。(花袋)

冬の初の光るやうに青々と晴れ渡つた日を浴びて、まだ芽生えのせぬ廣い麥畑の野は遠くにつゞいてゐた。どんな農産物をも容易に生育しさうな肥えた土は、しつとりと氣持よく黒ずんで、その處々に取り残された大根の緑の葉の色が霜にもめげず、鮮かに野の色を彩つてゐた。(秋江)

小さい溝に沿つて、人家を離れると、町の兩側は田圃になつて、その果てには雑木や人家などが、黒つばい鼠色がつた霽のやうなものに包まれてゐた。道が少し廣くなると、崩れかけた土藏や、古ぼけた家

のある通りが、また僅かばかり續いた。その家々の間からは、廣い田圃が覗いてゐた。(細田源吉)

田舎道

私は門の小路の方へ倒れた花を踏まないやうに足を浮かせて歩いてみた。傾き勝ちな小路の肌は滑かに青く光つてゐた。その上を細い流れが縮れながら蟲や花瓣を浮べて流れてゐた。すると私の足は不意に止つた。私は亂れた花の上へ仰向きに倒れた。冷たい草の葉がはつしと頬を打つた。雨が降るといつも私はそこで止るのだ。(横光利一)

暗い、一人通らない道は、土手について大きな邸の方へ、まただら／＼に曲つた。一體が浅い谷間

になつたやうな場所だつた。この土地の案内の看板が目立たしく立つてゐて、そこから埃捨場のやうな、底の乾いた池の縁について、冬枯れの樹木で埋れた深い奥の方へつゞいてゐる道などが見えた。(細田源吉)

彼の前には、草の中に隠された白い雛菊を照らしてゐる日光の雫で斑にされた、人の心をそゝのかすやうな路が横はつてゐた。それは果てしもないやうに見えた。そして全くしんとしてゐて淋しかつた。

(モウパッサン・前田晁譯)

馭者は急いで驅つた。始め彼等は、ひろびろと打ち開いた大きな庭のある一列の醜い建物を通り過ぎた。その邊は何處も彼處も暗かつたが、一つの窓から輝いた明りが柵を通してちらついてゐた。そして、大

きな一棟の二階の三つの窓は、空よりもつと蒼白く見えた。それから後は、彼等はひどい暗闇の中を走つた。其處では草の濕氣の匂ひがして、木立がさらさらと戦いだ。すると馬車の音で目を覺まされた鳥が籬葉の中で動いて、驚かされて、不平をいふやうな啼き聲を擧げた。それはまるで、キリイロフの息子が死んだことも、アボオギンの細君が死にかけてゐることも知つてゐたものゝやうであつた。彼等はちよつとした木立をさつと通り過ぎて、矮林を過ぎた。池が、大きな黒い影で横切られて、光つた——と馬車は平坦な原を向うへ軌つた。鳥の啼き聲はすつと後の方から微かに聞えてゐたが、やがて全く止んでしまつた。

(チエエホフ・前田晁譯)

温泉場

山谷の温泉場には、梅が咲いてゐた。大きな夏蜜柑や橙が熟してゐた。いかに南國らしい感じがありに漲りわたつてゐた。私はひとり静かに四目垣の外を歩いた。坂になつてゐるやうなところを歩いた。夜は明るい月が静かに山合の温泉場にさし込んで来た。(花袋)

湯は透明で如何にも綺麗だ。私は久しぶりでうきうきした心持になつた。そして、静かに現在を味ふ餘裕もなく、また来よう、夏はなほ好からうなどと、すつかり樂天家になつてしまつた。それでも、手足を伸ばして、ぢつと湯の肌ざはりを味つてゐると、極を

落ちる湯の音がしたり、遅く着いた私の爲めにお膳を用意してくれるのか、器の觸れる音などが聞えた。私は、そこに大きな冬の天地のあることを感じた。

(原田實)

十疊の部屋は、東と南と北とに中庭を控へてゐるが、風通しが悪く、決して涼しい部屋ではなかつた。が、二階の中央に位してゐて、浴客の形勢を觀望するには至極便りがよかつた。

南の庭を隔つて向ひの部屋に、素人にしては餘りに粹過ぎる女性が其の母親らしい老女と二人で頻りに三味線を鳴らしてゐた。それと隣つて、間の襖さへ外して相往來してゐる老夫婦があつた。その老女は細帯のしだらな姿をして

よく廊下を通つた。

北の庭を隔つて向ひの部屋からは、衣桁に懸けた女の帯や色彩鮮かな長襦袢の模様などが私達の目を捉へた。葭簀の衝立の影からは赤兒の泣聲も聞えて來た。時々、銀木犀の香が部屋を廻つて漂つて來る。

(前田晁)

◇寺院・古蹟

古びた寺の内部は空虚な洞のやうに暗く且つ静寂であつた。本堂に接した遠い茶の間の方では、息づまるやうな空氣の中に、柱時計が折々ほぐれて單調な退屈さうな時を打つた。ぽと／＼と眠氣を誘ふやうな水滴、それから留守居の老婆の食器を洗ふ物音などが、

ひそやかに庫裡の方へ聞えて來る。(白石實三)
東光院の堂塔は、汽車の窓から山の半腹に見えてゐた。青い木立の中に黒く光る葺と、白く輝く壁とが、西日を受けて、今にも燃え出すかと思はれるほど、鮮やかな色をしてゐた。長い／＼石段が、堂の眞下へ瀑布を懸けたやうに白く、こんもりとした繁みの間から透いて見えた。(小劍)

汚い百姓家の立ち並んだ田舎道を辿つて行くと松や雑木の生え茂つた丘の裾に荒れはてた廢寺が残つてゐる。それが千幾百年の昔、光仁、桓武兩帝が、國家鎮護のために御勅願になつた秋篠寺である。今は庫裡も鐘樓も山門も昔の跡形もなく廢滅して探ぬるすべもないが、僅かに金堂のみは雨打風淋幾千幾百年の星

霜を経て尙ほ残存してゐる。私は強い春の日を浴びながら、鈍さうな寺番の老婆に案内されて金堂の中に入つていつた。けれども私は、その内陣の本尊よりも、何よりも、特別保護建造物なるその金堂の建築の様式に何ともいへない快感を感じて、古く歩き耗された花崗石の石廊に立つて、やゝ暫く低徊しながら、建築の與へる快感に耽つてゐた。(秋江)

段々近づくにつれて、寺の様は歴々と眼に映つた。森の中に本堂が見える。庫裡が見える。山門から通じた長い鋪石道がそれと指される。鐘樓の小さい釣鐘も見える。山門の白壁の扉は殊にはつきりと目に立つた。(花袋)

古寺は大概荒れ果て、破れた扉から裏手の亂

塔場がすつかり見える。東になつて倒れた卒塔婆と共に青苔の斑點に蔽はれた墓石は、岸といふ眼界さへ崩れてしまつた水溜りのやうな古池の中へ、幾個となくのめり込んでゐる。無論新しい手向の花など一つも見えない。古池には早くも晝中に蛙の聲が聞えて、去年のまゝなる枯草が水にひたされて腐つてゐる。(荷風)
見渡すかぎりリイの原だ。その、むせかへるやうな香芬にかけるひながら、はるか向うの高原に聳えたつ蜃氣樓のやうな暗赤色の洋館。
天使園だ。女子修道院だ。私はそこに充ちる高い匂ひにあこがれて來たのだ。天國の匂ひ、童貞の匂ひ、原罪なくして孕んだ聖母の匂ひ、ミサの匂ひ。
奇蹟に集まる非人のやうに私はその建物に歩み寄つ

た。私のやうな駱駝でも、もしや天國へゆく針の目が通れるかと念じながら。そこで私は、何を見、何を聞いたか。

尖頂にきらめくクルスのみしるし。かたく閉された門。はるかな窓に時折星のやうに見え隠れする童貞たちの此世ならぬ姿。そして、厳しく鳴りわたる祈禱の鐘。

その響、その光のすべてに私は痛ましい「拒絶」のこゝろを感じたのだ。私は絶望した。その草原に伏し倒れて、よごれた肢體を青草にこすりつける惨めな私。聲を放つて泣いたけれど、一滴の涙も落ちないのだ。私は、あきらめて、とぼとぼと歸つた。(橋爪健)

喘ぎ喘ぎ石ころの山道を半里も上つた。城址と

云はるゝ程あつて、平たい地面に所々大きな石が半ば土に埋もれて、真中に小さい稲荷の祠がある。四邊には枝の小さい松の木が五六本疎らに立つてるのみで、草花一つあるでもない。(白鳥)

入口の庭で、人は動物の足跡を見ると、生の残りか、猶この場所へ通つてゐるのを感じる。やがて何處の廢墟にでも見るやうな、崩れかゝり、倒れかゝつた玄關を通り越すと、僧堂に出る、茨や丈高い草の纏合つた角地の周圍を繞つてゐる、長い、低い、まだ雨蔽ひも壊れずにある遊歩場へ出る。私は世界の何處の場所に於ても、この舊い氣味悪い僧堂のやうに、この眞に僧侶等の歩き廻つた場所のやうに、私の胸を壓する鬱幽な重さを感じたことはない。確かに、この迫持

の形や、この場所の配置やが、私の情緒をそゝり、私の心痛を増し、そして、建築の或る快い部分の巧みな曲線が、私の目を悦ばせると全く同じやうに、これ等のものゝ私の視力に及ぼす働きで、私の魂を悲しませる。(モウパッサン・孤雁譯)

◇墓 地

春の末で、こんもりとした青葉が、數多の墓石の上へ涼しい影を置いてゐた。要垣は日光に赤く燃えて、此處で、線香の煙が陽炎のやうにゆら／＼と空へたち昇つた。磨き立てた半靴で、墓場の中の乾いた道を静かに歩いて行つた彼の心には、誰しも墓地を訪れる時に感ずる、あのしつとりとした、潤ほやかな哀愁

の念が襲ひかゝつた。(谷崎精二)

要垣の緑葉に囲まれた墓があるかと思ふと、深い苔蘚に封じられた墓があらはれて来た。新しい墓もあれば古い墓もある。或は五輪塔型、或は多寶塔型、其他いろ／＼な型がある。或は倒れてゐるものもあれば、長い間の風雨を平氣で凌いで来たらしいものもある。中には、その墓石の表面に佛像の刻まれてあるものなどもあつた。彼は立留つて、一つ一つその墓を撫で、行きたいやうな氣がした。(花袋)

そこはまるで無縁塚で、どんな人間が埋められて居るのか、時と共に全く忘れられ、たゞ凶惡な聲を出す鳥の群ばかりが訪ふて居るに過ぎないところである。草叢が悲しげにざわ／＼と鳴つて、そこ此處に倒

れさうに傾いて居る朽ちた十字架を拂つて居る。此の無縁塚のやうな一隅こそ、此の村の忘れられた古い祖先が、家族を並べ村落を連れ、時代を重ねて埋められて居るのだが、誰も来て祈禱をあげ、涙を流し、燈明を捧げるものが無い。風のみが徒らに枝を動かして、最後の枯葉を拂ひ、それを夜の闇空の果に送り消してしまふ。(レイモント・朝鳥譯)

住居

◇家屋

坂の中途に、お城風に築かれた高い石垣の上に、

少し奥に引込んで家が建てられてあつた。松だの梅だの、楓だの、彼岸櫻だの、植つた小じんまりとした庭を前に控へ、後にはこんもりと茂つた孟宗藪を負うて居た。そして石垣の中間から、Z字形に曲つた石の段が、庭の間を縫うて入口へと導いて居た。鼠色の壁の塀の中央を切り抜いた様な感じのするその入口の前の生垣には、山茶花が白く咲いて居た。入口の左右の壁には、煤竹を二本横に渡した楕圓形の小窓が開けられて居たが、その窓は恰も此家の兩つの眼の様に見え、瀬戸物屋と瓢箪屋としかないその邊で、この別荘風な建物はたしかに異彩を放つて居た。(加能作次郎)

其の邊には、一體にかなめの生垣を繞らした、氣樂さうな、小綺麗な住宅が竝んで居た。茶の湯の宗

匠でも住まひさうな、庵室めいた風雅な普請だの、市内の豪商の別邸でもありさうな、廣々とした庭を圍んで、奥床しい板塀の構へなどが、ところどころに入り交つて、油のやうに光つてゐる緑樹の新芽と其の鮮かさを争ふやうに、新築の木の香を漂はせてゐた。

(谷崎潤一郎)

旅舎はしんとしてゐた。客といふものは一人もなかつた。三階の一番好い室に私等は勝手に押通つた。欄干に凭れると、櫻の葉の日に照る間から溪流が美しく光つて、ざアと流るゝ音が屋を撼かすばかりに聞える。西の小窓に、日影がくつきりと射して、蠅が一疋ブン／＼音をさせてゐる。裏の障子をあけると、庭には古い大きい梅が今を盛りと咲亂れて、碧の晴れた空

にくつきりと捺したやうに鮮かに見える。鶏が二三羽遊んでゐた。(花袋)

卓の上には置きランプが、うす暗い光を放つてゐた。その光は部屋の中を明るくすると云ふよりも寧ろ一層陰鬱な効果を與へるのに力があつた。壁紙の剥げかかつた部屋の隅には、毛布のはみ出した籐の寢臺が、埃臭さうな帷を垂らしてゐた。それから卓の向うには、これも古びた椅子が一脚、まるで忘れられたやうに置き捨ててあつた。が、その外は何處を見ても、装飾らしい家具の類なぞは何一つ見當らなかつた。

(芥川龍之介)

それはさう聞くまでもなく、一見して新婚の若夫婦の部屋であることが明かだつた。六疊の間で、一

方の壁に沿うて新しい箆笥や鏡臺などが置かれ、床の間に接して青い羅紗を掛けた机と、小さな本箱とを置いてあつたが、隅の衣桁に、赤い裏の着物や赤い紐などが打ち掛けてあつたり、友仙のメリンスの掩ひをかけた鏡臺の上に、白粉や香水の瓶などが並んで居たり、机の上に小さな飾り附の手鏡や緋縮緬の肱突などが置いてあつたり、箆笥の上などに色々女持の小道具を載せてあつたり、床の間に九谷焼の花瓶に赤い椿の花を投げ入れにしてあつて、その側に小型の置時計がかちと音を刻んでゐたりしてゐるなど、部屋中の様子が、またその空気が、何となくほや／＼の花嫁の匂に充ちて居るかと思はれ、一種艶めかしい気分さへ感ぜられた。そして部屋一ぱいに、枕元にほんの少しの空

地を残したのみで、紡績物ではあるが、まだ新しい揃ひのふか／＼の暖かさうな二組の夜具が、男女二つの床を並べて敷きつめてある光景は！（加能作次郎）

いつもなら筵を敷いてある筈の上り口の八畳の廣間には、特に疊が敷かれてあつた。その中程に切られた大きな圍爐裏には炭火が熾んに青い焔をあげて居た。眞鍮の自在鍵にかゝつた鐵瓶には湯がちん／＼と煮えたぎつて居た。縁側の障子には午過ぎの陽光が一面に射して、取り片附けられた部屋の中はからりと明るく廣やかに、見るからに暖かさうであつた。鐵瓶の口から出る湯気が縁側の障子に影をつくつて居るのも如何にも春めいて長閑であつた。（加能作次郎）

眼の前の火鉢の灰が凝つて、小石のやうにごろ

ごろして居るのがたくさんあつた。火箸も立たないだらうと思つた。私は姉の家の生活状態がそこにも見られ得るやうな気がした。私はそこら邊を見廻すのを氣味悪く感じた。それほど亂雑に穢なく見えた。片隅の壁際に米さんの道具箱とお君の仕立臺とがあつて、そこに小さな鏡餅が盆にのせて飾つてあつた。が、そこに脱ぎ棄て、あつた誰かの前垂の紐が、その鏡餅の上に這うて居た。私は一般にかうした亂雑な穢ない濁つた中に生活して居る者の精神状態——道義心といつたやうなことを考へた。（加能作次郎）

玄關のすぐ隣が六畳の座敷で彼はそれを客間とも書齋とも寢室ともして居た。その次が六畳の茶の間で、長火鉢や茶棚や箆笥などがごた／＼置かれてあり、

そこと臺所との間に女中部屋であらう今一つ三疊か四疊半の小さな部屋があつた。南が寒がつて居り、東の方が家の割にしては廣い、木石の布置の整つた庭になつて居たが、そこは崖を利用して作つたので、部屋の中から眺めると、屋根の庇と向うの崖の端とがくつついて居るやうに見える、而もその崖の上の海鼠張りの亞鉛塀の内側には、質屋か何かの大きな黒壁の土蔵が建つて居るので、日當りも悪く、風通しもなく、陰氣な、胸を壓迫されるやうな感じを與へた。（加能作次郎）

どの寢臺にもどの寢臺にも自由に歩行の出来な様な傷ついた患者ばかりが寝て居た。併し重症患者らしいものは少かつた。病室の一方の隅に私と前後して同じ日に入院した全身火傷の患者と、それと對ひ

合つて、頭から顔にかけて眼ばかりを残してすつかり
 縋帯に包まれ、咽喉笛の所に孔をあけて、そこから漸
 つと呼吸をして居る見ろも傷まじげな患者とが、時々
 苦しうな呻き聲を立て、居るばかりで、他の多くは
 足を一本切られたとか、背中の大きな腫物を切開した
 とか、身體こそ自由に利かないがもう患部の痛みなど
 の去つた、恢復期に向つた人達ばかりであつた。彼等
 はお互にすつかり親しい友達であつた。彼等は寢臺の
 上に起き上つて、隣同志や、向ひ同志などで、快活
 に病氣とは全く關係のない世間話や經驗談などをして
 笑ひ興じてゐた。彼等の話振りを聞いて居ると、少し
 も病人らしい様子などはなかつた。退屈な懶さはあつ
 ても、生活の苦しみや悲しみなどはありさうに見えな

かつた。そこには陽氣な暢氣な話だけしか取り交され
 なかつた。最も陰慘で苦痛や悲哀の多かりさうなその
 病室は、明るい温かい空氣に充ちた最も楽しい世界の
 様に見えた。(加能作次郎)

そこは手術室であつた。けれども此の前の手術
 室とは構造や設備の全く異つたものであつた。三方薄
 鼠色の壁に仕切られて、高い磨硝子張りの天井から射
 し入る鈍い光線にほの暗くされた大きな箱の様な、ま
 た深い穴の底の様な室の中央に、細い組板の様な簡單
 な手術臺に黒い桐油紙を布いたのが二脚、捨て床几の
 様に置かれてあるきりで、廣い其の室はがらんとして
 居た。私は先づ其の室の嚴かな空氣に壓せられた。私
 の心は石の様になつて了つて、固い冷たい手術臺に載

せられても、殆ど何等の感動を覺えなかつた。

(加能作次郎)

窓に當る西日は白い窓掛に遮られてゐたが、そ
 れでも室の中を妙に明るくしてゐた。そしてその明
 るみで室の中が一層狭苦しく穢く見えた。一間の床の
 間の上に、中味の空しくなつた古めかしい箆笥が一つ
 振えられて、その横の片隅に藥瓶や病床、日誌やらが
 雑然と置かれてある。六疊の室は病室には少し狭かつ
 たのである。箆笥の上のせられた白い草花の鉢と、
 瀬戸の圓い火鉢の鐵瓶から立ち上る湯氣とが、妙に不
 安な氣持ちを傳へた。(豊島與志雄)

それは小さな病室で、唯だ三つの寢床があるば
 かりであつた。第一は明いてゐて、第二がパンカの寢

床であつた。そして第三には、いやな目をした爺さん
 が坐つてゐて、のべつに咳嗽をしては鉢の中に唾を吐
 いてゐた。パンカは自分の寢床にゐながら、明け放し
 である戸の間から他の病室の一部を見ることが出来
 た。其處には二つの寢床があつて、一つには、瘦せた、
 非常に青ざめた男が、頭の上に彈性護謨の膀胱を載せ
 て横になつてゐる。もう一つの床には、一人の百姓が、
 腕を擴げ、頭には縋帯を巻いて、まるで婆さんのやう
 な姿をして坐つてゐた。(チエエホフ・前田晁譯)

戸は開いた。中は非常に大きな高い部屋で、平
 原を見晴らしてゐる窓の爲めに一ぱいに明るかつた。
 古代の掛布が壁を蔽うてゐた。入口の左手にある、二
 個の石人に依つて守護された大きな爐は一日に百歳の

櫛の古木を燃すことが出来さうであつた。そして大きなテエブルが、上に書物や、新聞や、雑誌などを載せられたまゝ、この部屋の中央を占領してゐた。部屋はいかにも廣く堂々としてゐたので、それが忽ち目を奪つて、注意は暫くしてから其の持主の方へ向けられた。其の人は、彼等がはひつた時に、優に二十人は寝ることの出来さうな東洋風の褥椅子の上に身を伸ばしてゐた。(モウパッサン・前田晁譯)

其處には何といふか立派なランプが明るくともつて、緑色の皮でおほはれた飾り氣のない家具を照らしてゐた。金色の額縁にはひつた二つのめづらしい版畫を除いては、室には花や裝飾らしいものはなにもなかつたが、軍艦の上に見るやうな清潔さが眼にとまつ

た。(ラザレーフスキー・白葉譯)

◇庭園

秋本はしばらく黙つてゐたが、いつも夜ばかりお訪ねするんで庭を見たことがありませんがと言つた。

「詰らない庭です、まだ見ませんでしたかね。」
梨翁は雨戸を二枚開けて電燈を庭土の上に照して見せた。古い城下町のこのあたりは人家の庭から庭への垣根をくぐる小さい流れがあつた。音はきこえないが水明りが見え、夜の樹の匂ひが冷たい夜氣に酸っぱく流れこんで、落葉樹があることを念はせた。(犀星)

秋は次第に深くなつた。時雨の度に色を變へた

樹木の落葉は、しきりなく微かな音を立て、冷い土に降りそゞぐ。香の高い花を持つ樹を好んで植えた庭は近年手入が行届かないので廢園のやうに荒れてしまつたが、木犀の強い花の香は、蒸されるやうに濕つぽく張りわたつた。(水上瀧太郎)

簡素な藁葺の門の彼方に、本堂とも草庵ともつかない、さゝやかな住居があつて、待合の門口にでもありさうな小粋な行燈——木で造つた燈籠の下に、山吹が夕闇の庭を照らして咲いて居る。奥の方から、しきりに犬を制する女王の聲が聞えて、玄關へ出て来たのは五十あまりの體格のガツシリした、器量の醜い尼さんである。(谷崎潤一郎)

朝眼を覺ますと、寢室の窓を開いて、裏庭に咲

いて居る花壇の花をうつとりと眺めやつた。此のひと夏の間に、倦む色もなく咲き通して居た百日草と蝦夷菊の花が、煙草の吸ひ殻のやうに萎れてくちやくになつて、脂色に褪せてしまつた傍に、新鮮な葉鶏頭と日向葵の花とが水で洗つた如く美しく芽えて居る。

(谷崎潤一郎)

庭には重たい春が徐々と來てゐた。桃、椿、枕丁花、木蓮、櫻、と順々に懶く咲いて行つた。それに楓の赧い芽、樺の淺黄の芽が入り交つて、部屋部屋を少々小暗く取り卷いた。そこには人事とは無關係な、自然の懶い心なさがあつた。(犬養健)

イギリス風に設計された、陰氣でいかめしい古い邸園が、家から川の方へ約一露里位だら／＼下りに

廣がつて、其の果ての峻しい粘土の土手には、老手の足に似た裸根の松の木が澤山生えてゐた。下には淋しい流れがきら／＼と光り、上には鶴が沈鬱な聲を立てながら飛びまはつてゐた——すべては、一口に言ふと、客の心を誘つて、腰をおろして小歌を作らせるやうに思はれた。(チエエホフ・前田晁譯)

所が花園と果樹園とは、苗床と共に八十エカア位を占めてゐたが、全く異つた感じを起させた。天氣のごく悪い時でさへ、晴々と輝いて嬉しい氣持をさせた。かやうな珍らしい薔薇や、百合や、椿や、チュウリップや、目覚めるやうな白から煤のやうな黒に至るまでのありとあらゆる色と種類との無数の開花植物や、——かやうな花の富をばコウリンはいままで曾て

見たことがなかつた。春はまだ始めであつたから、非常に珍らしいものはガラスの下に隠されてゐたが、すでに小徑や苗床には、可愛い影の國を形づくるに足るだけの花は咲いてゐた。そしてすべてのもの、最も美しいのは、朝早く、露の玉があらゆる花瓣と葉との上にきら／＼と輝いてゐる時であつた。

(チエエホフ・前田晁譯)

庭園の隅に、高塀にまともに向いて、吹き晒しの亭が立つてゐる。塀を後にした大きなアアチ形に、緑色の格子を組立てたばかりといふ極めて無造作な建て方だ。亭全體は其處に生えてゐる葡萄の樹で蔽はれた。それは、左の方からまきついて、アアチ形の屋根を越え右の方へ其の嫩い枝を垂れてゐる。(ケラン・前田晁譯)

◇浴場

湯槽のふちに仰向の頭を支へて、透き徹る湯のなかの軽き身體を、出来る丈、抵抗力なきあたりへ漂はして見た。ふわり／＼と魂がくらげのやうに浮いてゐる。(漱石)

明るい午後。——十月下旬特有の静かで、しかもちいつと焦げ染むやうな光りが、摺ガラスの窓一面にあたつて、一坪半ほどの小さつぱりした浴室の内をあか／＼と愉快さうに輝かしてゐた。その、眼を細めさせる明るさの中には、女らしい香ひを含んだ、軟かな、ふは／＼とした白い湯氣が、よろけたり戯れついたりしてゐた。流し場の溝口では、たつた今、うつくし

い肌、三四杯も立てつゞけにかけられた湯が、流れのこつて、ぼし／＼と滴つてゐた。

浴室の内は、しばらくしんとなつてゐた。そのうちに、心からのやうな、深いなやかな吐息が漏れ、湯槽の中では湯がばち／＼と喧いだ。それからまた、しんとなつた。(細田源吉)

節句の前の夜で、男の兒の生れたものは居候でも巾が利く、と云つたやうな爽快な氣象が風呂場にすら溢れて居る。湯槽には多勢若い男が入つて居る。可愛い草の香もする。べつたり身體へ附着いた菖蒲の葉を取つて、それを嗅ぎながら湯槽の縁へ左右の腕を掛けた。(藤村)

乗物

◇船

ある日、私は便船があるのでそれに頼んで乗せて貰った。大きな船である。船頭は若い屈強な男が五人も六人も乗った。ワツシヨ、ワツシヨ、かう言つて押して辛うじて海に浮ぶと共に、船頭は力を盡して、舟にある限りの櫓を並べて押した。何とも言はれず勇ましかつた。やがて暫く行つたところで、船頭は帆を張つた。かなり強い追手であつた。凄じい波を舷側に立て、舟は駛つた。(花袋)

白いペンキ塗の汚れた通運丸が、煙突からは煤煙を漲らし、推進器からは水を切る白い波を立て、川を下つて行く。甲板の上には汚れた白い服を着たボーイが二三人仕事をしてゐる。——白い煙が細くズツと立つと思ふと、汽笛の尖つた響が灰色に曇つた水の上をけた、ましく響き渡つた。(花袋)

船は恰度山中の湖水をゆくやうである。島々の裾には蒼煙が棚曳いて居る。大空高く晴れて西天の餘光水の如きあたりに宵の明星が大きく輝いてゐる。其光の長く水に映れる方向に船の舳が向いて居る。動くともなく船は動く。近づくともなく前の島が近づく。吹くともなしに潮風が船の進行につれて面を拂ふ。清涼の氣が海面に行きわたつてゐる。處々に白帆が見え

る。さすがに風は吹いてゐるらしい。(獨歩)

夏が暖かな晝と長い、明るい夜とを持つて来た。過ぎて行く蒸気船の煙は穏やかな海の上に長い黒い縞となつて棚引いた。帆前船はばたばたする帆で吹き送られて、視界から消え去るのに殆ど一日かかつた。

(ケラン・前田晁譯)

船員は皆な非常な元氣であつた。海風を呼吸したり、またもや脚下に船の動いてゐるのを感じたりするのはいかにも爽快な氣持であつた。實際、老いた横帆二端船自身までが上機嫌であるやうに見えた。出来るだけ深く波の間にもぐり込んで、要もない泡を上げた。(ケラン・前田晁譯)

一面に生ひ茂つた葦がさらさらと音を立て、擦

れ合ふ間に、狭い通路が出来てゐて、其處を、底の平たい小舟を棹で推しやるやうにして漕いで行くと、死んだやうな水の上を音も立てずにゆらゆらと漕つて、葦を掃つて先へ進んだ。(モウパッサン・前田晁譯)

イギリスのスクウネル船が二艘、赤い旗を空に靡かして行つた後へ、立派なブラジルの三本マストの船が来た。それは眞白で、不思議に清く輝いてゐた。わたしはそれにお時儀をしたが、何故であつたか其の譯は知らない。唯だ其の船を見たのが、非常に愉快であつたことだけは知つてゐる。(モウパッサン・前田晁譯)

河には無数の小舟が通つてゐた。長くて細い快走艇は、日に焼けた皮膚の下に筋肉の轉がつた腕をむき出しにした漕手の揃つた櫂拍子に、すうツと飛ぶや

うに進んで行つた。それに乗つてゐる女達は、青か赤かのフランネルの着物に、やはり赤か青かの蝙蝠傘を頭の上に擴げ持つて、燃えるやうな太陽の下に輝かしながら、小舟の艦の方の舷掛椅子に凭りかゝつたまゝ、動かずに眠つたやうな姿勢で、まるで水の上を浮んで走るやうに見えた。(モウパッサン・前田晁譯)

諾威型の帆船の氷のやうに冷たく光つて見える帆桁が、つい近頃消えたばかりの雪のことを思ひ出させるのであつた。冬の寒さよけにした紙の目ばりのまだはがしてない二重硝子戸のはまつた窓の高さの所に船の帆が眺められた。夕風が吹いて對岸の小島の所でしきりに波をさか立ててゐた。小島の岸はゆるい傾斜面をなして海の中へ下りてゐた、その上に光明丹塗

料と夕日と光とが赫々と燃えてゐるやうに見える塗りかへたまゝの小舟が數隻、船舶修理臺に乗つて海の方へと滑り下りてゐた。(モオラン・堀口大學譯)

◇汽車

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍らしく見送りの人影さへ跡を絶つて、唯檻に入れられた小犬が一匹、時悲しうに吠え立てゝゐた。(芥川龍之介)

發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じ

じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がする／＼と後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。所がそれよりも先にけた／＼ましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく、車掌の何か云ひ罵る聲と共に、私の乗つてゐる二等室の戸がかりりと開いて、十三四の小娘が一人慌しく中へはいつて來たと同時に、一つづしりと揺られて、徐ろに汽車は動き出した。(芥川龍之介)

汽車は品川にちよつと寄つた切りで、すん／＼進行する。闇のうちを、折々どこかの燈火が、流星のやうに背後へ走る。忽ち稍大きい明りが窓に迫つて來て、車ははためきながら、或小さい停車場を通り抜ける。(鷗外)

電車・其他

音もなく二つ三つ小さな停車場を過ぎてしまつた。もう窓から外を見ても、都會の響き、青、紅の燈火が見られなかつた。窓に近く迫つて、林や、藪が黒く突立つてゐるのが、夜の空の裡にくつきりと濃く浮き出てゐた。(未明)

汽車は武藏野へ出た。平野の暗闇を劈いて走るので、車輪の音が一層大きく聞えた。それが遠くなるかと思ふと、又自分の身體の上へ突掛るやうに大きくなる。天井から下つた薄暗い洋燈の光を見詰て居ると、汽車は前へ進むのか、後へ退るのか分らない。(森田草平)

◇電車・其他

須田町で電車を乗換へると、今度の電車は更に

混亂して居て、全く身動きもならないほどだった。太った男、よぼ／＼した老婆、白粉の香をふんと漂はせた、盛装の美人、さまざまの男女が釣革に提つて立つて居る彼を前後左右から押しつけた。彼の鼻は多くの人々の生温かい息を嗅がされ、彼の手や足はいろいろの男女の手や足と觸れた。(谷崎精二)

夕日の橙黄色に残つてゐる空に透かして、最初に觸角を現はしてそれから甲羅を出して、胴を出して、這ひ寄つて来た電車が見える。電車は薄黒く見えてゐる。針金がしゅうと鳴り出す。それからかうといふ音がする。やうやう其札に丁度僕が志ざす先が書いてあるのが讀めた。ちん／＼と云つて停留場へ来て留つた。(鴨外)

馬車が一臺、停車場のある某町から客を三人乗せてカラ／＼と通つて行く。微かになつた夕暮の餘照と、カンテラの光とを受けて御者の顔は闇の中にまだ朧ろげに浮いて居た。もう喇叭を吹くでもなく、馬に鞭を加へるでもないで、疲れ切つた馬は、驅けるといふよりも寧ろ歩くといふ調子で、覺束なく車臺を引摺つて行く。車輪の街道の小石に軋る音は、馬車の黒い影が見る／＼闇の中に没して了つた後までも、ガタガタと静かな田舎道に聞える。(花袋)

街を蠟石を積んだ荷馬車が、ゴトリゴトリ幾臺も續いて行つた。

「馬車に乗らう」

一郎さんと私とは遊戯を止めて一番後の荷馬車の後

へぶら下つた。手が疲れるとつかまつた儘足を降して馳つた。それも疲れて来ると、到頭車の上へ匍ひ上つて腰を掛けた。

後で蠟石の山がゴツゴツと揺れて鳴つた。そして私達は見知らぬ街が眼の前に展開される喜びに夢中だった。(加宮貴一)

歩道のふちと並べて置いてある客の自働車が世にも奇怪なる型を競うてゐた。或るものは大砲であり、或るものは快走船であり、或るものは浴槽であり、或るものは飛航船であつた。中にはまた大急ぎで三鞭酒の空箱をかぶせたやうなものもあつた。

(モオラン・堀口大學譯)

第七章 動物

獸

◇犬

丁度淋しい狭い通りに出た時である。生垣や冠木門などが、まばらな軒燈の光りにちらちらと私達の眼に入つた。そして何處からか一疋の兒犬が出て来て私達の足下に鳴きながら走つて来た。

「可愛い、犬だね。」

私達は其處に屈んで、尾を振つてゐる犬の頭を撫で

たり、脊中を軽く叩いたりした。兒犬はしきりにさうする私達の手を舐めようとした。それを巧みにかはしながら、私達はいつまでも兒犬をあやしてゐた。

(豊島與志雄)

そつと屈んで兒犬の頭を撫でてやりながら、その眼の中を見入るやうにした。たゞ黒く濕んだ瞳が其處にあつた。それは母の乳を求むるやうに愁訴と哀願と欲求と無知とに光つてゐた。然しその光りの底に解くべからざる深い洞空があるやうであつた。

(豊島與志雄)

更に、その部屋の中で目ざわりなのは、同じ毛並の、同じ形をした二疋の狎であつた。狎のことであるから、見たところ形は小さいのであるが、二疋とも

可成り老年らしかつた。二疋の相違をいふと、他の一疋はひどく行動が不活潑で、注意して見ると、兩目の玉が白く霞がかゝつてゐるやうに見えるので、聞くとき、明き盲目なのださうである。然し、二疋とも、犬といふよりは、それ等の古風な道具の中を這ひまわつてゐる蟲のやうに見える點が共通してゐた。(宇野浩二)

二人は往來に出た。水のやうな秋の霧だつた。二人が五六間歩くと、西洋人も犬を連れて店を出て來た。それから一歩一歩大跨に足を踏んで、二人をサツサと追ひ越して行つた。透きとほつたその雨外套が、目に見えぬ狭い通の霧の感じを強めた。犬はそれぞれ往來の右左に寄道して、瓦斯燈のほけた光の下に現れたり、又影になつたりして遠ざかつて行つた。(犬養健)

白い犬は首を長く前に投げ出して、埃でよごれた春の雪が消えのこつてもゐるやうに地に匍匐してゐた。この犬の顔は老いをあらはしてゐた。家畜といふよりは人間に近い貌をしてゐた。ただ眼だけは赤かつた。その赤い眼をとろりとたたへて私の顔を映してゐるやうに見えた。(夕暮)

私は庭に蹲居んで犬をよんだ。向うから白い塊がころけてくる。と、家畜特有の匂ひが私の頭にやんはりとはつて、仔犬は鼻を鳴らしながら私の手さきに纏はりつく。(夕暮)

フラテは急に駆け出して、蹄銀冶屋の横に折れる岐路のところで私を待つて居る。この犬は非常に賢い犬で、私の年來の友達であるが、私の妻などは勿論

大多数の人間などよりよほど賢いと私は信じて居る。で、いつでも散歩に出る時にはきつとフラテを連れて出る。奴は時々思ひもかけぬやうなところへ自分をつけてゆく。で近頃では、私は散歩といへば、自分でこへ行かうなどと考へずに、この犬の行く方へだまつてついて行くことに決めて居る。(佐藤春夫)

其中にお腹も飽くなり、親の肌で身體も温まつて、溶けさうな好い心持になり、つい昏々となると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地には狼狽て又吸附いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なく昏々となつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。(二葉亭)

赤斑の可愛い小犬がゐた。何處かその近所で飼つてゐるらしかつた。いつも其處等をぶらぶらしてゐた。大きな犬の通るのを遠く離れて吠えてゐたりなどした。朝は日の當つた扉の處に蹲踞んで、茶色が、つた可愛い眼で此方を見てゐた。雨がその垂れた尾に降つてゐる時などもあつた。(花袋)

よく見ると、この憐むべき犬は、羽根の無い鳥のやうに、更に妙な形をして居る。白い毛は汚れてびつたりとからだにつき、其尾は短く切られ、其上に耳が頭にひつついて、全體にまるで裸のやうにひだのないからだをして居る。それに其目の餓ゑて居るやうな光！少しも柔かみのない顔！(葉舟)

ドナルメジオスはかの女の牝犬を抱いてゐた。

犬は耳で女主人の膝を被うて、さびしげな目つきで、敗類期の寶石のやうに丹念につくられた金具のついた靴をはいた女主人の小さな兩足を眺めてゐた。(モオラン・堀口大學譯)

◇猫

僕の家にはクロといふ猫がゐる。腹の下と、四ツ足と鼻のあたりが白いだけで、あとは眞黒な猫だ。鼻の下に黒い毛がまるでカイゼル髭のやうな形に生えてゐる。それが爲に、非常に愛嬌のある顔になつてゐる。厭にとりすました、出来損ひの貴婦人のやうに、つんとした顔が、飛んでもない、愛嬌を持つてゐる。猫は哲學者だといふが、全く愛嬌のある哲學者だ。人間の

そののやうに、冷たいいかつい感じは少しも持つてゐない。(古田大次郎)

大人になつたクロは、いつの間にか戀人を作つた、戀人ではなく戀猫を作つた。家の物置の中へその戀猫を連れて来て、一時住まはせた事がある。戀猫は尻尾の長い虎のやうな條のある猫で、先づ野良猫にちがひなかつた。その猫は子供を連れてゐた。澤山の子供の内の一匹が母親と一緒に物置の中に住むやうになつた。外の兒猫は如何したのか、僕は知らない。その母子は、家の臺所にやつて来て、クロの御飯として出してあるお皿の飯を母子で伸よく喰べてゐた。少時して、母猫はどこかへ行つて終つた。兒猫だけ残されたので仕方なくこれも家に置いてやつた。可哀さうにこ

の兒猫は眼が兩方共たゞれてゐた。眼薬をつけてやつたが、よくならなかつた。この兒猫はその後父の友人の所に貰はれて行つた。屹度そこで可愛がられてゐることだらう。(古田大次郎)

能く小猫を見ると、一匹は三毛の雌で、一匹は茶色の斑點がある雄である。茶色の方は少し肥つてゐて、クル／＼した鼈甲色の眼が可愛いらしい。ちよつと三毛の方を手にとつて、茶の間へ伴つて来ると、未だ知らぬ大きな世界の明るみの中へ出たやうに、次第に尻込して、なるべく薄暗い場所へ隠れやうとした。(梅溪)

臺所のベンチの下に、小さな箱が、ステパンがストオブを焚く時、コオクスを入れる爲めの箱があつ

た。この箱から猫がちつと見てゐた。その鼠色の顔には、ぐつたりと疲れ果てたさまが見え、その瞳の黒く小さい緑色の目には、力なげなあはれな色が見えた。……その顔付を見ると、彼女の幸福を完全にするに唯だ一つの事の缺けてゐたことが分つた。それは彼女が心も魂も打ち込んだ子供達の父親が其處にゐないことであつた。彼女はにやおと鳴かうとして口を大きく開いたが、やつと出すことの出来たのはしゆうといふ音ばかりであつた。……猫兒が鳴いた。

(チエエホフ・前田晁譯)

◇牛

汀にゐた牛の群は、何かに驚いたやうに、密集

してゐたのが少しく擴がつて動き初めた。二三疋は向岸の方を傳つて、急いで歩き出した。その後から子牛が四五疋駆け出して續いて行くのが見える。それを見てゐると、何となく静かに群れてゐた牛が、異なるものを見て其静かな心が破れたのらしく思へた。私達は其儘歩いて來ると、群の中から、こちらに向つて大きい白牛が歩き出した。(葉舟)

二人は無言で前面を見つめたまゝ立つてゐるとその白牛は啼きつゞけながら、次第に近づいて來た。やがて三四間前に來ると立ち止まつて私達の方に、其無器用な長い顔を向けた。長く鋭い角は左右に嚴めしく備はつてゐて、肥えふとつたつや／＼しい身體は、この野に養はれて其自由を遮るものもないやうに見え

る。その満身の思ひを籠めた大きい目は、ここにある。思ひがけぬ人の姿をいぶかしむやうに、じつとこの二人の人間にそゝがれた。(葉舟)

そのうち、こちらに向つて來た白牛が、歩きながら首をあげて、長く啼いた。それに答へるやうな聲が湖の向うからすると思ふと、後の藪からも又一聲、群の中からも一聲、湖畔はこの自由な綱につながれてゐない獸の聲が四方から起つて、死んだやうな自然に向つて心のまゝを求める聲が、あちらからもこちらからも反響を起すのであつた。(葉舟)

静かな冬の夕暮、一群の牧童が、乳を搾りに牝牛をつれ戻す爲め禿山の上を木の生ひ茂る頂の平地を目蒐けて進んで行く。彼等が高く上れば上るほど、愈々

遠く海が見渡される。そして幾時か経つと、落陽を受けて、脇腹の赤い、美しい牛が、一條の絲のやうになつて、頸につけた鈴の音を響かせながら、遙かな峯を越えてくる。(ポイエル・宮原晁一郎譯)

◇馬

徑の上の方の草山の頂に近く、馬が一群、長い頸を伸ばして餘念なく草を喰つてゐる。おういと下から大きな聲で呼びかけると、大きな眼をあいて、じつと視線だけは此方へ向けるが、嚙んでゐる口は草から放さず、ざつ／＼とつゞけて居る。(孤雁)

驚いたのは、歩き始めた二頭の馬である。萬歳の叫びは、前からも、後からも、嵐のやうに襲ひかゝ

ない様子をしてゐる。或は絶えず何物にか驚いてゐるやうにも見える。人が行くと逃げるでもない逃げないでもないといふ態度で寄つて来る。(抱月)

藪の中の小徑を小急ぎに下つて行くと、がさつと音がして先きに飛んで行くものがある。見ると、小さな兎だ。枯草色をした一匹の兎が、小徑を二三十間も先きまで馳けつて行つては道端の笹藪の下にまるく身を固めてゐる。二三度さうやつてゐるうちに何處へか隠れてしまつた。(孤雁)

小溝の縁をちよこ／＼と駆けて来て、おつちるやうに水の中へ飛びこんだ。うす黒くて、小さくて、眼にもとまらない早さだつた。鼠だな！と思つた時は、もう見えなくなつてゐた。(土屋長村)

鳥

◇雀

霜が降りた。夜が明け初めると間もなくその日は晴れ渡るであらう。山々の枯れた姿の上には緑色の霞が流れてゐた。……一疋の空腹な雀は、小屋の前に降りると小刻みに霜を蹴りつつ、垂れ下つた笹戸の間から小屋の中へ這入つていつた。……雀は一粒の餌さへも見附けることが出来なかつた。で、小屋の中を小聲で囀りながら一廻りすると外へ出て来て、また茶畑の方へ霜を蹴り蹴りびよんびよんと飛んでいつ

た。(横光利一)

春は葦の芽の角ぐむ頃から、寂びれはてた水郷の匂も次第に濃やかになつて、柔かに紅みざした瓏銀のやうな空あひの中を、雁も歸り、燕も来、そここゝの水面からは、夜明などは潤ひの深い水蒸氣が立ち、井堰の音までがおのづと温かになると、寒々しい雀の聲がまた急に浮き立つやうに、此處の藪、彼處の枯葦の間から湧き出て来て、ぼつぼつと、身軽い四五羽も飛び立ちます。其の軽く水を掠めてゆく羽ばたきにも今更に匂はしい土のかをりが煙つてゐて、如何にも春が来たなと思はせます。(白秋)

雀

裏の家主の家の屋根に射してゐた日ざしは、もう薄どんよりと淀んで、白壁のぼろけかゝつた倉の庇

の下に、雀の子が小さくこゝんで、日の暮れるのを見つめてゐるやうに、時々小暮くち／＼と啼いてゐる。(鈴木三重吉)

私は並木道をすつと眺めて、一羽の子雀を見出した。嘴のあたりと頭の下の方は黄色だつた。それは巢から落ちたのだ(風が強く並木道の赤楊をゆさぶつて居た)そしてまだ半分しか成長してゐない羽を、徒らにバタ／＼とさせて、動くことも出来ないで居た。(ツルゲエネフ・草野柴二譯)

一羽の雀が犬小屋の上に丸くなつて蹲つた。羽根の中に頭を縮めて、目を細くして、何事にも興味のないやうな風をした。が實際は何處に穀物が積まれてあるかに抜目なく氣を付けた。春の大きな雀合戦の時

には鞠の真中にゐて、中でも優れた奴とつき合つて叫んだ。がそれ以來まじめになつて、今は妻や子供達のことを思つたり、冬に對してどういふ物を貯へて置いたがよいかといふことを考へたりした。

(ケラン・前田晁譯)

忽ち二羽の雀が雙方から烈しく衝突した。と其餘の者も急に飛び立つて、すべての小さな鞠は一つづつ次第に大きな鞠に固まつた。それが藪の下から轉がり出して、非常な騒ぎで少し空中へ登つた。と見るうちに一と固まりになつて地上に落ちて、忽ちばらばらに碎けて了つた。すると何の音をも立てずに、小さな鞠は急に銘々勝手に飛び出して、間もなく牧師館の附近には一羽の雀も見られなかつた。(ケラン・前田晁譯)

鴉

家の前には赤土の土塀があつて、土塀の側には冬枯れの柿の樹が立つてゐた。一羽の鴉が曲りくねつたこの柿の枝に栖つてゐた。彼は何を思つてゐるのか、時々枝から枝に飛び遠くを眺めて何か物を訝るやうに首を傾け、そして小さくカア／＼と獨言を言つたが、それからもう久しい間身動きもしないで、ぢつと一つ處に栖つてゐた。それはまるで、枯枝に黒い一つの果實が實つてゐるやうであつた。戸の閉つてゐる小野の家は、囁のやうに黙つてゐたので、鴉は終日枯枝の上に栖つてゐた。(坪田讓治)

私は物珍しく思ひながら、暫く細流の側に佇ん

でその行動を見てゐたが、その中何うしてだつたか、その鴉は鶏の群を離れ、流に渡されてあつた板片の上を渡つて、すぐ私の足元へ寄つて來た。そして恰も私に向つて何か食餌を求めらるやうな様子で、如何にも馴馴しく私の顔を見上げながら、ガアガアと二聲三聲啼いた。その啼聲の青つぽいのと、口の中の赤いのとで、それがまだ子鴉であることが分つた。(加能作次郎)

鴉

で、一群の落葉林を指して飛んで行つた。(孤雁)
上下になつて二羽棲まつてゐる。上の一羽は何をか食うて來た嘴をこくり／＼と、踏まへた枝に擦つてゐる。一羽はもう飛び立たうと構へてゐる。うに尾をびくり／＼させながら見渡すかぎり水害の路をその儘に冬ざれて氷の張つた下界のかち／＼の水田を見廻してゐる。(鈴木三重吉)

鴉

りした太陽が、無限の深淵からのぼるかの如く輝かな
姿を現すけれど、何處か東の方からさ迷つて来た鴉の
類ひは、淋しくそのめぐりに輪を描いて飛びまはり、
または田野の上を低く長く掠めて過ぎ行き、啼く聲が
張がなくて嘆いて居るが如くである。

(レイモント・朝鳥譯)

黒い鳥の群は愈々数が澤山になつて行つて、人
人はたゞそのあまりに仰山な群が殖えるのに呆氣にと
られてしまふ程である。なかにはすつと地に近いとこ
ろに降りて飛んで居るものもあるが、空一めんがまるで
煤が舞ひあがつた如くに無数の黒点でもつて満たされ
て居る。それがほとんど一度に地に低く降りて来る時
の、翼の音、啼き聲などの喧しさ！ まるで暴風が俄

然として迫つて来たかのやうに、物凄の大雑音の渦巻
をつくり出す。そしてまたその暴風がさつと懶いやう
な気分で過ぎて行つてしまふ。また村の上に輪を描い
て、丁度、龍巻風が澤山の枯葉を舞ひあげるやうに群
れて飛ぶ時もあり、その群が流れて、耕した田の畝々
を掠めて行つたり、森の梢に集つたり、骸骨のやうな
葉のないポプラの並樹の上に漾つたり、教會堂を蔽つ
て居るしなのきのあたりに屯したり、墓場の寂しい樹
の枝にとまつたりする。(レイモント・朝鳥譯)

◇燕

燕は春になつて忘れずに歸つて来た。もう櫻の
花が散りかゝつて、北の青い海の色が日にまし濃く紺

青となる時節であつた。けれども戸が閉つてゐた。燕
は一夜家根裏の戸口で悲しみ明かした。長の旅路の疲れ
を、樂々と古巢に歸つて慰めることが出来なかつた。

(未明)

二疋が代り／＼飛び出して少らくおいて射るや
うに歸つて来ては、糸にでも掛り下つたやうな恰好に
なつて、古巢の直き側の椽へ何か口で一寸と喰ひつけ
ると復すぐに逃げ出すやうに飛んで行く。「ちつ、ちつ
と叫んで駆け出ると、もう何處へ逸れたか影も見えな
い。(鈴木三重吉)

キテクは梯子をとり出して、檐下にある燕の巢
を探つた。鳥好きの彼には、此の寒い朝、ひよつとす
ると、巢のなかの燕の子供が凍えて死にはすまいかと、

気がかりになつたからである。巢には五六羽の小燕が
凍えて動けないで居る。で、そつと抱いて彼は襦衣の
下にいれ、胸のへんの肌で温めてやつた。

(レイモント・朝鳥譯)

◇鳩

白鳩は向側で私の部屋と同じ三階に少し西に寄
つた窓の緑色の籠に飼はれて居た。聖靈のやうに眞
白な鳥は、末廣のやうな尾を擡げたり、羽撃をしたり、
玉を呑むやうな鳴聲をしたり、退屈な風もせず目
を送つて居た。朝自分の目醒める頃は大概籠はもう窓の
外に置かれて居た。弱い春の日があたると、鳩は小さ
な頭を縮めて目を細くした。(有島生馬)

らずにきいてゐるうちに、雲雀のこゑがいつ知らず微かに微かに空になびいた晚霞のなかにとけ込むやうになつて、ふときこえなくなつて仕舞つた。(夕暮)

足の下で雲雀の聲がした。谷を見下したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。只聲だけが明らかに聞える。せつせと忙しく絶間なく鳴いて居る。方幾里の空気が一面に蚤にさゝれて居たゞまれないやうな気がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。のどかな春の日を鳴き盡くし、鳴きあかし、又鳴き暮らさなければ気がすまんと見える。其上どこまでも登つて行く。いつ迄も登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登りつめた揚句は流れ雲に入つて、漂うて居るうちに形は消えてなくなつて、只聲丈が空の裡

に残るのかも知れない。(漱石)

春はとても来さうもないやうに見えた。四月はずつと北風が吹いて夜は霜が降つた。それでも眞晝のうちには、太陽が暖かに照つて、四五疋の大きな蠅がぶん／＼と飛びまはり初めたり、雲雀が名譽をかけて、今が夏の最中であると言ひ觸らしたりするほどだつた。

けれども雲雀は天が下で一番信用の置けない奴である。たとへば夜いくら凍つたところで、霜はちよつとでも日光に逢へばけろりと忘れられて了ふ。すると雲雀は歌ひながら、ヒイスの上を高く天の方へ昇つて行つて、腹の減つたことを思ひ出すまでは止めはしない。そこで今度は歌ひながら、其の歌に羽ばたきで調子

を附けながら、大きな圓を描いて徐ろに降りて来る。が今少して地面となると、びたりと翼を載めて、まるで小石のやうにヒイスの中へ落ち込んで了ふ。

(ケラン・前田晁譯)

◇千鳥・鷗

鴨川の夜を思ひ出す度に、そこで冬の夜半を寒気に凍えながら、悲しい聲で鳴きあかす千鳥を思はずにはゐられない。冷たい河原の石に立ちつくして血を吐くやうな聲を絞りつゝ、仇し戀路に迷ふ戀人の寢覚めにもと、夜もすがら鳴きあかすあの聲。東山をば京の町の動かぬ生命とすれば、鴨川は實にその町の心を流れる美しい抒情詩である。その抒情詩に脈々として

悲哀の脈動を興へるものは、夏は蓬の草叢にすたく虫の聲々、冬は千鳥の歎歎である。(長田幹彦)

チチチチと千鳥はまた啼いた。川の上をあちらこちらに渡ると見えて、聲は遠くなつたり近くなつたりした。

折から空は眞暗に曇つて雨催ひであつた。闇の中の千鳥の在所を何處と知る山はなかつたが、しかし朗かに啼き交す千鳥の聲はしみじみと旅情をそゝるに十分であつた。(前田晁)

其處には千鳥が何羽も足早に駆けまはつてゐた。其の脚はまるで櫛の齒のかけらのやうに見えた。(ケラン・前田晁譯)

て来た。それは寒夜を求めて廣い世界を漂泊して歩く
寂しげな海鷗の悲鳴で、雪よりも白いその群は幻のや
うにひら／＼と氷海の面を飛び迷つてゐた。(長田幹彦)

石ころかと思つたのが生きた鳥で、ぶらぶらと
歩いて行く二人の直ぐ爪先から鴉や鷗がさもさも退
儀さうにバサバサと鳴る羽ばたきを立て、凧のやうに
飛び立つた。何の加減かその朝はまた莫迦に夥しい鷗
の群だつた。南洋か何處かの海邊のやうですね！ な
ど、瀧の細君が形容した。(牧野信一)

鷗は寄せて来る大浪がすうツと脚を拂つて行き
さうな濱邊を歩いた。丁度道のぬかる天氣の日に年寄
の女がするやうに、頭をすくめ、餌袋を突き出して、
中々に容體振つてゐた。(ケラン・前田晁譯)

◇雁・其他

何時晴れるともない灰色の圓窓のやうに、周囲
を高く山でとり繞かれて、まるで割られた天井のやう
なこの頃の空の彼方に、多くても十五羽勢ければ唯の
三羽くらゐづつ、玩具の飛行機のやうに行儀よく列を
聯ねて、たまに淋しい聲で合圖をしながら、極く静か
に村の沼に降りて来るのは雁だ。雁は丁度先を急ぐ軍
隊の行軍のやうに、永くは私の村には滞在しないのだ。
先發隊の一行が空に時ならぬ淋しい聲を聞かせた日か
ら、村の沼地に宿營して、朝早くその先發隊は出發す
る。そして次の日、或はその翌日、新しい列がまた村
の空に現はれて、沼地に降りて宿をとる。それがまた

朝は發つて行く。かうして村の沼地が、可憐な彼等の
遠い羈旅の宿營地に選ばれるのは、二十日か、たかだ
か三十日かだ。彼等は一體私の村を過ぎて次には何處
へ宿をとるのだらう。(細田民樹)

無人の國のやうな寂寥は、その白樺の樹立を中
心として刻々に四面に彌漫し、唯時々姿は見えずに、
渡り鳥の悲しげな悲鳴だけが、遠い空を渡つてゆく。
私は心を絞られるやうに寂しくなつて、日の沈む遠方
の空を睨めながら、いつまでも、いつまでも、ぼんや
りしてゐた。(長田幹彦)

安さんは、田の畔の枯草のなかに身を埋めて、
すつかり枯草いろになつてゐる鴉を、眼でみるよりは
鼻でかき出す。鴉のほのかな匂ひを枯草の葉の匂ひの

なかからかきあてて、そつと弟の市さんに眼くばせす
ると、静かに肩から網をはづして二人で畔の枯草の上
に茶つぼい色をひろげて行く。鴉は安さんに見つけら
れると、大抵身がすくんで仕舞ふさうだ。そして、安
さんの顔ばかり見てゐるうちに、いつか、網をかぶせ
られて仕舞ふ。はじめて氣がついて、重い體をばたば
たと一二尺とびあがるところを、安さんはにたり笑
つて手をゆるめると、くるくると網が自然に鴉の體に
まつはりつく。(夕暮)

私は雑木林の端れに一人おかれた。頬白が来た
ら「ほーい、ほーい」と聲をあげて追ふのである。追
はれた頬白は驚いて、はらはらと向うの方へとんで行
く。すると向うの木の下でも私と同じやうな伏兵がお

て「ほーい、ほーい」と聲をたてる。頬白は驚いて他の方へとんで行く。(夕暮)

鶺鴒は少しも馴れなかつた。馴れないばかりでなく、餌を全く食はない。そして柳堂がゐないと逃げようとし、騒いでゐるが、彼を見ると直ぐ、箱の隅へ行つて、彼方向きに凝つとしてしまふ。

柳堂は氣をもんだ。最初隣から貰つた鮓や小鮓をやつてゐたが、食はないので、今西に鱈を買はせたり、沼から蜻蛉の幼蟲を捕つて來さしたりした。が、鶺鴒はそれをも食はうとはしなかつた。竹の棒で、凝つとしてゐる鶺鴒の足元へそれらを寄せてやると鶺鴒は驚いて、急にばた／＼騒いだ。そして今度はちがう隅へ行つて又同じやうに彼方向きに凝つと立つて身動きせず

る。

柳堂はその驚く様子や、隅へ行つて扱たやうに凝つとしてゐる様子が、猶且、十四五の小娘のそのやうに思はれて仕方なかつた。(志賀直哉)

文鳥は膨らんだ首を二三度縦横に向け直した。やがて一團の白い體が、ほいと留り木の上を抜け出した。と思ふと綺麗な足の爪が半分程餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つ繰り返りさうな餌壺は釣鐘の様に静かである。流石に文鳥は軽いものだ。何か淡雪の精の様な氣がした。(漱石)

文鳥はぱつと留り木を離れた。さうして又留り木に乗つた。留り木は二本ある。……其一本を軽くふまへた足を見ると如何にも華奢に出来てゐる。細長い

薄紅の端に眞珠を削つた様な爪が着いて、手頃な留り木を旨く抱へ込んでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換へてゐた。(漱石)

秋らしい冷たい喙をあてる小鳥の身動きに、季節の氣持が自ら絡り動いて居るやうに見える。小鳥の一舉一動が、いかにも軽い快い中に、秋の持つた引きしめる氣分がそれに伴うてゐる。(薰園)

花の咲く頃から水鳥はもう來なくなつたが、小鳥は目に見えて數がふえた。常緑樹の繁みにこもつて鳴き立てるのを、外から眺めてゐると、まるで一枚一枚の葉が唸りを立ててゐるやうであつた。彼等の咽喉が破れて、血を吐いて地に落ちて死なないのが不思議

に思はれる位に、囀り立てた。(木村毅)

その時、奇態な泣き聲が、路に迷うてうろついてゐるものゝやうな鳴き聲が頭の上を渡つた。火影はそれが鳥であることを示した。凡そ何物と雖、冬の日その曙光がまだ地平線上に現はれぬ前に、姿を見せもせず、迅速に餘所々々しく薄暗い空を駆けて行く生第一聲ほど人の心を動かすものはあるまい。この凍つた曉には、鳥の翼に運ばれて行く叫び聲が、この世の靈の太息であるかのやうに思はれる！

(モウパッサン・前田晁譯)

ヒイスの上には田鼠が翼をひらくと動かしながら飛びまはつてゐた。春があんまり不意に追附いたので、彼女はまた巢として適當な場所を見附ける遣を

持たなかつた。で、土手の上の平たい所の真中へちかに卵を生んだ。それでは駄目だといふことは自分でも十分に知つてゐたが、今更どうすることも出来なかつた。(ケラン・前田晁譯)

ホテルの庭に、芝生のまん中の小さな泉水の傍に、宿の主人が客を喜ばせるために買つておいた一羽のみすぼらしい兀鷹がゐた。それはしつかりした好い縄でとまり木に結はへ着けられてゐた。けれども太陽が上からまともに暖かく照りつけると、それはペリュウの雪の巔のことや、深い谷間を越えて行く強い羽搏きのことやの考へに沈んで行つて——そしてそのうちに縄を忘れた。

ばたばたと雄々しい羽搏きを二つすると、いつも縄

はぼんと張りきつて、兀鷹はもとの芝生の上に落ちてしまふ。と其處で暫くの間休んでから、ぶるツと身を振つて、また其の小さなとまり木の上に攀ち上る。

(ケラン・前田晁譯)

蟲・魚

蛙

蛙は假死の状態から離れて軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして空を仰いで見る。さうして彼等は慌てたやうに聲を放つて其長い睡眠から復活したことを空に向つて告げる。(長塚節)

見てゐる内に、緑色のその蛙は、灰色をした土藏の石段の方に飛んだ。そして石段の上に飛上らうとして、二三度飛上つては轉げ落ちた。落ちる度に跳返つた。然し一段二段と飛上つて、石段の一番上に登りついた。登りつくと、蛙はクルリと向きをかへて、石段の真中に下を見下すやうな位置をとつた。そしてそれなり動かなくなつた。(坪田讓治)

彼は屈んでそれを捕へようとした。所が蛙は指の間からすべり抜けた。今度は、ぬかりのないやうに氣を配りながら、彼は両手と膝とを突いて、そろりそろりとそれの方へ這ひ寄つた。まるですばらしく大きなやた／＼な海龜が背中に背囊を背負つたやうな恰好に見えた。(モウパッサン・前田晁譯)

蛇

其時、一匹の小さな蛇が土藏の石垣をスル／＼と音も立てないで、石段の方に忍び寄つてゐた。一尺位もないやうな灰色をした蛇である。蛇は石段の上で蛙から二尺ばかりの處に行くとスツと止つた。そして鎌首を立て始めた。首が二三寸も上つた時、蛇はそのまま動かなくなつた。然し此度は開いた口から細長い舌をペロ／＼と出し始めた。目にも止まらないうやうな速さである。まるで、それは小さな穴から吹出る炎のやうに、見えてると思ふと消えて居り、消えてると思ふと見えてゐた。菱形の蛇の頭の尖端は滑らかな角をもつてゐる口である。然しその口が、正太には

非常に恐い力をもつてゐるやうに見えたのである。
(坪田讓治)

● 目の前の山櫻の幹を越して、枝を張つた櫟の枝の先きから次の木の枝に、しまへびが渡つて居る。見て居る中に自然と身體が滑るやうになつて、蛇の首は枝の下の方から見えた。長い身體がすつと出て、黄の糞せたやうな腹が日に映つて光つて居る。(葉舟)

● 不意に毒蛇がする／＼と草の間を冷かに流れるやうに走つて、ぎら／＼と重い、粘氣のあるやうな水を切つて、ゆら／＼と小さな波を起して彼方に行つたかと思ふと、深く沈んで姿を隠してしまひました。
(未明)

◇蜻蛉

● 麥藁蜻蛉が飛んで来た。蜻蛉はカン／＼照り付けられた苔も何も着いてゐない飛石へ来てとまつた。而して暫時すると、其暑さの中に満足らしく羽根を下げた。自分は一ト月程以前、庭先の濠で蜻蛉の幼虫だらうと思ふ醜い虫が不器用に水の中にもぐつて行くのを見た。あの虫がからを脱けて、かうして空中を飛んで来たのだと思つた。此暑さにもめげない蜻蛉の幸福が察しられた。蜻蛉は秋までの長くもない命を少しもあせらずに凝つとして暑さを楽しんでゐる。(志賀直哉)

● 鹽辛蜻蛉が飛んで来た。其黒い影が地面へおちて横に走つた。すると今迄凝つと羽根をへの字なりに

◇螢

● 宵闇のほんやりと生ぬくい晩だ。水田の上を青い線をひいてすういすういと山吹螢がながれて行く。私は田圃沿ひの往還に出て、ひとり立つてゐた。ざぶざぶといふ田川の水音が、私の背なかをたたいてくれるやうな氣がする。その田川の岸の葉脈のながい草の葉に、濡れた緑の灯がながれて、ついと空に、私の顔のさきをかすめて行く、あをくさい螢の匂ひをかいだやうな氣がして、ふとさびしくなる。(夕暮)

● 明るい月影の中を、青い露ほどの光を放つて消えさうに一匹飛んでゐる。……團扇を揚げて間近に來た處をはつと拂ひ落さうとすると、螢はフイと逸れて、

して居た麥藁蜻蛉が眼ばかりと云つていゝ頭をくりくりと動かした。と思ふと急に軽い速さを以て、鹽辛蜻蛉をめがけて飛立つた。鹽辛蜻蛉は逃げる間がなかつた。空中で羽根と羽根との擦れ合ふ乾いたやうな音がして、一寸一緒に落ちかゝつた。が直ぐに二足はもう一つになつて居た。悠々と高く飛んで行く。その方にまぶしい夏の雲があつた。蜻蛉は淡い點になつて暫く見えて居た。(志賀直哉)

● 直ぐ前の椽側の端に、たつた一匹死に後れてゐるやうな赤蜻蛉が、寂しげに雨を透れて頼りのない自分自身に考へ入つたやうにぼつねんと冷たく棲つてゐた。その赤い體の色のにじんだやうな、脂のない薄い羽根には小さな雨の粒が微に溜つてゐる。(鈴木三重吉)

風に流れて、空池の上で一つ光つて見えなくなる。
(風葉)

◇蟲の聲

或夜、彼のランプの紙で出来た笠の上へ、かさと音を立て、飛んで来たものがあつた。見ると、それは一疋の馬追ひである。その青いすつきりとした虫はその縁を紅くぼかして染め出したランプの笠の上へとまつて、それから紅と青との對照が先づ彼の目を引いたが、その姿と動作とはおもむろに彼の興味を呼んだ。その虫は、長い觸角をゆるやかに動かしながら、ランプの圓い笠の紅いところの上を、ぐるりと廻り出して、青く動いて行つた。さうして、時々、壁や、障子や、

取り散らした書棚や、或は夜更しをしすぎて、何時になれば寝るともきまらない夫を勝手にさせて、自分だけは先づ眠つてゐる彼の妻の蚊帳の上などへ身輕に飛び渡つては鳴いて見せた。(佐藤春夫)
日が暮れると、露が降りてその花畑の邊が薄く蒸氣が懸つたやうになる。すると、リ、リ、リ、リ、リ、リ、と、蟲が聲を立てる。その聲までが濕つてゐるやうだ。私はこの部屋の中から、その、リ、リ、リ、リ、リ、リ、と、單調な聲を聞くことはもう幾年かになる。——其聲は極めて薄く柔かな翅を、風に慄はせて鳴らせる音らしい。すると、石の下でも、それに應じるやうな聲が聞える。次には、やゝ勢迫つた、調子のはやい聲が草の中から起つた。かうして夜になるに

つけて、この狭い花畑は虫の聲で充たされてしまふ。
(葉舟)

彼女はすゝり泣きに咽喉をふさがれて、不意に立止つた。一帶の谷は太陽の押しつぶすやうな光の下にさびれ果て、押し黙つてゐた。ただ蟋蟀だけが、道の兩側の疎らな黄色い草の中で、乾いた絶え間のない啼き聲を擧げてゐた。(モウパッサン・前田晁譯)

◇蝶・其他

私は庭に這ひ出て、白い牡丹の花を舐つてゐた。さうすると、私のそばに白い小猫が来て、私と一緒になつて、牡丹の黄いろい蓋を舐つてゐる。
大きな、とても大きな金色の蝶が、空からふうはり

とおりに来る。そして、私達の舐つてゐる牡丹の花にとまらうとして、ばたばたと翅ばたくと、金色の羽の粉がさんらんとしてあたり一面に散りこぼれる。(夕暮)
晩夏に入る頃から啼き出した蝸が秋の立つ時分には雨の降るやうに涼しい音を立てる。明け方など眼ざめて、蝸の聲を聴けば、あゝ秋が来たなと思はせる。雨戸を洩るゝ白い光りと蝸の聲とは、初秋の朝の感じをよく語つて居る。此の聲の中には、秋が齎らす清い亮かな音響の最初の純なものも傳へられて居る。尖つた鋭い響はなく、丁度涇流の聲を聴くやうである。
(蕪園)

翅の上で何かきさむ音をさせてゐるばかりで、細君が一向出て来やうとしなかつた代りに、やがてそ

ここに蠅が飛んで来た。主人の心は緊張した。蠅は二度捕蠅器の上に輪を描くと、直ぐにうまさうな匂ひのもとを知った。始めは金網の上を下りたが、チヨロチヨロと機械の蓋へ匍ひ寄つた。そこから身をさかしまにして板面の酢を舐め始めた。(里見弴)

見るのにあまり暗くなつたので、幾つかのランプが持ち来された。それが大きな闇黒の空間の下で青白い不思議な光をテエブルの上に投げた。と忽ち蚋の雨がテエブル掛の上へ降り出した。ホヤの上を通り越さうとして身を滅した小さな蚋が、焦がした翼と足とを持つたまゝ、テエブル掛や、皿や、コップやを、一種の灰色の小跳りするやうな埃で化粧した。

(モウパッサン・前田晁譯)

ただ一匹の土蜂が楽しさうに遊びまはつてゐた。折々一つの花の上にとまるかと思ふと、忽ちまた其處を去つて新しい休息所へ移つた。その肥つた身體は、小さな透明の翼に支へられて、黄色で縞を付けられた蔦色の天鷲絨のやうに見えた。

(モウパッサン・前田晁譯)

◇家守・其他

杉箸を持つて来て、家守をつまみ出さうとした。家守は柔かい身體をクネ／＼として逃げた。敷居の所まで来た時、自分はそれをうまく外へはじき出してやつた。家守は飛石の傍に凝つとしてゐた。(志賀直哉)

素早く家守は壁を傳つて、壘と敷居の間に這入

り込まうとした。私は忌々しげに半分出てゐる尾を強く扇子の柄で押へた。其のはずみに五分ばかり尾の先が切れてしまつた。家守は其の儘姿を隠してしまつたが、残された尾は、さながら其れ自身生きてゐるやうに、しばらく壘の上に蚯蚓の芴るやうに躍つてゐた。

(未明)

私はふと傍の薔薇の葉の上にある褐色の雌の鎌切りを見附けた。よく見ると、それは別の青い雄の鎌切りの首を大きな鎌で押しつけて、早や半分ほどそれを食つてゐる雌の鎌切りだつた。

「なるほど、こりや夫婦生活の第四段の形態だ。」と私は思つた。

雄は雌に腹まで食はれながらまだ頭をゆるく左右に

振つてゐた。その雄の容子が私には苦痛を訴へてゐる表情だとは思へなかつた。どこかむしろ悠長な歡喜を感じた。その眼の表情には確に身を締めつけられるやうな恍惚とした喜びがあつた。(横光利一)

すると、庭の片隅に寄つた小枝から、すが糸のやうな細い線を引いて、その端に枯つ葉みたいなものがぶら下つてゐるのが眼につきました。

簞蟲です。降り續いた雨に簞がぶ濡れになつたので、もつと日當りのいとところへ引越さうとも思つてゐるらしく、一すぢの糸にぶら下つて、有るか無いかの風に自分の身體をふら／＼と振り動かしてゐます。(泣菫)

稲田は未だ黄ばむといふほどではなかつたけれ

ど、花は既に實になつてゐた。さうして蝗がそれらの少しうな垂れた穂の間で、少しづゝ生れ初めて居た。蛇莓といふ赤い丸い草の實のところが居る田の畦には、彼の足もとから、蝗が時折飛び逃げた。(佐藤春夫)

石の柱にあたつた楽しい温い太陽の光の中に、私達は小さな蟲を見つけた。その蟲は全身がすき透つて見える程、小さな名もない蟲であつた。此小さな句讀點程もない動物が、快よげに翅を振はすさまを見てゐると、さもそれが吾々に「何と生とはいひことであらう！ 何と若さとはいひものであらう！ 何と春とは魅力に満ちたものであらう！」と語つてゐるやうに思はれた。(テレビヨフ・白葉譯)

◇金魚・其他

私はつと竿をあげる。絲のさきに眞赤な金魚が光る。てんでんとして水の上でをどつてゐる。その魚のいのちのひびきが、絲をつたひ竿をつたはつて私からだにしみてくる。

私は思ひきつて、つと竿を扱いて一振りふると、金魚は大きく圓を描いて閃いたと思ふまもなく、さつと絲をきつて大屋根の草にすれすれに、一閃光となつて空にとんでゆく。(夕暮)

下宿の庭にはふくらんだ空氣から生れ出したやうな小さな蟲のけはひがした。花のない庭にも小池のふちの雑草がすべすべした緑色の艶をまして、近くに

赤い金魚が泳いでゐる。北川は頬づゑをついて池の底に落ちてすうすう動く魚の影に長い午前を眺め入つて暮してゐた。(川崎長太郎)

緋鯉はほしやりと又跳ねる。薄濁りのする水に泥は沈んで、上皮丈は軽く温む底から、朦朧と朱い影が静かな水を動かして、浮いて来る。滑かな波にきらりと射す日影を崩さぬ程に、尾を揺つてゐるかと思ふと思ひきつてぼんと水を敵いて飛びあがる。一面に揚る泥の濃きうちに、幽かなる朱いものが影を潜めて行く。温い水を脊に押し分けて去る痕に一筋のうねりを見せて、去年の蘆を風なきに勝る。(漱石)

第八章 人間

男性

◇少年

正太は袖なしを着て、毛糸の帽子を冠つてゐた。片手を脇の下に入れ、片手で父親にぶら下つてゐた。その方の手は肘迄赤くなつて風の中に出でゐた。また着物が短くて、兩足とも脛から下が澤山のぞいてゐた。その上、片方の足袋の拇指が破れてゐて、そこから赤くなつた小さな指がのぞいてゐた。(坪田譲治)

たゞ幾らか私の注意を牽いたものは、其の多勢の人々の中で、私と同じやうな丁稚姿の少年を見出すことだつた。彼等は皆な同じ様に腕被り頭をした居た。そして同じ様な細かい双子縞の衣服に黒い小倉帯をしめ、黒い皮鼻緒の雪踏を穿いてちやら〜と前屈みに忙しさに歩いて居た。大きな風呂敷包を擔つて居る者もあつた。手ぶらの者もあつた。もう頭を五分刈りにした手代風の男の後から屋號を書いた箱車を引いて行く者もあつた。彼等は皆その頭髮の格好なり身體の様子なりが、もうすつかり丁稚になりきつて居た。

(加能作次郎)

小僧の様子を見ると、ちやうど猫のやうに體を圓くして背を屈めてゐる。頭髮が延びたのが尙ほ重苦

しい感じを與へてゐる。而して青黒く煤けたやうな痴鈍な顔付は、其の物怯えするやうな臆病氣な眼付と共に、遺憾なく故郷の人間の醜い特長を現はしてゐる。

(未明)

身體は私よりも小さかつたけれども、眼鼻立が大人のやうにきちんと整ひ過ぎて、ませた感じのする小供であつた。綺麗な顔ではあつたが、横から見ると、何となく厚みが足らないので品がなかつた。(廣津和郎)

彼は着物に依つてのみ男か女かが區別され得るやうな、弱々しい、蒼白い顔をした、きやしやな男の子の一人であつた。……その身のまはりのものはみんな優しく柔らかに見えた——動作も、縮れた髪の毛も、顔付も、天鷲絨のジャケツも。(チエエホフ・前田晁譯)

◇青年

母親がかなり年取つてから出來た子なので、母親の老年にも拘らず、彼はまだ漸く二十五になつたばかりだつた。けれども一寸見たところでは、二十七八にも老けて見えた。額の廣い、鼻の高い、赫々した血色のいゝ顔で、決して美男子でも好男子でもなかつたが、丈も高く身體もがつしりとして如何にも男らしく活氣に充ち充ちてゐるやうな立派な青年だつた。質素な赤銅蔓の縁なし眼鏡をかけ、髻は生やして居なかつたが、眉毛の太く厚いのや、綺麗に分けた漆黒の濃い剛さうな髪の毛の少しぢれて居るのなどが、なんとなく威壓するやうな男性的なつよい精力的な感じがあつ

た。(加能作次郎)

彼は背の高い、がつしりした體を隅の方の柱に凭せかけるやうにして、大抵は黙りこむで人々の騒ぐのを見てゐた。彼の柔かい髪は割合に房々としてゐた。彼は髪を殆んど眞ん中から分けてゐた。彼の右の肩が心持ち上がつてゐるのが彼が何かものを言ひ出すことに一層目立つて見えた。田舎出の青年に共通な世間見ずの霸氣が彼の満身に溢れてゐるやうに思はれた。

(吉田絃二郎)

年頃二十七八で小柄な、實直さうな顔をしてゐたが、眉毛がばかに太くなつて、唇が心持ち歪んでゐるのが、何處か堅意地らしい氣象を示してゐた。綺麗に分けた髪の毛は女のやうに細く、柔かであつたが、

首筋は大層短かくつて、往來で後から吹いて来る寒風に抵抗しやうとする人のやうに、後頭部が襟の中に縮こまつて反對に顎が少し持上つてゐた。(谷崎精二)

口鬚が恰度生え初めたばかりで、顎にはまだ薄い生毛がもぢやもぢやと生えて居る。で、その小作りな生きくした丸顔にも、穏かな蔭色の目にも、愛らしく突き出た唇にも、白い小さい手にも、凡て子供らしい美しさ、感じの好い柔しさがあつた。完全な健康と若さから来る幸福な快活——無頓着と自負と放縦と若さの魅力——彼のあらゆるものがそれを暗示して居た。(ツルゲエネフ・田中純譯)

♪ ジャン・ド・セルギイは背の低い、ほつそりとした、少し禿げた、やゝ弱さうに見える、風采のいき

な、髭のちぢれた、目の冴えた、唇の美しい、大通りで生れて育つたらしい男であつた。彼は元氣のなささうな様子をしてゐながら疲れないし、青白い色をしてゐながら強壯で、體操や、擊劍や、灌水浴や、温浴などが、強い、人爲的の力を與へる針金のやうなバリつ子の一人であつた。彼は放埒と機智と、財産と、親族と、そしてある種の人々に特有な交際上手で、愛嬌があつて、愛想のいゝことなどで知られてゐた。

(モウパッサン・前田晁譯)

♪ 彼は彫像が人間になつたやうな、展覽會へ送られる彫刻などに見る人類の模型になつたやうな感じを與へた。あまりに美しく、あまりに背が高く、あまりに大きく、あまりに強い彼は、あらゆるものの過剰か

ら、性質の過剰から、多少の罪を犯した。彼は無数の情事を持つてゐた。(モウパッサン・前田晁譯)

◇中 年

♪ 金花は思はず立ち上つて、この見慣れない外國人の姿へ、呆氣にとられた視線を投げた。客は年頃は三十五六でもあらうか。縞目のあるらしい茶の背廣に同じ巾地の烏打帽をかぶつた、眼の大きい、顚帽のある、頬の日に焼けた男であつた。が、唯一つ合點の行かない事には、外國人には違ひないにしても、西洋人か東洋人か、奇體にその見分けがつかなかつた。それが黒い髪の毛を帽の下からはみ出させて、火の消えたパイプを啣へながら、戸口に立ち塞つてゐる有様は、

どう見ても泥酔した通行人が戸まどひでもしたらしく思はれるのであつた。(芥川龍之介)

♪ 小柄な痩せぎすの男で、あさ黒い、營養不良にでもなつて居るかと思はれるほど色艶の悪い顔に、いつももぢや〜と髭を生やして居た。一寸見たところでは快活で元氣で、法律上の問題などで議論する時は、身體に似合はぬ高い大きな聲を出して相手を屈服せしめねば止まないと云ふ風に、滔々と辯じ立てるので、聞いて居れば、非常に熱のある、また霸氣に富んだ男の様に思はれるが、その實何處かに疲勞倦怠の色を帯び、意氣の阻喪したやうなところがあつた。心にも落ち着きがないと見えて、一つの仕事を長く續けてやるといふこともなく、道を歩くにも、いつも忙しさ

うに、ステツキを振りまはし、上下左右を見まはしな
 がら、せか／＼と小走りに歩くといふ風であつた。何
 となく寂しさうな影が彼を包んで居た。私は一眼見て
 すぐ、彼はひどい神経衰弱に罹つて居ると思つた。

(加能作次郎)

三十二三ぐらゐの年配だと推量したけれど、或
 ひはもう二つ三つ年喰ひであるかも知れない。顔はた
 しかにふつくらとはしてゐるものゝ、寧ろ青ぶくれに
 ふくれてゐるので、それが何處となく不健康な水氣の
 來た病人のやうな倂を傳へてゐる。さうしてきめの粗
 い兩頬の地肌が著しく荒れてはさ／＼に乾いて、血の
 氣の失せた、鈍い脂色をした唇の邊には、妙に冷酷な、
 残忍な性質の人ではないかと想はせるやうな暗い影が

たゞようてゐる。(谷崎潤一郎)

粗く剛い髪、大きな鼻、體軀の割合に幅の廣い
 肩なぞは、寒い山國の生れといふことを示してゐる。
 傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病
 な、感じ易いと同時に愚圖々々した——斯う云ふ憐む
 べき性質は、彼の容貌を沈鬱にして見せる。(藤村)

日焼けではなく元來の肌色らしい色黒の男で、
 狭い額のあたりが一際黒くて、憂鬱な影を湛へてるや
 うに見え、小さな圓い眼がきよとんと黒ずんでゐて、
 少し長すぎるらしい兩腕を、蟹の足みたいに曲げる癖
 があつて、その全體の感じに、ロシア的の薄暗い影が
 こもつてゐた。にも拘らず、頬の肉はいつも笑みを刻
 んでゐる。(豊島與志雄)

彼は背の低い、がつしりとしたいゝ男で、大き
 な頭と、重々しい、けれども柔らかな顔付とを持つて
 ゐた。彼は意氣な、流行風な着方をしてゐた。其の馬
 車からも、きちんとボタンをかけたフロックコートか
 らも、鬘のやうな髪の手からも、顔付からも、何かか
 う氣高い、獅子のやうな感じが流れてゐた。彼は頭を
 上げ、胸を張つて歩き、心持のいゝ上低音で話した。
 そして頸巻を取つて髪の手を撫でつけた恰好などは、
 きやしやな女のやうな優美なところがあつた。其の青
 ざめた顔色にしても、外套を脱ぎながら階段を見上げ
 た子供らしい恐怖にしても、かれの品をおとしもしな
 ければ、また、かれの全體の姿がそなへてゐた飽満、
 健康、乃至は自若といふやうなものを減じもしなかつ

た。(チエエホフ・前田晁譯)

◇老年

丁度この薄暗い處から出て來さうな爺だつた。
 齒の脱けた、小さい皺だらけの顔に如何にも心の荒ん
 だ淋しい色が見える。縞柄も分らぬ古い袴を着て細い
 帯が食ひこむやうにしめられて居た。其身體つきはも
 う力が無くなつて、たゞ何となく此世を怨んで居る執
 念だけが、どこかに残つて宿つて居るやうだつた。其
 特に零落した跡を籠めて居る、光のない疑りぶかい目
 は、人を暗い處へ引き込むものゝやうに思はれた。

(葉舟)

この老爺はまだ六十にはなつて居ないが、額が

はえ上がつて居て、赤味を帯びた顔が瘦せて、薄い皺がよつて居る。話する時には、其小さい眼でもつて、一寸人を見ながら、落付いた聲をして話し出す。其間には、烈しく咳が出る、それが癖のやうだ。その度に茶を一口づゝ飲んで、又話し出すといふやうな老爺である。(葉舟)

M男爵は西洋風の書齋のうちで、アームチェアに凭れて、静かに白髯を撫してゐた。眼つきが刺すやうに鋭い、額に太い皺が寄つた、だが、まだ頬から襟元へかけて皮膚のつや／＼した、寫真で屢々見受ける通りのすこやかな顔をしてゐた。(谷崎精二)

客は斑白の老紳士で、血色のいゝ兩頬に、聊か西洋人じみた疎な鬚を貯へてゐる。これはつんと光つ

た鼻の先へ鐵縁の鼻眼鏡をかけたので、殊にさういふ感じを深くさせた。着てゐるのは黒の背廣であるが、遠方から一見したところでも、決して上等な洋服ではないらしい。(芥川龍之介)

奥の室から見渡される梅林の中に一人の仙人めいた老人がその番人ともつかず住んで居た。彼は其の邊に有名な行者で、梅林の奥に小さな祠を守つて居た。彼自らの言ふ所によると、齡は既に九十を過ぎて居た。腰は海老の様に二重に曲つて、地にも届きさうな長い白髯を抜きながら、よぼよぼと梅の樹間を彷徨うて居るのが、時々私達の眼に入つた。毎朝未明に、附近の寺々の鐘に先立つて、彼は「わう、わう」と物々しく法螺貝を吹き鳴らした。その怪しげな氣味の悪い

響が、谷間に反響して、人々の曉の夢を破つた。そして夕方にも同じことをやつた。(加能作次郎)

爺さんはもう働かなかつた。彼はすべての髯の人のやうに、陰氣臭い顔をして、痛みで蹇へた足を引きずりながら、二重に折れ曲つた腰付で、杖を力に野らぢゆうを歩きまはつて動物や人間を頑固な、疑ひ深い目で眺めてゐた。時としてはまた溝端に坐つて、半時間もちつと其處を動かすに、彼の生涯の大部分を占めてゐる事柄を、卵と穀物の値段とか、作物を悪くもすればよくもする雨や太陽とかの事をぼんやりと思ひ耽つてゐた。そして、リヨウマチで弱りきつた彼の老いた手足は、過ぎ去つた六十年の間、濕つた藁で蔽はれた低い藁葺家の壁の濕氣を吸ひ込んだやうに、今は

地面の濕氣を吸ひ込んだ。(モウバツサン・前田晁譯)

森のはづれに近く、濡れた白樺の幹に凭りかゝつて、年を取つた、瘦せた牧者がシャツボも冠らず、ぼろ／＼の粗ラシヤの下着だけで立つてゐた。彼はうつとりと思案に沈んで、地上を眺めながら、機械的に牧笛を吹いた。(チエエホフ・前田晁譯)

小兒

いつの間にか私に馴染んだ鈴吉は、私が煙草を吸ふのを不思議がつて、自分でマッチをすらうとした。手を執つて火を點けさせると、その火を、私の口にくはへた煙草の所へ持つて來ては、へ／＼ら／＼笑つた。食器が片附けられて、あたりに弄び物がなくなると、

食卓の下へわざ／＼顔を隠しては、隠した顔をまた上へ持出して、「バアア」と、私に向つて云つた。成ほど子供といふものは、みんなこんなことをやつて大きくなるんだなと、私は珍らしいことに思つて、何處の親もやるであらうやうに、私自身も食卓の側で顔の隠れんぼをやつて、「バア／＼」と子供の相手をした。馬鹿げてゐると思ひながら、そんな真似をしてゐるのが次第に面白くなつた。(白鳥)

ワルデン夫人はぢつと色の蒼ざめた赤兒を見やつて、それが生れて十三ヶ月経つたとはどうしても信じられなかつた。家には搖籃の中に、彼女も生れて七ヶ月の大きな赤ん坊を持つてゐたが、それは少くともこの子よりは半分程大きかつた。(ケラン・前田晁譯)

赤ん坊は息も絶え絶えに叫んでゐた。女房は包んでゐたものを解いて、いきなり砂の上へ赤ん坊を置いた。すると赤ん坊はシャツ一枚で、丁度仰向けに置かれた甲虫のやうに、震える細い手足を上げながら、力なく身動きし始めた。(チャーコツレフ・米川正夫譯)

◇雑

先生は見るから背の高い、毎日の農場労働でピカピカと、どこもかも鳶色に光つた、眉や髭の濃い、眼の鋭い人だつた。脚は毛だらけで、跣足で平氣で熊のやうに熊笹の中を歩いた。力もすばらしく、重い物を軽々と片手でさげたり、太い木を何の雑作もなくへし折つたりした。時たまうんと兩腕を曲げると、ピシ

ピシと、まるで小さな竹でも爆けるやうな音がした。それに聲が大きかつた。普通子供に何か云ふ時でも察全體へひびきわたる位に。——さういふ健康と精力そのものゝやうな姿が、青ちやんを壓倒した。(藤森成吉)

爲吉は、いはゞ、他人の飯を食つて成長した。父が大酒飲みで、彼が少し大きくなると、借金のかたに「旦那」の家へ年期奉公に出して、その後もちびりちびり金を借りては皆飲んでしまつた。爲吉は容貌も割合に整つてゐるし、一寸小才が利いて愛嬌があり、相手に應じて上品な言葉使ひも出来る男で、「嬢様」が嫁いでゐる町の商家へ使に出しても體裁がよいといふので、非常に愛せられ重寶がられたけれども、一見つきあひ易さうで、而もどこことなく輕薄で飽きつぽく、ど

こへでも飛出すが小膽で思ひ切つたことの出来ない、大きつばであつさりして極く快活に見えるが、その實しみつたれでしつこく、案外優柔不斷で何でもないことを陰でよく心配する——といったやうな性格が殆んど三十年に亘る長い奉公人生活の間に鍛へ上げられてしまつた。(大宅壯一)

彼は下を見詰めるともなくまた前方を見詰めるともなく、黙つて車を引いてゐた。彼の様子は何か思つてゐるやうでもあつた。また何か心の裡で屈托してゐるやうでもあつた。彼の顔付は分らなかつたけれども、いつもかうした時に見るやうに、彼は顔に皺を刻んで、底光りする瞳をぢつと一處に据えて、口を堅く結んでゐた。(未明)

此の工場は木立の中に埋つてゐた。其處は非常に暗く、唯だ恐ろしいやうな火爐の赤い光がきら／＼と閃いて、五人の鍛冶屋が恐ろしい音をさせて鐵砧の上を槌で打つてゐるのを照らしてゐるばかりだつた。炎焔に包まれて立ちながら、彼等は目を自分達が打つてゐる眞赤に焼けた鐵の上にちつと据ゑて、まるで鬼のやうに働いた。そして、彼等のだるいやうな考へは槌と一緒に上つたり下つたりした。(モウパッサン・前田晁譯)

やがて春の初めとなつて、種子はまた芽を出した。百姓達はまたもや、勞働蟻のやうに、風が吹いても雨が降つても、朝から晩まで野に出て働きながら、人間の食物を産み出すあの鶯色の土地の畦で日を暮らした。(モウパッサン・前田晁譯)

女性

娘

幾らか下り氣味の眼にもつた愛嬌は、この頃ますます圓味を加へて來た白い頬の肉と共に、十六といふ花のやうな年に向つて微笑んでゐるやうだつた。その微笑に對して、その花のやうな年は、何をもつてお京に答へようとするのだらう？ けれども彼女は、自分に就ては何も知らない他の誰もの如く、否、それにも増して何も知らなかつた。たゞすこやかに美しく發育して行く自分の肉體と、それに伴つた嬉しいやうな

悲しいやうな、遠いやうな近いやうな、つきつめられないほのかなある情緒とより外には。(水野仙子)

微暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出して來たかと思ふと、脱衣場の突鼻に川岸へ飛び下りさうな恰好で立ち、兩手を一ぱいに伸して何か叫んでゐる。手拭もない眞裸だ。それが踊子だつた。若桐のやうに足のよく伸びた白い裸身を眺めて、私は心に清水を感じ、ほうつと深い息を吐いてから、ことごと笑つた。子供なんだ。私達を見つけた喜びで眞裸のまま日の光りの中に飛出し、爪先きで背一ぱいに伸上る程に子供なんだ。(川端康成)

油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある輝だらけの兩頬を氣持の悪い程赤く

火點らせた、如何にも田舎娘らしい娘だつた。しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包みがあつて、その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。(芥川龍之介)

さうして何時までも物を言はないでゐる内に、三千代はいつしかその長い睫毛に涙を潤ませて一つ處をじつと見入つてゐる。赤い下駄の緒の跡の附いた足袋をして斜に坐つて、じつと目を伏せて、一つ處を見入つてゐる。(鈴木三重吉)

五本の指の整ひ方、江の島海邊で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合、珠のやうな踵のまる

味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗ふかと疑はれる皮膚の潤澤、この足こそは、やがて男の生血に肥えて男のむくろを踏みつける足であつた。この足を持つ女こそは、彼が永年たづねあぐんだ女の中の女であらうと思はれた。(谷崎潤一郎)

露西亞の小説を読んだ時に、其の作中に出て来る女にあるやうな印象をこの少女は彼のはじめて来た時分に既に與へた。ちやうど寒い青い空の下で、地面にしがみついて荒寥とした野原に咲いた赤い花のやうな女である。窓頭に置いてある常夏の花よりも、もつと色が濃くて熱烈な感じを與へる花に似てゐる。(未明)

伸びて行つたやうに見えた。赤いものゝ入つた帯や、長い袖のはでな浴衣やで、どうかして若々しく水々しく見せようとしてゐるにも拘らず、青黒いしやくれた顔には、唇に至るまでその本来の色を失つて、意地悪く青春を裏切つてゐた。低い鼻の上にぎろりと人を見る眼は、時として詰るやうな、反抗的な感じを人に與へ、さうしてその眼は年の割に苦痛といふものを知つてゐるやうに見えた。それだけ、年増な感じと、どこな

く卑しげな表情をさへ添へてゐるのであつた。(水野仙子)

彼女が漸く二十歳になつたばかりだが、背が高くて、青白い暗い顔をして居る。顔には一面に薄い雀斑があるが、三日月形の眉毛の下には大きい灰色の目があつて、額も鼻もよく整つて居るし、口もよく緊つ

て、多少鋭い顎を持つて居る。で、栗色の髪の毛が、細い首にかゝつて居る。その烈しさうで多少臆病らしい顔の表情にも、絶えず動いて居る判然とした目の色にも、強さうなその笑顔にも、その抑揚のある静かな聲にも、凡て何處か神經質な衝動的なせつちかなところが見え、何處かに萬人好きのしない、或る人には厭がられる處があつた。その手は細い薔薇色をして、長い指を持つて居た。その足も細いが、歩く時には、少し前屈みになつて、殆んど走るやうにして身輕に歩いて行く。(ツルゲエネフ・田中純譯)

それに、そのイェツトといふ娘は全く僕をまごつかせる。あの女は神秘だ。もしあの女が、僕のこれまで見たうちで、するくて意地が悪いといふ點で最も

完全な化物でないとするれば、想像され得る限りの最も不思議な無邪氣の代物なんだ。あの女は、さういふ評判の悪い連中の中で、極端に墮落してゐるのか、それとも全く天真爛漫なのか、落付いた、勝ち誇つた平氣な顔をして暮らしてゐる。(モウパッサン・前田晁譯)

そしてまた僕はあの女を妬んでゐる、あの女が分らない胸の中にある、僕の知らないすべてのものを妬んでゐる。僕はいつも「一體あの女は可愛い、お転婆なのか、それとも憎むべきやくざ女なのか？」と不審に思つてゐるんだ。あの女は一軍隊を戦慄させるやうなことを言ふ、併しそれは鸚鵡だつてすることだ。あの女は時に依ると、果して純潔であつたかどうかを疑はしめる程に無邪氣なんだ、迎も信じられないほど

に無邪氣なんだ。あの女が僕をおびいて、僕を興奮させるのは、ある種類の女のやうだが、しかも同時に罪のない處女のやうに身を護つてゐる。僕を愛してゐるやうでもあるが、また僕をちやかしもするんだ。人前ではまるで僕のいろでゝもあるやうに振舞つてゐて、蔭ではまるで兄貴か従者かのやうに僕をあしらふのだ。(モウパッサン・前田晁譯)

手に鞭を持つて通りかゝつた木靴を穿いてゐる一人の男が、子供の傍に立ち止つて、抱き上げて、接吻した。と一人の女が身を起して彼の方へやつて来た。女は髻も、腰も、肩も大きな、大柄な赤毛の娘で、其の毛の中には血のやうに赤い色の毛も混つてゐる背の高いノルマン女であつた。(モウパッサン・前田晁譯)

それは物怖ぢするやうな灰色のばつちりした眼と、大ロシア語と小ロシア語との可笑しく交り合つた、特色のある、うたふやうな聲音とを持つた、おどおどして、燃えるやうに眞赤になつてゐた代表的な美しい牝鷄であつた。小ロシアの草深い田舎から出て来た極めて愛らしい鄙の乙女であつた！ やつとチエルニゴフの貴族女學校を卒業したばかりで、ポルタヴ以外には何處へも行つた事がなく、海の事や、自分を故郷のチエルニゴフから盗み出してくれるものと信じてゐたまだ見た事もない騎士との邂逅を無邪氣に空想してゐた乙女であつた。(チリコフ・白葉譯)

何處となく尖つた感じのする顔であつた。彼女は、到底美人とは言ひ難かつた。けれども、其の代りに、碧い透き通るやうな眼が非常に美しく、それがいきいきして来ると、誰しもつい惹きつけられて了ふ位に、顔全體の表情が、異常に善良な無邪氣さを帯びて来るのだつた。それから彼女の顔には、いやその姿にも、それ以上に際立つた一つの特色があつた——それは、彼女が十八といふ年にも拘らず、その年より非常に若く、まるでほんの小娘のやうに、子供のやうに見える事で、そしてそれがどうかすると、可らしい程に彼女の動作に現れる事であつた。

(ドストエーフスキー・白葉譯)

吹き晒しの亭の眞中に、一人の少女が蘭椅子に

腰を懸けてゐる。両手は膝の上に軽く置かれた。やゝ頭を曲げるやうにしてゐるが、その美しい顔には、名づけようもない奇態な表情がある。で、今その顔附から推し量つて見るに、困つたのもなければ怒つたのでもない。世間によくある拗ねたのとも違ふ。寧ろ、傷ましい、身も心も壓しつぶされさうな失望といつたら一番近いであらう。何かかう、自分に持つてゐる力のないため、是非なくも今、何物かを取落さうとしてゐる場合のやうにも見える——何物か其の手と手との間で、凋れて行きつゝあるやうにも見える。

(ケラン・前田晁譯)

彼は大尉の娘が綺麗で、頗る綺麗であつたことを許さぬ譯には行かなかつた。彼女は世帯馴れても

ればまた利口でもあるやうに見えた。そしていかにも行き届いた眞心で父親に仕へてゐたことも明らかだつた。けれども従兄弟のハンスは自分に言つた。「可哀さうに、あの女と結婚しようとするものなどあるものか？」

といふのは、彼女は若い娘が人を惹き付けるあの可愛い頼り無さといふものを全く缺いてゐたからで、彼女が物を言ふ時は、殆ど憎いほどに落付いてはきはきしてゐた。彼女は決して、「あら、わたし、あなたにわたしの申すことがお分りかどうか存じませんわ——わたしの申すことがお分りになる方はそれは本當に少うございますわ——わたしどう申したいかでせう、自分ではよく分つてゐるのですけれど」といふやうな、

はつきりと言ひ切らない氣持のいゝ言葉を使つたことがなかつた。早くいふと、シユラツベ嬢には女の一番微妙なチャームである奥床しさやばつとして分らないやうな所が少しもなかつた。(ケラン・前田晁譯)

待つことにはもう疲れてゐたけれど、従兄弟のハンスは、若い女が急いで去るのを目で追はずにはゐられなかつた。彼女は小造りで釣合がよかつた。そして彼は、彼女が地から左の足を擧げる時に、それで小さな内輪を作らない僅かな女の一人であつたことを興味を以て注視した。(ケラン・前田晁譯)

それはまだほんの小娘で、ストウヴの向う側の隅に坐つてゐた。嬢はちよつとの間ぢつと立派な貴婦人を見詰めてゐたが、急に頭を引つ込めて前へ屈んで

しまつたので、夫人は其の脊中の外いくらも見ることが出来なかつた。(ケラン・前田晁譯)

客は皆で二人であつた——私と、隣りの砂糖工場の持主の娘で、ヴェーロチカと言ふ、いつ見ても吃驚したやうな、碧い眼をしてゐる、十七になる令嬢とであつた。彼女の左の眉はいつも右の方より少し上つてゐた。私は一度もヴェーロチカが同じ氣分であるのを見たことがなかつた——或は下婢と一緒に(巨匠式歩調)で駆け廻つたり、格別これと言ふ原因もないのに一日中笑ひ轉げてゐたり、かと思ふと、膝を抱いて坐り込んだまゝ、可度世界の大問題を解決してゐるやうに、口をつぐんで、鹿爪らしい顔をして、木の枝で地面に線をひきながら、唇を突出しては、何か

しら口笛を吹いてゐたりする。

一度、私は、彼女が軽い麻の朝着を着て、濡れた髪を振亂し、手に書物とタオルとを持つて歩いて來るのに出會はした事があつた。彼女は川から家の方へそろ／＼と小徑を上つて來たが、急に立止ると、一つ所で足をばたばたさせながら、祈るやうな聲で叫んだ——「私を見ちゃアいやアよ、見ないで頂戴よう……」そして駆出して行つて了つた。

(ラザレーフスキイ・白葉譯)

月の光りをうけて、ヴェーロチカの顔ははつきり見えた、彼女は眉をひそめて、一寸頭を振つて、唇を動かした。私の視線を感じくと、ヴェーロチカ

は急に肩から軽い薄絹のハンケチをとつて、それで土
耳古の女のやうに目までつゝんだ。

(ラザレーフスキイ・白葉譯)

ニーナは母にも叔父にも似てゐなかつた、暗碧
の眼と長い睫毛とを持つた、赤みがゝつた感じのする
金髪で、美人でもなければ、身のこなしもはき／＼と
ず、丁度喉の病氣でもした後のやうにゆつくり／＼と
話す女だつた。私は嘗て一度も彼女の中庸を得た氣分
でゐたのを見たことがない。屢々彼女は鼻をしばめ眼
を閉ぢて、いつまでもぢつと坐つたまゝ幸福さうに微
笑んでゐることがあつた。かと思ふとまた突然に、別
にこれといふ原因なしに、彼女は自分の室へ駆け込
んで、寢臺の上に仆れて、聲をしのんで泣いたりし

た。(ラザレーフスキイ・白葉譯)

靴の踵の軽い響が聞えて来て、戸が音もなく開
かれると、其處へネリーが姿を現はした。彼女はミハ
イロフの挨拶にやつと認められる位に答へて、父の傍
らに立止つたが、其の頬には二ツの薔薇色の斑點がほ
つと浮んでゐた。帽子も冠らず、飾り氣のない不斷着
姿の彼女はすつかり大人のやうに見えた、其の涼しい
眼はやゝ驚いたやうに見張つてゐた。

(ラザレーフスキイ・白葉譯)

◇中年

出かける彼について、女は三四丁隔つた停留
場まで送つて来た。白ペンキで塗つた、小さい待合所

で、小寒むさうに立つてゐたり、腰をかけてゐたりす
る四五人の人達が、うつすりと感じよく化粧した女を、
まぢ／＼と見た。その視線の内に、彼は自分をも見出
して、一寸羞しくなりながら、色つぼく、そのくせ堅
氣らしく見える女を、見る側の人達の氣持で見返して
みて、或満足を感じた。女は、人前で、それも十分に
牽きついた視線を意識において、わざと彼の傍に寄り
添つて立つてゐた。(細田源吉)

あのどこか人懐つこい、その表情のいかなる微
細な點にでも情深い温い柔かいところのあるうちに
も、その奥にはどこか一脈の淋しい影がたゞよつてゐ
るのを、私は認めないわけにはいかない。それがまた
私をして、何とも言はれぬ懐しい、おたみさんの胸に

抱きつき、手にすがつて、おつ母さんとも、姉さんと
も言つて、共に涙を流したいやうな情緒を起させるの
でもあつた。おたみさんを包んでゐるさういふ柔かい
温かい氣分、情愛に富んだ優しいしみ／＼とした心
それらは一つは生れつきでもあらうが、また一つには
これまでのおたみさんの生活が、さうならせたものでは
あるまいか。無自覺に運命に甘んじたことが、女らし
い優しいあきらめの情、それに伴ふ女らしい感傷的な
氣分を助成したのではなからうか。(加能作次郎)

顔は一寸濼皮の剝けたといつた方の部類で、肌
はいゝけれども少し雀斑があり、額が狭く、眼は牛の
やうにおとなしく、きらりと光るといふやうな事は絶
對になさうだつた。中肉中背で、廿七といふ年より

は二つ三つ若く見える。銀杏返に結つてゐる髪はひどく癖毛だけれど、それがまた一寸仇つぽく、俯いた拍子に見せる襟元に大きな黒子があつた。その邊は、後から見た時は一寸小粹にすら見えた。(水野仙子)

彼女が話し止めて、膝の子供がむづむづと動き出すと、いきなり胸をはだけて、乳房を子供の口に含ました。血管が一つ一つ透いて見えるほど、むつちりと張り切つた大きな乳房で、子供はそれを、筋目の深くくゝれた蠟細工のやうな片手で、やんわりと持ち添へながら、息をつかずに、咽せ返るほどぐつぐつと飲みほしていつた。冴えきつた冷い月の光が、斜め上から降るやうに落ちてゐて、その乳房と手と子供の赤い頬邊とに、蒼白い艶を投げかけてゐた。(豊島與志雄)

彼女は脊が高く、やゝ大柄で、いくらか肥え過ぎた方で、もう盛りを過ぎてゐたが、併し非常に美しく、重たい、暖かな、迫るやうな美しさを持つてゐた。その兜のやうな髪の毛は夢を湛へ、微笑を湛へて、彼女を不思議に惚々とさせた。その下に大きな黒い目があつた。鼻はやゝ狭かつた。口は大きくて、非常に誘惑的で、話す爲めと征服する爲めに作られてゐた。(モウパッサン・前田晁譯)

それは可なり脊のある、スラリとした恰好のいい、まだ艶やかな栗色の髪を持つた、そして實際、斑点に見える迄あかくなつた頬をした、ひどく痩せ細つた女であつた。彼女は、此大きくもない室の中を、胸に手を組合せたまゝ、干乾びた唇をして、不正確に途

切れとぎれに呼吸しながら、あちらこちらと歩いてゐた。彼女の眼は、熱に燃えてゐるやうに輝いてゐた。けれども眼眸は鋭く、ちつと据つて動かなかつた。此結核性の、やつれ果てた顔は、その顔の上に顫へてゐる、消えかゝつた蠟燭の光の下で、病的な印象を彼に與へた。(ドストエーフスキー・白葉譯)

もう四十三にもなつてゐながら、その容色はまだ十分に以前の美しい面影を止めてゐて、其の上にも、精神の朗かさと、感覺の清新と、心の正直と、純な熱烈さを老後に至る迄も失はない婦人の常として、年よりは遙かに若く見えた。序でに言つて置くが、かうしたものを保つて行くといふ事は、老後に至るも猶己れの美しさを失はない唯一の方法である。彼女の髪は

もう白く薄くなりかけてゐて、細い光線状をした皺が、もう大分前から眼の周圍に刻まれ、頬は憂いと悲しみとの爲めに痩せ干乾びてゐたけれども、その顔は矢張り美しかつた。(ドストエーフスキー・白葉譯)

私が心を牽かれたのは、かの女の牛乳のやうな色の背中でもなく、かの女の黒玉のわななく黒い雨のやうな着物でもなく、うるさい程澤山に身につけてゐる縞瑪瑙の寶石の爲めでもなく、これも同じく縞瑪瑙で出来てゐて耳たばに結びつけられてゐるやうに見えるかの女の切れ長の眼の爲めでもないのであつた。私はむしろかの女のべちやんこな鼻と、まへに突き出てゐるかの女の胸と、秋の葡萄の葉のやうな黄色味を帯びた猶太人風のかの女の美しい顔色と、何か譯のあ

りさうなかの女の人を近づけぬふるまひとに心を牽かれたのであつた。(モオラン・堀口大學譯)

かうしてゐると如何にかの女が寸分のすきもない美人に見えたこと。パラレロ街の一流の衣粧屋の苦心になる黒づくめの衣紋をつくろうて、鳥の羽のついた同じく黒の衿らしい帽子をかむり黒狐の襟巻をして頬と爪先きに少しばかりの血の色を見せて、今かうして巴里のまん中にあつて、この秋日和のしづしづと菊の匂ひにさそはれて冬の方へと滑つて行く今日此頃を復讐の思ひを胸の底ふかくに秘めて暮してゐるかの女が何と美しく見えたこと。(モオラン・堀口大學譯)

老年

彼女の眼縁は古い魚の眼のやうに赤く爛れてゐた。絶えず涙が出て来ると見えて、時々手をやつてはそこいらを拭き廻した。眼のまはりにも、頬にも、一杯皺が寄つてゐたが、然し肉の豊かな方で、耳も大きく、鼻の恰好もチンマリと可愛らしく、口は大きくて笑ふたびに齧んだ小さい黒い歯がチラホラ見えた。

(藤森成吉)

乗客は稀であつた。そして丁度私達の前に一人の老婆が腰かけてゐた。洗ひ酒したネルの着物をきて、筒袖の先に皺くちやな両手を組んでゐる。けれどもそのどんよりとした眼がしきりにあたりを見廻してゐる。

丁度何か落し物を探すやうだ。

堅くなつて静にしてゐる乗客を一顧見廻した後、私達の眼は自然にこの老婆の上に引きつけられた。するとその落ち着きのない眼が私達の心を隅の方から次第に不安の中に浸していつた。(豊島與志雄)

老婆の名は杉と言つた。年は九十二歳で髪は峯に光る雪のやうに白かつたが、まだ額のへんには一握みの灰色のが交つた。口には笑ふと下顎に長い犬齒の二枚が見え、眼は素のまゝでよく物を見分けることができた。殊に腰などはしやんとしたもので、若い頃五尺二三寸もあつたと云はれた體軀は、此の年になつてまでも逞ましい骨格を見せてゐた。たゞ耳だけはつんぼだつた。(鷹野つき)

それは小柄な、皺がれた、六十恰好の、意地の悪さうな鋭い眼と、小さい光つた鼻とを持つた、素頭の老婆であつた。眉毛、睫毛も亞麻色の、白髪の少ない、彼女の髪は、油でてらくしてゐた。彼女の細い、長い、鶏の足に似た頸には、フランネルの襦袢がまきつけられ、肩には此暑さにも似合はず、全體にすり切れ黄色くなつた毛皮のジャケットがぶら下つてゐた。

(ドストエーフスキー・白葉譯)

誰か、寝臺になつて居る暖房の上で動いて、唸り初めた。あたりを見廻したアレキサンドラは、この薄闇の中で、辨慶織のハンカチーフの鉢巻をした老婆の黄い皺だらけの顔を認めた。喉元のところまで、重い外套をかけて居る彼女は、やつと息をつきながら

瘦せさらぼつた両手をびく／＼と動かして居た。

(ツルゲエネフ・田中純譯)

◇妻

彼の妻は、秋の着物の用意に言寄せて、東京へ行つて来ようと言ひ出した。彼の女は空の天氣を案ずるよりも、夫の天氣の變らないうちに、早い晝飯をすませると、毎夜の憧れである東京へ、あたふたと出かけた。心は恐らく體よりも三時間も早く東京へ着いたに相違ない。(佐藤春夫)

細君は淋しい顔に微笑を刻んで、うなづいた丈だつた。私はその物靜かな眼使ひを見た。頬に動く淋しい血の色を見た。而して感情の無い時の此の細君の

顔がひどく蒼ざめてゐるのを見た。私は既に此の細君の顔立ちを、自分の興味に價しないものと定めてしまつた。(豊島與志雄)

妻君は色の蒼白い、圓顔の、石地藏のやうに、肩の上へ頭を乗せたかと思はれる位首の短かい女だつた。顔などはまる／＼として居たが、それは本當に肉附がよいのではなくて、病的に脹んで居るのだといふ感があつた。眼が小さく、鑿で刻つたやうに深く切れ込んでゐた。そして喘息病みのやうに、しい／＼と肩で呼吸をして居た。口数の少い、寧ろ陰鬱な感じを與へた。彼女は小田君の後ろ斜に坐つて、小田君が私の前で、妻君に對する愛情を誇示するやうなことを戯れ半分に言つたりすると、擦ぐられるやうに身をすぼめ

て、小田君の肩の陰に顔を隠すのであつた。

(加能作次郎)

早くから親の手を放れて他人のなかに暮しながら、生活問題ではまるで苦勞といふものをしたことのない、零落した昔の好い身分の士族の娘に有り勝な、無邪氣で世間見ずの彼女は、東京にゐる時分から、良人の技倆や實世間の地位や収入などについては何も知るところがなかつた。金を渡されれば、渡されただけあちやぼちやに使ふし、無ければ無いで平氣でゐられると云ふ風であつた。(秋聲)

大阪の叔母の手元にて、しばらく上方風の世帯振などを見習つて来たおりかは、言葉などにも、ちよい／＼大阪辯が交つてゐて、それが一層彼女の人の柄

を優しく見せてゐたが、鳶色の鋭い目に、柔かい沈靜と明るい潤ひとが添つて来た。輪廓の調つた顔が見違へるほど愛嬌づいて来た。(秋聲)

◇藝者

K町から少し離れた裏通に藝妓町がある。その中を通つて、彼がよく知つてゐる待合に行くまでの間に、その邊を通るお座敷行きの女共の顔を、彼は一々覗き込むやうにする。彼女等が三味線を持つたチビの女を従へて、袂を取つて、さつさと細い小暗い道を澄して歩いて行く恰好は、不思議な活人形のやうな風に見える。今村が無遠慮に近づいてその顔を覗き込むやうにすると、『いけ好かない!』などと小聲で舌打しな

がら、小走りで彼の側を駆け抜けて、そして又さつさと活人形のやうな型にはまつた歩き振りで歩いて行つてしまふ。(廣津和郎)

彼の時分や、小太りに肥えて居た女は、神々しい迄に痩せてすつきりとして、睫毛の長い潤味を持つた圓い眼が、拭ふが如くに牙え返り、男を男とも思はぬやうな凛々しい權威さへ具へてゐる。觸るゝものに紅の血の濁染むかと疑はれた生々しい唇と、耳朶の隠れさうな長い生え際は昔に變らないが、鼻は以前よりも少し峻しい位に高く見えた。(谷崎潤一郎)

袷には遅く羅衣には早い初夏の夜の水際立つた派手な衣裳と飾のやうにしつとりと粘り固まつて居る束髪の毛の豊かな爲めに、年は非常に若く見えるが實

際は二十五六を下らないらしい。なよ／＼と瘦せた脊恰好と、高く細い鼻つきと、心持ち肉の落ちた兩頬の割合に少しも淋しく思はれないのは、恐ろしく表情に富んだ子供のやうに愛くるしい大きな瞳の力であらう。さうして、その瞳よりも更に非凡な魔力を以て、顔全體に不思議な潤ほひを及ぼして居るのは、誰が見ても直ぐに氣が附く異常に眞紅な厚味のある唇であつた。若しも其の唇色をした、刺身の魚肉の一塊にも喩へつべき紅い唇がなかつたならば、恐らく純白過ぎる皮膚の色つやが生氣を失つて石膏のやうに見えたであらう。(谷崎潤一郎)

彼女はそこへ鏡臺を立て直して、白粉氣抜きの化粧をした。割りに整つた彼女の素肌は、清々しいば

かりに蒼白く匂つてゐた。而して悲哀と驚愕に充血した眼は、却つて重たい深みを蔵してゐた。髪は自分で束髪に上げた。(久米正雄)

時にはまた非常に醜く見えることもあつた。思ひ屈してつかれ果てたといふやうな表情をする時には、口が際立つて大きく見えた。髪の毛の濃いのを誇りにして居る女とは思はれないほど艶のない衰へた氣分を起させることなどもあつた。(花袋)

女は絶えず異つた態度と表情とを見せて居た。衣服や化粧の具合で、肩がほつそりと柔かに見えたり、顔が蒼くヒステリックに見えたり、姿が生々と快活な風に見えたりした。眼の周圍に濃い影の生ずる時には、其心が對手の心にじつと浸み込まなければ止まな

いやうな一種の潤ひを持つて居た。(花袋)

私はその時、灯影を横顔にそらしながら、半面を月の光に洒らしてゐるかつ子の顔をうつとりとみまもつた。今までも數へきれぬほど逢つてゐながら、その晩ほど、かつ子が美しいと思はれたことは一度もなかつたのであつた。彼女の黒髪は鳥田の鬢が少しほつれて、鴨川の夜氣に罩められてかまるで漆のやうにつやつやしい。眼の色も黒く、冷たく濕んで、瞬をする度に睫毛までが月の光をちろ／＼と映してゐる。(長田幹彦)

◇ 雜

ある女は、二階の縁の欄干に凭れてゐる時、突

き落す眞似をして肩を押した彼に思はず抱きついたが、彼が手を離すと、もう一度自分で落ちさうな姿を見せて欄干に身を反らしながら、自分の胸を見つめて彼を待った。

ある女は、深夜彼がゐない間に彼の部屋に縫物を持ち込んで石のやうに坐り込みながら、彼が戻つて來ると、耳まで赤くして電燈をお借りしてゐますのよ、と云ふ奇妙な嘘を、咽にひつかかるしやがれ聲で云つた。

ある女は、彼の前でいつもじめじめ泣いてゐた。

(川端康成)

その時、二三人の若い女が、彼等の座敷に出て來た。その内に細い縞のお召の羽織を着た、むしろ藝者として見た方がいゝほど着こなしのいゝ、二十二三

の女が際立つてみんなの眼を惹いた。それが彼女だつた。ほかの女が軽い、下卑たやうな、それもありふれた洒落などを、得意さうに喋舌つてゐる傍で、彼女だけは品のいゝ愛嬌を見せながら、静かな話しぶりで話してゐたが、そのうちに帳場の方から持つて來た三味線をひいて、端唄などを小聲でうたつた。(細田源吉)

のぶ子は三四年前、未だ肩揚げの取れない十五六の頃に電話掛りとして此の社へ雇はれて來たのであるが、おとなしいのと、勉強好きなのとで人々に愛されて、今では編輯の助手をしてゐた。西洋蠟燭と綽名をつけられてゐた、色の蒼白い、餘り健康でなさうな、始終俯いて讀み耽つてゐるやうに何もない机の上を見つめてゐる淋しい少女であつたが、其れでも年を

取るにつれて彼女の「青春」が漸々其の顔の表情や四肢の肉づきに現れて來た。(谷崎精二)

女は一番奥の黄菊の鉢を置いた卓子の蔭にゐたらしく、立上つて、眠い眼をわざと大きく見開きながら、それでも唇のあたりだけ笑ひかけて、二人の卓子の方へ近寄つた。顔はさう整つて美しいと云ふのではなかつたが、友人の想像した通りに、媚びる分子の甚だ多い、動作の鋭い眼鼻たちで、あらゆる都會の蔭に住む女に共通な特徴として、笑つた顔も泣いてるやうに見える、典型的な給仕女だつた。(久米正雄)

家庭教師のよし子は、無口で、細面の青白い顔に、ヒステリー性とも云ふべき陰鬱な表情を持つてゐて、小供達の相手をしてない暇の時には、自分に當てが

はれた部屋の中に閉籠つて、何か深い考へに陥つてゐるものゝやうに、殆んど物音ひとつ立てずに、ちつと机の前に坐つてゐた。けれども、小供達に對する彼女の態度は心から親切であつた。だから、小供達も彼女に心から馴つてゐた。(廣津和郎)

道端には、脱ぎ捨てた着物の上に、ごく幼い男の兒が脚を擴げて坐らせられて、一つのじやが薯をおもちやにしながら、時々それを着物の上に落したりしてゐた。其の直き傍の畑には五人の女が身を屈めて、茶種の苗を植ゑてゐた。のろ／＼した、絶え間のない身動きで、今しも鋤き返されたばかりな大きな土の床に、尖つた木の杖を突き込んで、そして出來た穴に、もう幾らか萎れて、だらつと倒れるやうな苗をいきな

り挿し込んだ。そして根をかぶせては、その働きを續けて行つた。(モウバツサン・前田晁譯)

身體

◇肉體

宿の手拭で、手ばやく拭いた裸體のまま、脱衣場の隅の、大きな姿見の前に立つて、髪に櫛を入れながら、また少し瘦せたやうだな、と、さう氣がついて、薄暗い電燈の光を斜に浴びた身體をつくぐと見た。つい三年ほど前には自分ながら、今がおれの身體の旺盛な頂點だらうと、強い自信を持つたほど、健康その

もの、やうない、身體だつた。それが、昨年の秋に胃腸をわるくしてから、小肥りのした肩にも腕にも、あきらかに瘦せが見えはじめたのだつた。(細田源吉)

見上げるほど丈の高い恰幅のいゝ三十がらみの男である。腹の出張つた身體のみならず、顔まで圓々と肥つて酒氣を帯びてゐるかと思へるほどに血色よく、頬の肉の出張つた爲めに象のやうな小さい目がよく細く見える。(荷風)

彼女は紅の装束をつけてゐた。それは彼女に最もふさはしかつた。その濃厚な色は、彼女のなめらかな、白い餅のやうに柔かい、豐滿な肉體を、あやしく浮きたせした。彼女のまはりには甘い淫慾の空氣が浮動してゐるやうに見えた。彼女は彼女らしく衣裳をつ

けてゐた。それは八人の神女とことごとくちがつてゐた。張りきつた胸の肉がひろくあらはれてゐた。衣裳を強く下にひつばつてゐるので、ふくれあがつた兩乳が恰好よくもりあがつてゐた。(金子洋文)

銀いろの光線が桃いろの艶を溶いて彫刻家の身のまはりに渦を卷いた。白い氷山のやうな彼女の肉體に、それらの光線は浸透する。透明な酒の中に碧色の光線が屈折するやうに。(片岡鐵兵)

姢ましい程に、眼の覺めるやうな若い女の膨れあがつたその姿態。兩の手は、眞赤な罌粟の花を握つて、露はなふところの上に、靜かに組み合されて置かれてゐた。そして神のやうに純眞な息づかひが、甘い若い女の顔に蠢いてゐた。風は、暗夜のやうに黒い女

の攀毛を愛撫するかのやうに掻き亂してゐた。そして金色の穂は、震へ乍ら、白い脈を搏つてゐる處女の四肢を、軽く接吻けてゐた。(酒井真人)

保子は、頸筋から爪先まで、身體といふ身體にじいんと染み渡つて來る適度の熱さに、うつとりとなつて、ふうわりと兩手をうかべ、眼をつぶつた。何て、いゝ湯加減だらうと彼女は思つて、そつと眼をあいて、透きとほる湯の中につかつてゐる自分の肉體を見た。健康な、薔薇色に色づいた、肩から二の腕へかけての美しい肉附には、自分ながら見惚れずにもられなかつた。(細田源吉)

彼女はもう四十を越して居る筈だが、生れつきの色は白いのと、長年獨身で通して來たのとで、年よ

りはすつと若く、まだ三十を幾つも出ないやうに見えた。顔も身體も膝も、釣合よく圓々と肥え太つて、どつしりと落着いた體格で、側に寄る異性は誰でも重い肉の壓迫を受けるだらうと思はれる位、何處かに男を魅するやうな所があつた。黒く染めた美しい齒が、くつきりと、白い圓顔に映えた風情などは、たしかに豊熟した女性の美をあらはして居た。(加能作次郎)

かの女は小さな頭を持つてゐた。かの女は自分の狂氣じみた行動の云ひ譯の爲めにこの中には水が一杯い詰めてあるのだと云つてゐた。かの女は何時か一度は身體を持つてゐたことがあつたのだらうか？ 肩の所からかの女は急に瘦せた先の光つたコンパスのやうな形をした、さうして往來にささるやうにして歩む

二本の脚に分れてゐた。かの女は右の踵に銅に彫刻をした重たげなアラビヤ宮女の脚輪をはめてゐた、その爲めにかの女は跛ひいて歩いてゐた。

(モオラン・堀口大學譯)

私はかの女を寢臺の上に寝かせた。かの女は苦しげに呼吸してゐた。かの女のシユミイスが胸の所で樹皮のやうに裂けて私はまたかの女の乳房を見るのであつた。乳房はボオトの練習によつて發達した胸筋で肩へ結ばれてゐた。私はかの女の額に冷たい濡れ手拭を置いてやつた。かの女の兩脚は開かれて間は影に満ちてゐた……。(モオラン・堀口大學譯)

彼女は速度をゆるめて、そして、不意に仰向けになつて、腕を組んで、目を青空の方へぐつと開いて、

浮んだ。彼は河の面にそのやうに身體を伸ばした彼女を、波状をなした彼女の身體の線を、軽い衣にびつたりとついで、丸い形と高まつた頂きとを見せた、固い乳房を、緩く揚がる腹を、少し水に洗んだ腿を、水中できら／＼してゐるふくらはぎを、浮き出してゐた可愛い足を見た。(モウパッサン・前田晁譯)

◇男の顔

彼の顔は見るから人の注意を惹く或著しさを持つてゐた。眉毛、鼻、頬にかけての太くて強い線、少し大き過ぎる口、それ等が如何にも男性的な感じをその顔に與へてゐた。彼は髪の毛の一部の藝術家がするやうに、長く延ばして、分ける事なしに、無造作に

後へ掻き上げてゐたが、それが房々として多くて、黒と光澤があつて、そして一本々々がはつきり目立つ程太くて男らしく立派なのであつた。酒に酔はない場合の彼は、さうした男らしい一つ一つの道具立を持ちながらも、顔全體には何處かに軟かな優しさと、或る高雅な氣品の幾分をも持つてゐた。(廣津和郎)

ちよつとの間、小さい鏡の面に映つてゐた顔——女性的に生際の詰つた額だの、こゝろもち薄い眉だの、高く通つた鼻だの、豊かとは言へない頬肉などを、彼はちつと見入つてゐるうちに、女の眼が豫想されて、急に絶望的な氣持から、その鏡を投げ出した。

「をかした男だ」と、彼は自分を嘲るやうに呟いた。(細田源吉)

彼はまた残りの盃を傾けてやつと手を空けると、急に嬉しさに相好を崩して手の平をこすつた。目尻のあたりに寄る皺や、廣いけれども間がぬけておない額など、彼の顔は決して上品な部類ではなかつたけれども、それでもどこやらに——多分耳から頬にかけての餘裕ある線であらう——どこやら福相な感じのする顔であつた。しかも今はその顔に、何ともいへぬ人の好ささうな心の漂さへ見られるのは、彼の日常にくらべて誠に奇異な事であつた。(水野仙子)

客の吐く息は酒臭かつた。しかしその陶然と赤くなつた顔は、この莫真とした部屋の空氣が、明るくなるかと思ふ程、男らしい活力に溢れてゐた。少くともそれは金花にとつては、日頃見慣れてゐる南京の

同國人は云ふまでもなく、今まで彼女が見た事のある、どんな東洋西洋の外國人よりも立派であつた。が、それにも關らず、前にも一度この顔を見た覚えのあると云ふ、さつきの感じはどうしても、打ち消す事が出来なかつた。金花は客の額に懸つた、黒い捲き毛を眺めながら、氣輕さうに愛嬌を振り撒く内にも、この顔に始めて遇つた時の記憶を、一生懸命に喚び起さうとした。(芥川龍之介)

その鼻の高い、眼に少し險をもつた引緊つた顔から、この子の癖のだらしなく下唇を下げて笑つた面影が、ふと彼女の胸に釣合のとれない感じを残した。(田村俊子)

叔父は窓をうち開いて黙然と外を見てゐた。彼

は忍び足に近寄つて、その顔を見つめた。叔父は地面に眼をすゑて、だらりと兩手を窓に置いてゐる。背後から電燈の光を受けた顔が灰白く闇に浮んで、石にでもなりさうに思はれる程ぢつと動かないでゐる。

(豊島與志雄)

一見して百姓か勞働者としか見えぬ、色の黒い、小柄な五十餘りの男が、殆んど誰にも氣がつかれず、部に部の中へ入つてきた。彼は先づ急いで不恰好な烏打帽を脱いで、禿げ上つた額と頭髪の薄い頭を露はし、誰にともなく、無暗にぺこぺことお辭儀した。それから明らかに何か聞かうとして削げた頬を痙攣的に動かしながら、窪んで濁つてはゐるが、ギョロリとした眼で薄暗い中にゐる人々の顔を妙におどくした風

で見廻し始めた。(江馬修)

顔には無限の皺が疊まれてゐる。眼は落込んで、冷たい涙がたえず滲んでゐるやうに、眼尻のところは濡れてゐる。さびしい、冷たい、孤獨の顔だ。(未明)

額顚の處の肉は落ちて、額も頬も骨が高い。眉も白い。顔は男らしい色をしてゐるが、皺が深く、その生涯の色々な記憶を刻み付けてゐる。——彼はもう身體の底の底が衰へ疲れて、こらへきれぬ様に眠つて居る。それで其額顚の處に一本の大きな血管が、皺の中に高く出て居るのが、きは立つて見える。(葉舟)

兩頬は深く落ち凹けて、眼は窪み、額骨はかりがいやが上に高く、常には外して居る總入齒を、御飯の時などに懸けて、入齒をして居る者がよくする様に、

両脣をきゆつと引き縮めて齒を露き出す時には、そのいやに白く若々しく揃つた入歯が、彼の顔全體の相との調和を破つて、まるで骸骨の様に凄くした。

(加能作次郎)

彼の顔はまだ、至つて水々しく、美しいと言つてもいい位で、四十五といふ年よりは遙かに若く見えた。眞黒な頬髭が、二つのカツレッツでも並べたやうに、両側から快く顔に影をさして、綺麗に剃り上げた滑らかな顎のあたりで、一段と美しく濃くなつてゐた。

(ドストエーフスキー・白葉譯)

玄關は暗かつたので、這入つて来た客ははつきりと見えなかつた。キリイロフに見分けられたこと、云つては、唯だ其の男が中背であつたこと、白い顎

巻を巻いて、大きな、非常に青い顔——最初はそれが玄關の暗闇を明るくするやうに思はれたほど青い顔をしてゐたことであつた。(チエエホフ・前田晁譯)

厚い黒人のやうな脣、鷲のやうな鼻、枯れた、冷淡な眼付などが、何かかう切るやうな、不深切な、無作法なものを示した。梳らぬ髪の毛、落ち込んだ蟬谷、顎がその中に見えてゐる長い狭い鬚に早くも出来た白髪、青ざめた皮膚の色、ぶざまに角張つた様子、といふやうなすべてのものが、貧乏に堪へて来た、悲惨な、生活と人間とに疲れた生涯を語つてゐた。

(チエエホフ・前田晁譯)

顔の造作がきちんと良く整つて、鋭い鮮かな調子を浮べ、上髭の下の口は、その唇は、狭くて非常に

赤かつた。額には眉の間に規則正しい小さい三本の皺が並び、それは丁度ナイフで彫りつけたやうに整つてゐた。光澤のある髪はよく縮れ、額額の所だけが幾らか白くなつてゐた。(カイゼルリンク・中島清譯)

◇女の顔

天國の夢がさめたのは、既に秋の明け方の光が、狭い部屋中にうすら寒く擴がり出した頃であつた。が、埃臭い帷を垂れた、小舸のやうな寢臺の中には、さすがにまだ生暖い仄かな闇が残つてゐた。そのうす暗がりに浮んでゐる、半ば仰向いた金花の顔は、色もわからぬ古毛布に、圓い括り顔を隠した儘、未だ眼を開かなかつた。しかも血色の悪い頬には、昨夜の汗に

くつついたのか、べつたり油じみた髪が亂れて、心もち明いた脣の隙にも、糯米のやうに細い歯が、かすかに白々と覗いてゐた。(井川龍之介)

彼女は首を眞直にさし伸べて、顎をしやくつた。その眞面に燈が鏡の反射を受けて輝いてゐる。狭つた額に後れ毛が絡み、細りと擴んだやうな鼻が丘のやうだ。例の物言ひたげな眼を閉ぢて、口許をひきしめた爲に笑靨が出来た。一握の肩を落して観念した氣配に見える。私は濃緑に見える黛を、より細やかな女の眉に一字に引いた。次に、それを眼瞼の下へすうつと引いて小指の先でかいなでると、暈したやうな隅取りが出来て、目に深みが出た。濃い紅を唇にさし、桃色下ランを頬にはたいいて、牡丹刷毛でこすつた。(今東光)

娘の顔は彼が好きなたとは可成り違つて居た。眼は切れ長だったが、一重眼瞼だったし、頬が淋しかった。彼は女に對して好きな型なんて事は、根柢のない事だと思つた。それはたま／＼、初恋の女に似て居るとか、美しい彼妹に似て居るとかの原因に過ぎないと思つた。彼は其の娘が好きになれさうな氣がした。

(伊藤貴麿)

濛々と立ち罩めた場内の汚れた空氣の中に、曇りのない鮮明な輪郭をくつきりと浮ばせて、マントの蔭からしなやかな手をちら／＼と魚のやうに游がせてゐるあでやかさ、男と對談する間にも、時々夢のやうな瞳を上げて、天井を仰いだり、眉根を寄せて群集を見下ろしたり、眞白な齒列びを見せて微笑んだり、其

度毎に全く別趣の表情が、溢れんばかりに湛へられる、如何なる意味をも鮮かに表はし得る黒い大きい瞳は、場内の二つの寶石のやうに、遠い階下の隅からも認められる。顔面の凡ての道具が單に物を見たり、嗅いだり、聞いたり、語つたりする機關としては、あまりに餘情に富み過ぎて、人間の顔と云ふよりも男の心を誘惑する甘味ある餌食であつた。(谷崎潤一郎)

削つても削つても生地の白さが層をかさねてるやうに皮膚が厚ぼつたくて柔らかに白い。唇が薄赤く小さくて、笑ふとその口が恰好よく小判形になつて、然うして稍々長い間開きツばなしになる。この女の皮膚はどこも綺麗であつた。さうしていつもべた／＼としてゐるやうな感觸の味がその肌にあつた。女はこの

女の咽喉首あたりの肌を見てゐて、ふとその同性の肉に動かされたことがあつたので自分ながらびつくりしたことがあつた。(田村俊子)

疊二疊ほどの狭い脱衣場の大鏡の前へ、彼女がすつと近づくと、その冷たい面が、すぐ彼女の肉體の温かさをうけて、濛つと曇つた。彼女は、束髪の後れ毛を搔き上げながら、やがて鏡の面がいくらかづ／＼晴れて、そこへ細面で、鼻筋の少し高いほどに通つた、伶俐な眼附をした顔が、はつきりと映り出すのを見た。容貌に對する強い自信が、彼女の胸に湧いて、快い吐息が、ひとりでに漏れた。(細田源吉)

寝息のかゝるほどに、近々と寄せてゐる女の顔は、障子の方を背にしてゐるその仄暗さで、落ちつい

た、陰翳のなごやかなものにされてゐた。むしろ、觸れてはならないやうな、淨々とした感じだつた。——ぢいつと、彼は仄暗さを透かして、自分が熱く愛撫した頬や唇に、許しきつた親しさを見出さうとした。

(細田源吉)

彼女の言葉の切れ目切れ目に、さうだよさうだよと云ふやうに、軽く首肯してみせてゐた。彼が云ひ終ると、ひよいと顔を擧げて、彼の顔をぢつと見た。月の光を受けた仄蒼い素顔の中に、獸のやうに露はな眼が眞圓く光つてゐた。沖の方から吹いてくる風と共に、彼はぞつと肌寒い感じを全身に覺えた。

(豊島與志雄)

長い間睡眠の不足と心配とで、肉が落ち蒼さめ

て、平素は餘り目立たない雀斑が頬の皮膚の表面に浮き出しているのを見て、たゞ彼女を憐れむ情だけが湧いてきた。彼女も黙つて顔を伏せてゐた。(豊島與志雄)

光子は眼を開いてぼんやり天井の板を眺めてゐた。寒れた頬の顴骨が目立つてきて顔附を變にくづしてゐたが、その頬にはほんのりと赤みがあり、また小さな子供らしい口元には昔のまゝの愛くるしさが残つてゐた。物を言ふ度に何處か筋肉が足りないやうに思はせる唇だつた。(豊島與志雄)

顔一ぱいに何とも言へない淋しい影がさして居る。額から頬にかけてが青くやつれて、その上に勢のない暗い色が見える。唇の色は血の氣が無くなつて、鼻の邊も痩せが見えるやう。一體から黙つて考へ込んで

で居るやうな顔だちであつたのだが、前に遇つた時には何處かいきいきとした、處女らしい血色をして居たので、それが調和して如何にも懐かしいといふやうな思ひをさせるのであつた。それがどうだらう、今見るとまるで砂漠の中を旅して居る人のやうだ。(葉舟)

右の頬には、子供の時腫物を切つた創痕が、未だに禿けて光つて居た。その外は全體に赫らんだ締りのない肉のついた顔が、すゞ黒く煤けて居た。赤茶けた髪をぐる／＼巻きにして、幾日も櫛を入れないものの如く灰をかぶつたやうに埃があつた。生え際の毛などが、汚ならしく群がりほつれて居た。(加能作次郎)

その横顔を盗み見てゐると江口の小高い鼻筋の中程の處が線では描けないくらゐ心持ち高くなつてゐ

る。それは何代かの美しい男女の遺傳を證する顔に屢々見ることの出来る鼻であつた。その下にはさも柔かさうな唇が蕾のやうに結ばれてゐた。(秋江)

鴛鴦のやうな古風な髪のかたち、青光のする口紅、昔の人が考へた紅と水色と黒との衣裳の色の調和、いかにも遠慮勝ちな物羞ぢと打解けない様子をして伏目がちに物を見るその容貌は、丁度人形だ。私はあの巴里のルキサンブル美術館で見て來た青銅の彫刻を思ひ出す。あの日本の古い能の面からでも思ひ付いたやうな胸像の顔を思出す。あの筋肉の動きといふものを全く外觀から取去つた青銅の顔を通じて神經の震へがよく表はれて居たやうに、その厚化粧した人形にも、人をそらさぬ、ませた、恰かな、隠れた心持が

讀まれる。(藤村)

彼女の顔は新鮮さと健康とに輝いてゐた。口はどちらかと言へば小さ過ぎる位で、紅色を湛へた鮮やかな下唇は、顎と一緒に心持ち前へ出てゐたが、これが此美しい顔に一種の特徴を、傲慢らしいものを與へてゐる唯一の瑕瑾であつた。彼女の顔の表情はいつても、明るいと憂鬱だとかいふよりは、眞面目なものであつた。が、それに微笑が添つた時には、晴れ晴れとして、若やいた、自由な笑ひの添つた時には、熱烈で、正直で、淡白で、律義で、力士のやうに強くて、ついで一度これに似寄つたものすら見たことのない酔の廻つてゐたラズーミンが、一と目見て思慮を失つたのも、決して無理はないと言へよう。(ドストエ

1フスキー・白葉譯)

この顔にあつては凡てが眞面目に中庸でありさうして圓味を帯びてゐる。笑靨の穴のあいた頬、それさへが既に二つの圓さである。厚い唇と額と少しく高めについた頬骨とは、正面をややにはづれた四分の三位の横顔にして眺める時、見る人の視線がかの女の眼瞼に達するのを中途にひきとめて、抵抗ふすべもなくこれを斜に斷ち切つて、さては芝居がかりに大きやうなかの女の盗み見を見せてくれるのである。

(モオラン・堀口大學譯)

彼女の顔は、幸福で照り輝いて、人生の花盛りの表情を帯びてゐた。其の白い肉は、褐色の毛の生えてゐる金白の肉は、輝くやうに見えた。そしてたつぷ

りある髪の毛は頭に巻きつけられて、燃え輝くやうな捲毛は、重さうに額に垂れたり、まだ幾らか痩せてゐるしなやかな頸筋に押しつけるやうに密集してゐたりした。(モウバツサン・前田晁譯)

男の眼

博士は机の上に両手で頬杖をついてちつとこちらを見てゐた。空間を見つめるやうな眼附をこちらに向けたまゝ、頬の筋肉一つ動かさなかつた。綾子はその静かな顔付に、彼女が来たことに氣も付かないらしい無表情な顔付に、びつくりした。そしてまた自分の方に向けられてゐる大きい眼にぞつと不安を感じた。

(豊島與志雄)

伯父の笑顔は滅多に見られなかつた。何處が悪いか知らなかつたが、いつも疲れきつた、懶さうな様子をして、寢床の上に脇息に凭れ、苦りきつた恐ろしい顔をして、ちつと一方を凝視して居た。三方壁で圍まれた薄暗い部屋の真中に、私はいつも彼のぎろぎろした恐ろしい眼を見出して縮みあがつた。店に坐つて居ても、私はその鋭い眼光が、隣の部屋から壁を射透して來るかと思はれた。私はそれを私の背に感じた。(加能作次郎)

殊に魅力のあるのは彼の眼だ。それは強いと云ふ方でも、鋭いと云ふ方でもないが、何處か奥深いところ烈しい情熱をひそませてゐて、心に或慾望の萌して來たときには、執念深い蛇のやうな光を放ち、か

と思ふと、突然精神的とでも云ふべき温雅な優しい微笑に美しく明るく輝き出すと云つたやうな、感情の極端と極端とを絶えず交互に表すところの、あの魅力ある複雑な眼であつた。(廣津和郎)

眼が神経質な鋭い光を持ちながら、それでゐて、何か憧れてでもゐるやうな女らしい優しきを持つてゐました。その時は勿論氣が付きませんでした。次第に馴れて來るにつれて、その眼の表情が始終變化するのが解りました。晴々してゐるかと思ふと、急に雲がかゝつたやうにどんよりして來て、妙に陰鬱な感じになります。自分にもそれが分ると見えて『僕の眼は今變に暗くなつて來たでせう。これは僕の頭に霧がかゝつたからです』こんなことを後になつて私に言つたこ

とがありました。(廣津和郎)

その眼はいつの間にか、眉毛の下の、深く窪んでゐた眼窩の中に這入り切らぬほど、大きく一杯に押し擴がつて、黒眼と白眼との境界がくつきり分るやうに牙え返つてゐた。其の眼は、陰鬱といふものゝ微塵もない、西洋料理に使ふ磁器の皿のやうな地色と硬さとを持つた眼であつた。眞白な西洋紙のまん中へ、濃い圓い斑點を打つたやうな、全く潤ほひのない、鋭い光といふよりも、底氣味の悪い明るさを持つた眼であつた。(谷崎潤一郎)

左の眼は右の眼より少し大きかつた。女を知らないその眼は女の眼のやうに澄んでゐた。左の眼は見、右の眼は考へてゐた。物思ひにでも耽る時、どうかす

ると、少し細まつた彼の眼は夢遊病者のそれのように瞬きをしなくなつた。(有島武郎)

(チエエホフ・前田晁譯)

◇女の眼

私は一つの期待を持つて講談本を取上げた。果して踊子が、するすると近寄つて來た。私が讀み出すと、彼女は私の肩に觸れる程に顔を寄せて眞剣な表情をしながら、眼をきらきら輝かせて一心に私の顔を見

つめ、瞬き一つしなかつた。これは彼女が本を讀んで貰ふ時の癖らしかつた。さつきも鳥屋と殆ど顔を重ねてゐた。私はそれを見てゐたのだつた。この美しく光る黒眼がちの大きい眼は踊子の一番美しい持物だつた。二重瞼の線が云ひやうなく綺麗だつた。それから彼女は花のやうに笑ふのだつた。花のやうに笑ふといふ言葉が彼女にだけほんとうだつた。(川端康成)

彼女の眼はいつも冷かな鋭い光りを持つてゐたが、その時は魂の底までも曝け出したやうな奥深い光りに燃えてゐた。黒目は小さかつたが、瞳孔は大きかつた。凡てを吸ひつくすと同時に凡てを吐き出すやうな熱い亂れた光りがあつた。何といふ残忍な眼だらう。(豊島與志雄)

薄い眉毛の下に切れの長い目がついてゐた。大きな黒い瞳の上にはちら／＼と揺れる輝きがあつた。その輝きは、それを捉へ難いうちにもう別な輝きに移つてゐた。その中に彼女の見る凡てのものゝ影があつた。また彼女の心のうちの凡ての感情の影があつた。その眼は多くのものを語り、多くの意味を傳へた。(豊島與志雄)

(豊島與志雄)

天井を見てゐた光子の眼がまたちつと壯助の方に向けられた。病に頬の肉が落ちてからその眼は平素よりも大きくなつてゐた。そしてその清く澄んだ黒目の輝きが露になつてゐた。(豊島與志雄)

利口と云へば何よりも利口さうなのは其の眼でした。パツチリとした、青貝色に牙えた白眼の中央に、

瑠璃のやうに光つてゐる偉大な黒眼は些の潤ほひをも持たない代り、いかにも利口さうに深く沈んでゐて、ちやうど日光を透き徹してゐる清冽な水底に、すばしこい體を落ち着けて、靜かに尾鰭を休めてゐる魚のやうでもありました。さうして、魚の體を庇うてゐる藻のやうに、其の瞳の上を蔽うてゐる睫毛の長さは、眼を潰ると、頬の半ばの所にまで、其の毛の先が垂れるほどでした。(谷崎潤一郎)

薄化粧の地肌がそんなにケバ／＼しくなく、曇硝子のやうに鈍味を含んで、血の氣のない、夢のやうなほの白さを擴げてゐる中に、その眼だけが、くつきりと、紙の上を這つてゐる一匹の甲虫のやうに生きてゐるのです。(谷崎潤一郎)

先刻から娘の眼が絶えず、ちろ／＼と自分の方へ注がれてゐるのを感じた。そして、その眼が、特に大きい美しいものであることを感じてゐた。今自分はそれを瞞めると同時に、彼女の眼は、何だか人の心をはぐらかすやうな、不思議な廻轉を、ぐる／＼と二度ばかり廻轉した。(田中純)

エリートさんは僕より年も上だし、僕なんぞが仲好しにならうとしても、氣位が高くて、さうは許さないんだ。だけれど、あの巴旦杏の形をした、天鵝絨地のやうな眼で見られると、僕は時々ほせるやうな氣がする。そんな時僕は、何だか斯う非常な事が出来上りさうな感じがして堪らないのだ。

(カイゼルリンク・中島清譯)

今かうして此處にかの女と逢つて見ると、私はその頃と同じく、忽ちに人の心をつかへてしまふがまた數歩かの女から隔るとおきに忘れてしまふやうな一種の魅力を持つたかの女を再び見るのであつた。人は風呂に浸るやうにしてかの女の目なごしに浸るのであつた。かの女の眼はその表面を泳いでゐる人に、百尋も深い底がはつきりと見える水の色をしてゐた。

(モオラン・堀口大學譯)

唇

容貌も戀女房の母に似て、ふつくらとした、上品な美男だつた。赤い唇が無邪氣な善良性と、おツとりとした智性とを現してゐた。私にとつても、愛すべ

き弟に違ひなかつた。(小島政次郎)

少し厚みのある眞紅の唇は、閉ぢるともなく、また開くともなく、たゞ自然に二つ合さつてゐた。白い齒が——彼女の齒並は見事であつた——その唇の間から、ちらと見えるかと思ふと、すぐにまた見えなくなつた。二つの唇の合さつた兩角がぼつりと凹んで、其處にいつも人の心を引きつける陰影があつた。遠くから見ると、その唇は笑つてゐた。近くで見ると新鮮な肉感的な(若しかういふ言葉が許されるなら)魅惑に満ちてゐた。(豊島與志雄)

こんなにも申し分なくつくられた口もとをこの娘さんは何だつて今までかくしてゐたのだらう。薄いくつきりと刻まれた唇で、さう赤くはない。さうだ、

桃色大理石の色の濃いのはそつくりあんな色のがあるがその時の私は直ぐに山茶花を聯想してゐた。

(佐藤春夫)

一つ一つ吟味すると、何處と云つて取り柄はない。鼻は高いけれども、獅子つ鼻だし、眉毛は細く長く尻の方が軽薄さうに下つてゐるし、いやに色の紅い薄い唇が蓮つ葉らしく大きく切れて、而も三日月型に上の方へしやくれてゐる。(谷崎潤一郎)

◇鼻

この娘さんの鼻が我々日本人のものとしては一向低くも見つともなくもない好い所ではあるが、ロオマンノオズでつまり目と目との間で一度低くなつてそ

れからまたもう一度高くなつてゐるのだが、その耳隠しにはどうしたつて鼻すじが額から真直ぐに通つてゐるギリシヤンノオズでなければいけない。ところがこの娘さんは自分でもうちゃんとその事を心得てゐて、そのところをごく自然に高く見えるだけに白粉を濃くしてあつた。だから一目見たのではどうしても形の典雅なギリシヤンノオズに見える。(佐藤春夫)

鼻の形にしても、高い、筋の通つた、好い鼻つきではあるけれど、これも決して缺點がないことはありません。といふのは、先の方が尖つた部分に少し肉が付き過ぎてゐて、眉と眉との間から起つて、其處まで、なだらかな勾配を保つてゐる鼻梁の直線が、小鼻の付け根の邊へ來ると、膨脹の肉のやうな工合に幾分

か膨れて、鋭さが鈍つてゐるのです。(谷崎潤一郎)

膨らんだ頬べたの蔭から、少しづつ、實に少しづつ、鼻の頭の尖りが見えて來る。ちやうど汽車の窓で景色を眺めてゐる時に、とある山の横腹から岬が少しづつ現れて來るやうな工合である。私は其の鼻が高い、立派な、上品な鼻であつてくれ、ばいと思つた。(谷崎潤一郎)

ルメジオスは私の眼のすぢに私の心を読む。私にはかの女の脂ぎつた皮膚の上に秀でて見える白粉まみれのかの女の丸味のある鼻以外には何にも見えない。(モオラン・堀口大學譯)

◇髪

髪の毛がだん／＼薄くなる。そしてまさぐる手につれて脱け落ちる毛を調べて見ると、影のやうに細くなつてゐる。其の一端を左の指の爪と爪との間に固くつまんで、其のつまんだ先の所からすうつと右の指の爪と爪とでくいとしくくと、くる／＼とまるまつてしまふ。麗かな春の日影の射した窓の下で、餘念なくそんなことをしてゐる自分の姿をふと氣がついて思ひ浮べて見ると、自分がひどく老人臭くなつたやうな氣がして來る。(前田晁)

後頭部に大きく束ねられた黒髪を、細い首筋が重々しさうに支へてゐた。それが軽くゆらゆらと揺ぐ

と、彼女の顔は、にこやかに微笑んでゐた。(豊島與志雄)

彼の頭の上には地衣のやうに干からびた数本の頭髪が縮れてゐた。このはかない、あまり當にはならぬ約束のやうなおぼつかない毛が、やがて白い鬚となつて胸の上にも垂れ下り、其處にもちやもぢやに生えてゐる古道具屋の店先にある古い長椅子の中からはみ出した馬の尻尾の毛のやうな胸毛の前で面喰つてゐる形である。(モオラン・堀口大學譯)

さうしてまたかの女が帽子をとつた時に初めて私に見ることの出来た、耳の所までびつたりと引つめられてゐて、耳の所からは自由な泡のやうな縮れ毛になつてゐるかの女の頭髪、あんまり油が澤山につけてあるので黒くはなく反つて五色の反射を見せてゐるか

の女の頭髪、金ぴかな櫛をさして手拭か何かのやうに固くしぼり上げた髷になつてゐるかの女の頭髪、われ等は容易にかの女が西班牙女であることを知る事が出来るのであつた。(モオラン・堀口大學譯)

◇髭

或る日、妻は卓子の上の薔薇を寫生してゐる良人の横顔を眺めてみた。と、彼女は

「あら。」と聲を立てかけた。

別に驚くこともない、たゞ良人の顎の先端に生えて來てゐた髭が少し眼立つて延びてゐたのに過ぎなかつた。だが、彼女にはそれが非常に淋しく見えた。

「まあ、もうあんなに濃くなつて！」

彼女はどうかして良人をいま一度昔の若々しい良人の姿にしてみたくなつて來た。そこで、

「ね、あなた。」と彼女は良人に呼びかけた。

良人は薔薇の花を見詰めたまゝ黙つてゐた。薔薇は埃りの積つた壺の中で一輪きりりと眞赤に咲いてゐた。(横光利一)

彼はふと柱鏡を覗いてみた。願のあたりに髭がもぢやもぢや生えかゝつてゐた。彼は嫌な氣持になつて、洋服を脱ぎすするとすぐに髭を剃り初めた。そして口髭のまわりに剃刀をあてる時に、ふと、いつから俺は口髭を生じたのかな、とそれが不思議な氣持で考へられた。——戀をして、結婚して、子供が出來て母が死んで、それから……。 (豊島與志雄)

二人がかうして坐つてゐた時に、従兄弟のハンスはなほよく大尉を調べて見た。そしてもう六十歳だといふのに、シユラツペ大尉がまだ美男子であつたことを認めずにゐられなかつた。それに短い、鐵褐色の上髭の尖きを少し上にはねてゐたのが、彼に一種の若らしい様子を與へた。で要するに、彼は古い石版畫のオスカアル第一世に非常によく似てゐた。

(ケラン・前田晁譯)

◇手

「私ね……。」と云ひかけたが光子はふと言葉を切つた。それから右手を蒲團の外に出して、「こんな手が穢くなつたわ。洗つてはいけないの。」

手の指は透き通つたやうに蒼白く綺麗にしてゐたが長く洗はない手首から上は黒く垢がついてゐた。生気のない乾燥した皮膚が爪で掻いたらぼろ／＼と落ちさうであつた。

「も少しの我慢よ。癒つたらすぐに綺麗になるからね。」

壯助はその手を取つてそつと蒲團の中に入れてやつた。その時彼はそれとなく手首の脈に觸れることを忘れなかつた。軽いそして心持ち早い脈搏が彼の指先に感じられた。(豊島與志雄)

彼女は、今更に自分の手指なぞをも見た。細い指は、すんなりと、華奢に伸々として、こゝろもち先の廣がつた恰好のいゝ爪は、紅色に艶づいてゐた。指

の中でも、彼女は左の方の薬指を、とりわけ愛してゐたが、ふと、今それに氣づくとも、いきなり唇へ持つて行つて、強く吸つた。それからまた一寸眺めて、もう一度強く吸つた。(細田源吉)

指頭はまるでさゝらの様にさゝくれ立ち、甲はふくれあがつて、上皮だけが薄黒くかち／＼に堅くなつて、本當に輕石か蟹の脊かの様だつた。そして指の節々には、殆ど一本も残らず、大きな輝が深い口をあけて居た。時々赤い血が小指の節などから滴つた。晝の間、水仕事や何かして立ち働いて居る間は何ともなかつたが、夜になつて、臺所から上つて火鉢の側へ寄りなどしてしばらくすると、手が次第に乾いて來るに従つて、手全體がびり／＼と火のつくやうに痛み出し

た。(加能作次郎)

◇聲

彼の口からは言葉が洪水のやうに流れ出した。

「ふん！」初めて——彼女は答へた、が、その答へは咽喉でしたのか、鼻でしたのか、分らなかつた、しかし、それが彼女が彼の長々しい言葉の洪水に對する、唯一の、夢中の、そして勢一ぱいの返事に外ならなかつた。それは眞に迫つてゐた。(宇野浩二)

噎れた女將の聲は粘つて、妙に相手を壓迫し、

いやとは云はせない呼吸を持つてゐた。

同じ高さの、同じ速度の落着いた聲で、自分自身にでもいひきかせて居る様に云ふのだつた。(水上瀧太郎)

女の唇は、可成り激しく動いてゐた。その表情から察しても、その髪の毛が時々揺れるところから見ても、彼女は相當に高い聲で話してゐるに相違なかつた。それなのに、不思議にも、文吉の耳にはその女の聲が全く聞き取れなかつた。それどころか、彼にはその女の言葉によつて、空氣は一微動すらしないやうに思へた。(藤森成吉)

奥まつた墓地の方はひつそりと静まりかへつて居るが、その静けさを破つて、地の底からでも湧き出るやうな祈禱の言葉が聞えたりする。低い顫へるやうな聲の調子が、いかにも幽界から傳はつて來るものやうで、なかには斷腸の思ひに破れたかの如き、悲しげな聲、泣き訴へるやうな聲、慟哭を抑へてゐるやう

な聲が、朽ちかゝつた十字架にまつはつて聞える。するとまた平然として絶望を嘆くやうな聲が、さながら稲妻が閃くやうに人の心を撃ち、また茂みの蔭で子供の、めそめそと恰も巢に残された雛鳥が親鳥を戀ふやうな、やるせない淋しさで泣き崩れる聲もするのであつた。(レイモント・朝鳥譯)

アボオギンの聲と動作とから彼が非常にあわててゐたことは明らかであつた。火事か狂犬かに却かされた人のやうに、呼吸を鎮めることが出来なかつた。彼は顫へ聲で急いで話した。で其の言葉の中には、何とも言ふに言はれない眞實な、そして子供らしくねだるやうな調子が響いてゐた。けれども驚いて膽を潰したすべての人々のやうに、短いきれいな文句で話した

て、餘計な、辻褄の合はぬ言葉をいくらかも使つた。

アボオギンの聲は心配で顫へた。顫へと調子とは、何かかう言葉よりもつと人を説き伏せるやうなものがあつた。彼は確にまじめであつた。けれども、どんなによく其の言葉を選んでも、一旦それが彼の口から出ると、しかつめらしい、魂のない、不似合な文飾が附いて、醫者の家の雰圍氣をも、死にかけてゐる彼の細君をも輕蔑するものゝやうに見えた。彼は自分でもそれに氣が付いたので、誤解されまいとして、其の聲を優しく柔かに響かせるやうにと一生懸命で努めた。そして若し言葉で駄目なら、せめては調子のまじめなので相手を動かさうとした。(チエエホフ・前田晁譯)



彼女の最も大きなチャアムは其の聲にあつた。それがその口から出るのは、水が泉から出るやうに、自然で、軽快で、音が調つてゐて、朗明で、それを聞くのは肉體の快樂であつた。しなやかな言葉が、さざめき流れる小川のやうな趣を持つて流れ出るのを聞くのは耳に取つての喜びであつて、そしていくらか赤過ぎる位の綺麗な唇が、言葉を通らせる爲めに開くのをみるのは目に取つての喜びであつた。

(モウパッサン・前田晁譯)

日は暮れかゝつて來た。雪は薔薇色を着け、乾いた、凍つた風は其の結晶した面を荒い疾風となつて吹いた。ウルリツヒは、耳を貫くやうな顫へ聲を長く上げて呼んだ。其の聲は山々の眠つてゐる死のやうな

沈黙の中を走つて、宛も海の波濤の上の鳥の叫び聲のやうに氷結した泡沫の奥深い不動な波濤の上を遠くまで擴がつて行つた。そして消え失せたが、彼に答へるものは何もなかつた。(モウパッサン・前田晁譯)

服 装

旅人は兵隊の外套、——カアキイ色にならない前の黒いやつを着てゐる。鈕は黒いのと取り變へてあるが、袖には赤い筋が巻かれたまゝになつてゐる。外套の下に、小さな風呂敷包でも帯の上から背負つてゐるとみえて、尻のところはブクリとふくらんでゐる。前の衣囊にも何か入れてあるかして、下廣がりに、格構の悪い空瓶に足が生えて歩き出したやうだ。外套に

ついてゐる頭巾を剣先錫の形に突立て、顔と云つては、寒さに赤くなつた鼻の先がちつとばかり窺いてゐるだけだ。足のかためは云ふまでもなく雪沓だが、林にはいつてからつぼめて、杖についてゐる洋傘が白張で、ところ／＼に赤い汚點のやうなものが見える。

(里見諒)

岡村と云はれた青年は、中肉の身體にスツキリと合つてゐる琥珀色の、瀟洒な夏服を着てゐた。そして手際よく結ばれた玉虫色のネクタイが、此男の調つた服装の中心を成してゐた。吉川と云ふ方は、明石縮の單衣に、藍無地の縞の夏羽織を着て、白っぽい縞の袴を穿いてゐた。二人とも、五分の隙もない身装である。(菊地寛)

鼠色の中折を冠つて、銘仙縞の羽織を着てゐた。縞の甲型の紡績縞の裕に鼠色英ネルの單衣を其の下に重ねて黒い兵古帯をしてゐた。紺足袋に桐の書生下駄といふいでたちで柳のバスケットを提げてゐた。見たところ、それほど光つた服装でもないが、一見して労働者と思へないほど、何處となく整つて見えた。

(宮地嘉六)

その乞食と云ふのは、汚いざりであつた。兩袖をちぎり取つた汚い黄色がかつた浴衣地の襦袢を着て、その裾をまくつた兩足には、紺の股引らしいものをはいてゐた。兩方の足の先は、軍隊用のゲートルみたいな布でぐる／＼と巻いてあつた。(豊島與志雄)

ヤグナのスカーートの豊麗な地質に加へた華やか

な立模様の太い線、動けば七彩に映える虹のやうな色、緋の紐を組みあげてレースを附けた其の中高の漆のやうな黒い靴、その邊からちよい／＼のぞき出る白の靴下など、とろりとさせる程に甘く人の眼を奪ふものがある上に、櫻色の胴衣のホルセットが、黄金色の縁縫ひにばつと燃えあがる程に眩く、あらはに白い雪の胸に、琥珀と眞珠との互に置いた珠數のうつり、そこから背の方には一束にしただんだら染めのリボンがふうわりと流れて居る。(レイモンド・朝鳥譯)

侯爵夫人は嬉しさに、非常に嬉しさに見えた。品よく着た黒い無地の着物が、彼女の強い、張り切つた線を見せた中に、胸衣にあるちよつとした赤と、腰から鎖のやうに垂れ下つて、臀の上で結ばれた赤い

カアネエシヨンの花飾と、黒い髪に挿した赤いばらの花とが、彼女の身體中に、血のやうな赤い花をつけたあつさりとした粧ひに、ちつと見詰めた目付に、靜かな言葉付きに、稀にする身振りに、何か燃えるやうなものをも與へた。(モウパッサン・前田晁譯)

彼女は白いフランネルの上下揃つた着物を着てゐた。それが織物のひら／＼してゐる柔らかさで彼女をきやしやに包んでゐた。緩い胸衣には、大きな襷があつて、堅くなつて既に成熟した彼女の自由な胸を、見せもせず、抑へもせず、ほのめかした。そして彼女のうつくしい頸筋は、やはらかな線で傾いて、其の着物よりも一層白く、金髪の重たい荷物を擔つてゐる肉の寶玉となつて、粗造なレスの泡から抜け出てゐ

た。(モウパッサン・前田晁譯)

表情

戀の表情

彼はシヨパンの「小鳥の歌」を吹き鳴らし初めた。さうしながら彼は唇の丸め方とか眼の濕ひとかさうした表情にあらゆる魅力を集注した。そしてそれがすぐに彼女の上に働きかけてゆくを感じた。

彼女は眸を高く上げ唇を心持開き、それから左り脚を右の膝に載せて小さな靴の瓜先を軽く揺す振つた。其度に彼女の眞紅な靴下がちらちらと見え隠れす

るのだ。

此の彼女の様子を見ると熱い血がいち時に彼の頬に上つて來、さうしてその額から汗が流れ落ちた。彼はビタリと口を閉じて彼女を凝視した。彼女は極めて自然にその視線を外らして窓の外を見た。彼は彼女の横顔が微かに痙攣してゐることを知つた。(十一谷義三郎)

女は然う云ひながら、自分の膝の上のせてゐる男の手を取つてその顔をのぞいて見た。男が顔を上げた時、女は少し自分の頬から瞼のまはりがちらちらと縮んでゆくやうな眩しさを感じたけれども、我慢して、その眼にちつと力を入れて、睫毛ののゝきに微かな羞ぢらひを集めながら、男の顔を見詰めてゐると、男はすぐに眞赤になつて下を向いた。(田村俊子)



静子はふいに大きく眼を開いた。そして辰夫の凝視の中に、露はな心と瞳とをちつと投げ出した。辰夫も自分の赤裸の心を瞳の中に集めた。それはもはや何の羞恥も巡逡もない朗かな抱擁であつた。二人の露はな瞳は一つになつて輝いた。(豊島與志雄)

秀子はふと山田の方を顧みた。彼女はきつと下唇の端をかみしめた。眼が異様な輝きを帯びた。そしてその緊張した一瞬が過ぎ去ると、彼女の顔はその眼とその唇とで静かな微笑のうちに、おのづと融け去つていつた。……山田は彼女の腕の中に居た。そしてそれを自ら意識した瞬間に、息のつまるやうな柔かな壓迫と共に、彼女の低い聲を聞いた。

「今晚は歸さないわ。よくつて」(豊島與志雄)

笑ひの表情

利久がかつた鼠色のシヨールで襟許を隠した女は、黒い手套に指先を通さうとしてゐると、男から袂紗にくるんだ財布を渡された。黙つて受けとつて、それを帯の間に挿れ込まうとしたが、かなり分厚なために懐中の方へ挿れ直しながら、ひとりでに浮んだ嬌笑で、

「みんな使つてもいいの」と、男の顔を見た。(細田源吉)

私が見惚れてゐた利那である。彼の女はちよつと、微かに笑ひを洩した——私は私のために笑つてくれたのだと思ひ込むだけの自惚はどうも持てないが、さうかと言つて彼の女がそれで私を愚弄したとも思へ

ない。きつと私には關係のないことなので、娘さんは偶然にもその時なにか思ひ出し笑ひをしたのではなからうか。ともかくも笑つたことは事實である。

(佐藤春夫)

笑つたといふよりは馥郁たる笑ひが唇の近所を素通りしたと言つた方がいゝ。兩の口角にちよつと力が籠つたのだ。それから娘さんは自分の魅力を惜しむやうにその口もとと、頤とをもう一ぺん襟卷のなかへつゝんでしまつた。笑ひはきつとその襟卷のなかで花が咲いたにちがひない。(佐藤春夫)

その夜千代さんは何を思つてゐたのだらう。その顔には實に美しい色があふれるやうで、その瞳は光り輝いてゐた。唇に軽く浮んでゐる艶な微笑は、人の

心を魅するやう、私はこの人が、或は遠い昔の初恋の夢を思ひ浮べて、矜りにその幻を畫いてゐるのであるまいかと思つた。(葉舟)

男は険しい眼で女を見た。然しその口許に蒼い微笑が浮んでゐた。その微笑を受けた女の眼が瞬間的に侮蔑の光りを含んでちりりと動いた。女の心がすつと冷めたく明らかになつた。女はしばらく口を閉ぢてゐた。(田村俊子)

博士は次第に顔の筋肉を引きしめた。そして何だかその顔は今にも泣きさうな表情になつた。その時、ぐゝぐゝといふやうな笑ひが彼の腹から出て來た。それは白痴のやうな笑ひだつた。兩の奥歯で氣味悪いものを噛むやうな口附をして、彼の笑ひは後から後から

とこみ上げてきた。綾子には彼が泣いてゐるのか笑つてゐるのかまた震へてゐるのか分らなかつた。

(豊島與志雄)

佐藤と呼ばれた彼は、木谷の皮肉な語氣を平氣な顔付で受流したが、どういふものか、益々陰鬱な感じになつてゐた。云はゞ穩かな頬の微笑が、陰鬱な額の曇りに包みこまれたやうな風だつた。そしてそこに、撞球場なんか不似合なロシア的な而も瘦腕を變に彎曲したひよろ長い姿で、機械的な笑みを頬の肉に刻んでるのである。(豊島與志雄)

◇悲哀の表情

私は彼女の顔に淋しい微笑が浮んだのを見た。

すると、其の微笑が少しづつ變つて來た。そして顔の表情が固くなつた。やがて彼女の眼が瞬いた。

「あゝ泣くんだな」と私は思つた。

と、眼より先に彼女の鼻の頭が赤くなつて來た。そして彼女は紙を出して涙をかむために下を向いたが、そのまゝ顔を上げなかつた。彼女は噉り泣き初めた。

(廣津和郎)

私は彼女の顔をちらりと見ると、そこには意地の悪い微笑は少しも浮んでゐなかつた。そればかりでなく、如何にも今迄人知れぬ心の苦しさを包んでゐたと云つたやうな、頼りない女性の淋しい哀しげな表情が浮んでゐた。彼女は涙ぐんでさへもゐた。(廣津和郎)

瞼の下から大粒な涙が持上つて、はら／＼と頬から襟に傳はつた。女はそつと欄干にもたれて顔を背向けたまゝ、それを拭はうともしない。男は眼のあたり人間の魂の苦痛を見るやうな氣がして、しばらく物が言へなかつた。(森田草平)

彼女は時々泣聲を立てる。最初に眼が赤くなつて、それから頬が膨れ出して、おしまひにはかすかな涙が頬の上に轉けて来る。何といふ静かな涙だ!

(ロープシン・青野季吉譯)

醫者は細君の傍に立止つて、ズボンのポケットに両手を突込んだまゝ、頭を傾けて、ぢいつと息子を見詰めた。彼の顔は平氣に見えた。たゞ鬚の上の滴に依つて、彼の泣いてゐたことが解つた。(チエエホフ)

前田晁譯)

セレウジヤはまた臂をテエブルの上に突いてぢつと考へに沈んだ。其の蒼白い顔には、一心に聞き入つてゐるのか、さもなければ自分の思想の経過を追つてゐる人の表情があつた。其のぢつと見詰めてゐる大きな目の中には、悲哀と恐れとの表情があつた。

(チエエホフ・前田晁譯)

怒りの表情

彼は上齒を顯はして大きな口を開いて、身を慄はせながら、歎歎くやうに笑つた。鬱勃とした精神は體軀の外部へ滿ち溢れて、額は光り、頬の肉は震へ、憤怒と苦痛とで紅くなつた時は、其粗野な沈鬱な容貌

が平素より一層男らしく見える。(藤村)

伯父は氣分でも悪かつたのか、始めから氣むづかしい苦りきつた顔をして、太い銀の煙管で力強く吐月峯を叩きながら、時々私の顔を睨めつける様に見て居た。まだ四十を越して間もないのに、齒が上下ともすつかり抜けて兩頬が深い穴の様に落ち凹け、皮膚のたるんだ脂肪氣の抜けた黒味がかつた顔に、二つの大きな眼をぎろ／＼させて居る形相は恐ろしかつた。

(加能作次郎)

給仕が頬を膨らまして、何か云ひたいのに何も云へないと云つたやうな表情をして、恨めしさと驚愕とを同時に浮べたやうな眼で彼を見上げて、そして直ぐ下を向いたのを覺えてゐた。(廣津和郎)

雑

園の上にアボオギンが立つた。けれどもそれは部屋を出て行つたアボオギンではなかつた。飽滿の表情もきやしやな優美も消えてしまつて、顔も、姿も、姿勢も、全く恐怖でもなければ、全く身體の苦痛でもない一種のはね返すやうな表情で歪んでゐた。鼻も、唇も、髭も、すべてのものゝ恰好が引きつつて、丁度それらのものがみんなで彼の顔を引き裂かうとしてゐるやうであつた。目は拷問にでも掛けられたやうに變つてゐた。(チエエホフ・前田晁譯)

雑

口元には溢れるばかりの愛嬌があつた。それから眼がいき／＼して、子供の顔を見乍らも始終身の周

りに氣を付けて居る様に敏捷に働いて居た。多くの場合、合人が伏眼になると、眼の表情は殆ど失せるものであるが、彼の女の眼は伏眼になつてもやはり冴えた色を浮べて如何にも魅力に富んでゐた。(谷崎精二)

女は悪い顔の色をして、眉毛ばかり濃いのが目になつて、喉や口尻に荒んだ夜のなごりが、撓んで皺と晩ぢう戀の思ひにやるせなく動いてゐたやうな情味のしたゝりを瞳の底に残してゐて、その色ツぼさがこつくりと潤つてゐた。女は小さな力のない欠伸をしてから、上唇だけで笑つたやうな、倦るゝ、抜けていきさうな表情を見せながらぼんやりと空の模様を眺めてゐた。(田村俊子)

月の光で見た女の顔を二たび朝の光で見た唇も色を失つて、まるで頬の色と變らない、何うやら身體中の血が心臓にあつまつて、そこで凝結して仕舞つたやうにも思はれる。ぐざと短刀で沙刺しても、一滴も血は滾れなからう。(森田草平)

その可愛い、瞳を大きくして、私の顔を見つめてゐる。夢中になつてゐるので、唇のあたりが靜かに眠つてゐる人のやうに、軽く自然のまゝになつてゐて、頬から顎にかけて美しい色をして……私の嬉しいのはこの顔なのだ。(葉舟)

千代さんは例の無頓着な、晴やかな聲をして、私に何をそんなにつまらなさうな顔をして居るのかと聞いたけれど、私は何にも言はずに、たゞ千代さんを

見てゐた。その夜、千代さんは何を思つてゐたのだらう。その顔には實に美しい色があふれるやうで、その瞳は光り輝いてゐた。唇に軽く浮んでゐる艶な微笑は人の心を魅するやう、私はこの人が、或は遠い昔の初恋の夢を思ひ浮べて、矜りにその幻を畫いて居るのではあるまいかと思はれた。(葉舟)

恐らく世の中にこれほど愛らしく、これほど無邪氣につくられた顔はなからうと思はれるやうな顔であつた。眼も小さく、鼻も小さく、殊に唇は人形のやうに小さかつた。そして色が白いので、かうした安らかな寝顔を見ても、少しも人間味といふものが感じられないで、却て名工の手に成つた木彫の面のやうな冷たい感じがする。(長田幹彦)

隅の方の長椅子に深々と腰をかけて、編物を手に持つたまゝ安らかに假寝をしてゐるM子を見出した。僕は今更に親しさを覚えてじつとその寝姿を見守つた。齡に似合はしいだけの華美な浴衣を少しはだけ加減に着て、寝汗にしつとりと潤つた顔をやゝ仰向けで、吸はれる爲めに作らしたやうな赤い唇を少し開いて、軽い呼吸の度毎に小鼻がかすかに動いた。

(有島武郎)

牧者は黙つてゐた。彼はまた空と身のまはりを見て、考へて、目をしばたいた。……確かに彼は自分の言葉に非常に重きを置いてゐて、その備打を増す爲めにわざとまじめ臭つた顔をしてぐづぐづしたのであつた。其の目附は、いかにも年を取つたまじめな

人のやうに鋭くなつて、仰向いた鼻の穴と鞍の形をした窪んだ鼻とは、こすい、さげすむやうな表情を見せた。(チエエホフ・前田晁譯)

動作

◇戀の動作

酒氣を帯びた男の熱い息が、すぐ彼女の頬の上で喘いだ。彼女は、かぶさるやうにして抱いてゐる強い男の腕に、思ひきつてその美しい手を絡みつけ、今まで打ち消してゐた心持を、大膽にひらいてみせた。切なくあふつてゐる胸の動悸が、一層彼女を興奮させ

た。(細田源吉)

女がしがしてゐないから、妙にぎこちないところはあるけれども、それだけ彼の素直ないちらしさに負けた女は、たゞ抱擁されるまゝになつてゐた。その、考へ込んで屈み加減になつた女の、寒いほど露はな、白くとしたうつくしい頸脚に、男はいきなり強く唇を押しあてた。それから二三度つづけざまに息をつかないで繰返した。諄々となんのかんのと云つてゐるのが、もどかしくさへなつた。(細田源吉)

風が樹の上で幽かに鳴つてゐた。然し林の中は静かで、温い日がさし込んでゐた。樹の下の草の上に腰を下して、二人は小聲で讚美歌を唱つてゐた。其内何でもないやうにして彼は彼女の

手をとつて、讚美歌の調子に合せて、自分の膝を打ち始めた。暫くすると、彼女の手を自分の顔にこすりつけた。痒い處でも搔いてゐるやうな様子をして、何度かそれを繰返した。終には彼女の手を自分の頬につけたまゝ、彼は何か考へるやうに首を垂れて、暫く離さなかつた。次第に募る心持と共に、頬に押しつける力も加はつた。

彼女はやはり唱つてゐた。すると、彼はツト彼女の手に自分の唇をつけた。そして彼女がやはり唱つてゐるのを見ると、白いゴムのやうに柔い手の甲に強いキツスを始めた。(坪田譲治)

わざと電氣をひねらないである室の夕暮の薄明のうち、秀子の顔がほんのりと白く浮き出してゐた。

その顔は、眼と唇とで絶えず山田に微笑みかけた。山田はその誘惑を感じる毎に、しきりに手を額にやつて、長い頭髮を撫で上げた。(豊島與志雄)

彼女が振り向いた時、彼の顔の上に獨りでに微笑が浮んだ。彼は静子が何を持つてゐるかを知つてゐた。そして彼の胸の奥からも、今まで自ら意識しなかつた期待の情が、急にはつきり表面に現はれて來た。彼が身を起して彼女の手を執ると、彼女は眼を伏せながら、彼の方に身體をもたしかけた。(豊島與志雄)

彼女の舉動にも、何處となくそは／＼したやうな處があつた。成だけ書齋に引込んで出て來ないやうにして居た。食事の時にも、何か言はれはしないかといふ不安が、絶えずその態度を曖昧にした。物を書い

たり書を読んだりするやうな様子もなく、机の邊には書きかけて丸めた半切の反古や、むだ書をした紙などが一面に散らばつて居た。だらしなく机に凭りかゝつて、亂れた髪を後に見せて、ぐツと物を考へて居ることもあつた。(花袋)

互に心を合せぬやうな努力が常に彼等の間に働いて居た。黙つて顔を見合せて居る時間を二人は成たけ避けるやうにした。それは猜疑と不安との時間であつた。觸れ合ふ眼と眼とは、互に其心の底を讀まうとして居た。然し幾ら打割つて見せても、まだ觸れ得ない心が底に残つて居た。(花袋)

二人は黙つた。彼は彼女を見た。彼女の目の中には、何かやさしい、弱々しいものがあつた。と不意

に彼女は、彼を自分の方へ引き寄せようとでもするやうに両方の腕を舉げた。彼は彼女が呼んだものと思つて、彼女の上に屈んだ。と二人の唇はくつ付いた。

(キウバツサン・前田晁譯)

私は私の首の骨の折れる音を聞いた、私は私の唇のふちに私の齒ではない齒を見出した、私は日向よりももつと熱い暑さを感じた、呼吸することは全然不可能な事であつた、私の眼の近くで一つ目が光つてじつと私を見つめ、私を痛め、さうして消えるのを私は見た。(モオラン・堀口大學譯)

彼女は手をサアシヤの肩に置いて頭を其のちよつきに押しつけた。大膽なサアシヤは微笑して、何かとりとまりもないことを呟いた。そして惚れ込んだ男

の不器用な恰好で、両手をジイノチカの顔にかけた。と其の時、諸君どうだ！……今しも其の後に太陽が沈まうとしてゐた小山も、二本の柳の木も、緑の岸も、空も——すべてのものが池に影を映してゐた。しいんとしてゐた……諸君はそれを想像することが出来るだらう！ 昔の上には長い鬚を持つた無数の金色の蝶が飛んでゐた。花園の向うには羊飼が羊の群を追つてゐた！ それは實に畫だつた！(チエエホフ・前田晁譯)

青年はレベツカの後から幾つかの部屋を通つた乳場へ行つた。彼女は乳場は自慢であつたけれど、附いて來られることは内心好まなかつた。けれども男がいかに面白さうに笑つたり常談を言つたりするので思はず一緒に笑つた。

彼女は上の棚にある乳の鉢を選んで、それを取らうと腕を伸ばした。

「駄目、駄目、レベツカさん、あなたには高過ぎますよ！」とマックスは叫んだ。「僕が取つて上げませう。」さう言つた時に、彼は手を彼女の手の上に置いた。レベツカはあわてゝ手を引込めた。彼女は自分の顔が眞赤になつたのを知つた。そして殆ど泣き出さねばならぬやうに思つた。(ケラン・前田晁譯)

彼女は俯向いたまゝで踵を彼に渡した。すると彼は彼女の腰のまはりを抱いて自分にびつたりを押し付けた。彼女は逆らはなかつた。唯だ目を閉ぢて重く息をした。その時、彼女は彼がキスするのを、幾度も幾度も、目にも、口にも、きれぎれな言葉で彼女の名

前を呼んではまたキスするのを感じた。

(ケラン・前田晁譯)

ニーナは世間並の接吻を好まなかつた。時々彼女は私の膝に腰をかけて、私の頸をかき抱いて言った――

『眼をおつむりなさいな。』

私は閉ぢた。そして直ぐ自分の臉に彼女の熱い唇の接觸を感じた。

そしてから彼女はしなやかに身を延して、半ば囁聲で言った――

『ねえ、睫毛が唇の下で顫へるつて全く新しい感じのするものね。是はジョージが教へてくれたのよ。』

(ラザレーフスキイ・白葉譯)

◇男の動作

『あなた。』

しばらくしてお住はいつた。

『……………』

無言で廣吉は、ボンヤリ、氣のない眼をその方へ向けた。

『行つてらつしやい。』お住は言葉を繼いで『行つてらしたはうがいゝわ』

でも、廣吉は、何とも、なほ、返事をしなかつた。

お住のはうに向けた眼を、すぐに、また、疊のうへに落した。――居住ひを直し、手を伸ばして、膝の近くに散亂つた新聞をとり上げた。

『はじまつた』

お住はさう思つた。――デツと、その、どうでもいい、どうでもなれといつたやうな仕草をするのをみまもつた。(久保田萬太郎)

彼はフラ／＼と魂の脱けた人間のやうに立ちあがつて、一旦疊んだ夜具を再び擴げた。そうして窓の方へ背を向けて、さも疲れたやうに眼を閉ぢた――やがて彼は暑苦しそりに長い吐息をして、上に掛つて居る夜具を押しつけた。それから靜かに寝返りをして、再び窓の方へ眼ざしを向けた。(藤森成吉)

沈黙が續いた。キリイロフは背をアボオギンに向けたまゝで、暫くの間ぢつと立つてゐたが、やがて靜々と應接間から廣間の方へ這入つて行つた。其の覺

◇女の動作

(チエエホフ・前田晁譯)

束なげな、機械的な足取りと、火の點いてないランプの笠を眞直ぐにしたり、テーブルの上に置いてある厚い書物を覗き込んだりしたやうな氣の付きかたで判斷すると――此の瞬間には、彼は何の意向も、何の望みも、何の考へも持つてゐなかつた。

彼女は私をもてなす爲に特に意を用ゐたといはんばかりに、薄物か何かを着込み、髪も結立ての銀杏返して、肌理の粗らさうな顔にこつてり厚化粧を施して居た。それが如何にも態とらしく、彼女の人柄には不似合で、私には却つて下品に安つぽく見えた。殊に

その大きな口をあけて態とらしく愛嬌笑ひをする時などさうだった。處女らしい羞恥の感などがなくなつてしまつて、異性をひきつけるべく意識的に媚態を装つて居る風があつた。そして男の間に交つても平気で話をしたり戯談を言つたりすることの出来るのを寧ろ誇りとして居るらしく、それが彼女の價値を高めてもするやうに思つて居る如くさへ見えた。(加能作次郎)

彼女が瘦せぎすの脊の高い慾深な眼付をした女だった。眼上のものに對しては猫のやうに柔順で阿諛的であるが、眼下のものに對しては虎のやうに傲慢で、自己の優越を誇らうとするやうな性質の女だった。彼女は自分の家が村でも相當な財産家であり、少くとも私の家よりも富んで居るといふことを以て、誇りとな

し、あらゆる場合にそれを諷示することを忘れまいとしてゐるらしかつた。私の妹を、息子の嫁にしてゐるのを、私達一家のものに對して、何か大きな恩恵でも施して居るかのやうな態度を常に示さうとしてゐた。

「そりやまつたく親切な男だよ、青ぶくれの男はちよつと淫らな表情をして女の顔をのぞきこんだ。」「親切な男ツ？……」女は皮肉な笑ひ方をして男の顔を見た。「男の親切にはもうあいた」女は吐き出すやうにいつた。そして煙管と煙草いれを男の膝の上へ投げて、舌を打つ雨の音を聴くやうにちいつと眼をつむつてゐたが、舌を上げてそうつと空を見た。時雨雲一つへだて、月が照つて居るので、動いて行く時雨雲の影

(加能作次郎)

が見られるほどの薄暗さであつた。(吉田絃二郎)

病室では凡てが靜かに動いてゐた。そしてその靜かな動作や言葉のうちに病人の軽い氣息が纏はつてゐた。然しともすると看護婦の直線的な動作が、物馴れた無遠慮なやり方が、その零圍氣を亂し勝ちであつた。それがいつも壯助を不快ならしめた。然し病人の手當のうちには彼の覗き得ない別の世界があつた。彼は手を拱いてたゞ傍から見てゐるより外はなかつた。

(豊島與志雄)

猶太らしい顔付の蓮葉女は、殆んどからつぼの杯をあげて、此方の健康を祝すためだといふおもはせぶりをして飲んだ。それに應じて、此方も同時に杯を口に觸れた。猶太の女は、何處かに初心らしいとこ

ろの残つてゐる同伴の小造の女の肩を叩いて、さもをかしさうに笑つたが、直に手をあげて、おいでおいでをして見せた。(水上瀧太郎)

エルナは青い眼と重そうに編んだ髪を有つてゐる。彼女は私にすがり着いて哀願した。

「ちつとはわたしを愛して？」

五六個月前には、彼女は女王のやうに身を委せて、私からは何物も求めず、何の望みも持つてゐなかつた。今は、乞食のやうに私に愛を希ひ求める。私は雪で蔽はれた廣庭を窓越しに眺めながら彼女に言つた。

「眞つ白な雪だねえ」

彼女は首垂れて返事をしなかつた。

(ローブシンと青野季吉譯)

宿へかへると室へ入つてイザベルはお酒を注文した、さうして半分ほどのむともうよしてしまふのであつた、さうするとかの女の兩眼には涙が浮んで来た、何かかう今のお酒がある不思議な堰を開けてでもしたかのやうに。さうしてかの女はまた飲みつゞけるのである。かの女は散歩服のまゝで毛氈の上に坐るのである、お行儀よく兩脚を自分の身體の下へをりまげて瘦せたかの女の膝の干からびた關節が折れるやうな音を立てるのである。かうしてかの女はなまけもの、猫のやうな恰好をして煙草をのんでゐるのである。なすこともなく、皮肉な表情をして、肉感的に何時間もそこに坐つてゐるのである。(モオラン・堀口大學譯)

◇雑

男が、首を曲げてそつと接吻けやうとした、浪江は氣弱く笑つた、軽くそれを拒んだ。まあ、冗談をなさるもんぢやないわ、と言ふやうに。
男は立ち上つた。
「さあ、もう少し外を歩ませう。」
と快活に言つた。
二人はまた、狭い露路を往つたり來たりした。月もなく、星もなく、二人は、お互の浴衣のほの白くでやつと道連れを見た。
その眞暗さの中で、浪江はほうと一つ呼吸をした。何か、言ひたいこと、したいことが一杯あつた。酷く

心が燥いできた。何も見えないといふのは、何といふ好いことであらう——

遠くで、停車場に止まらないで行く汽車の汽笛がなつた。

男は立留つて浪江を抱いた。

浪江は、鬼ごつこで捕まつた子供のやうに、大げさに身悶えして見せ乍ら、

「可厭、可厭」

と叫んだ。「そんなことをなされると、また汽笛が笑つてよ。」

と、不仕合せにも、態と合圖したやうに汽笛が鳴つた。男は手を離した。

もう一度初めることはできなかつた。二人は、倦き

あきしたやうに、道ばたの草の上にしやがんだ。

(宇野千代)

二人は他の何人よりも一層早く踊つた、彼等はただ一つに見えたほどにくつつき合つて、そして何か目に見えないからくりが、二人の足の下に隠れてゐて、二人を廻轉させでもしたやうに、まつすぐな身體と殆んど動かない脚とで、ぐるぐるとまはりまはつたり、飛んで行つたり、くるりと向き返つたりした。

(モウパッサン・前田晁譯)

シユウベルトのミリタアル・マアチの曲に合せ、二人の猶太人が舞臺の上で踊つてゐた、神經質に、哀れつぽく、私たちの秋波にも、思はせぶりに吹く煙草の煙にも、剃り立の青い頭をした男たちが、かの女

たちを吸ひ込むやうにしてしきりに傾けてゐる杯の光りにも、全く気がつかぬ様子で。(モオラン・堀口大學譯)

心理

◇戀の心理

客はズボンの隠しを探つて、じやらじやら銀の音をさせながら、依然とうす笑ひを浮べた眼に、暫くは金花の立ち姿を好ましうに眺めてゐた。が、その眼の中のうす笑ひが、熱のあるやうな光に變つたと思ふと、いきなり椅子から飛び上つて、酒の匂のする背廣の腕に、力一ばい金花を抱きすくめた。金花はまる

で喪心したやうに、翡翠の耳環の下がつた頭をぐつたりと後へ仰向けた儘、しかし蒼白い頬の底には、鮮な血の色を仄めかせて、鼻の先に迫つた彼の顔へ、恍惚としたうす眼を注いでゐた。この不思議な外國人に、彼女の體を自由にさせるか、それとも病を移さない爲に、彼の接吻を刎ねつけるか、そんな思慮をめぐらす餘裕は、勿論何處にも見當らなかつた。金花は髻だらけな客の口に、彼女の口を任せながら、唯燃えるやうな戀愛の歡喜が、始めて知つた戀愛の歡喜が、激しく彼女の胸もとへ、突き上げて來るのを知るばかりであつた。(芥川龍之介)

歡樂の満足と欲求の満足とは、男に取つてまだ十分な満足ではなかつた。其處に猶ほ何か深いまこと

の意味が要求された。眼、眉、肌、それに其身の總てが占領されて了つた時の心は、暗くもあり、重苦しくもあり、佻しくもあつた。世界がまるで別の世界のやうにも見えた。それに引かへて女は心も體もすべて男にまかせ切つた時に於てのみ唯幸福であるといふやうに見えた。其時に於ける女の笑ひ——その笑ひを男は時々思ひ出した。それは黄いやうな感じのする笑ひであつた。その笑ひの底には、恐ろしい影がひそんで居た。他界から微かにさして來たやうな影がひそんでゐた。それは死に近い影であつた。(花袋)

私の家に假且の一夜を過したのが、何かの縁の端とならないものでもなく、それから何か華やかな、薔薇が撒かれるやうな路が、行く手に開けないもので

もないと言ふやうな、漠然たる思ひが、胸の底に漂つてゐた。(久米正雄)

大きく束ねた髪を重さうにして、細い瘦せた頸筋を傾けながら、何かに視線を定めてゐる彼女の姿は、彼の眼にもいとほしく感じられはしたが、ちつと自分の方に眼を向けて、彼女が白い齒で微笑む時、彼は自分の胸の底までも讀み取られたかのやうな不安と恐れとを自ら禁ずることが出来なかつた。(豊島與志雄)

漠然と一種の不安を感じた俊子の襟筋から洩れる蠱惑的な香りが彼の心を捕へた。彼は未だ嘗て俊子の凡てをかくも自分の近くに感じたことはなかつた。今まで遠くにぼんやり眺めてゐたものが、急に自分の側に近く優しく現出したのである。併し何かの眼に見

えぬ糸が、自分の凡てを擲めようとしてゐる。彼はその奇蹟に似た感じから脱しようと思つればあせるほど益々身の自由を失ふやうな気がした。(豊島與志雄)

男は珍らしいものを見るやうに人知れず女を注視した。向ふでは気が付かないやうに、女の顔を長く諦視して居ると、ちよつと説明の出来ないやうな情緒の洶湧するのを感じた。印象が複雑にこんぐらかつて居て、丁度蒸氣を出して煮えたぎつて居る液體か、或は又、揺ぐ温泉の水鏡に映る物の影のやうに、どうしても其静止した本態が分らないのであつた。

(木下李太郎)

保子は、自分でも、はげしい胸の鼓動を、どうかしてとり鎮めようとしてみたが、まるで自分とは別

のものゝやうに手に負へなかつた。井口に向うの部屋へ行つて貰つたにもかゝはらず、やつぱり傍にゐてもらつた方がいゝやうな気がして來た。彼女は、自分ながら自分の矛盾した心持を見た。傍にゐれば、突きのめしたい気がしながら、ゐないとなると、急に傍へ引き寄せたくなつた。いひたいことを存分にいつて、先刻よりも、もつともつと強い愛撫の言葉を、男の口から聞きたくなつた。(細田源吉)

強い、張りきつた興奮状態が、暗い部屋でしばらくつゞいた。酔つてゐても、井口は枕許に坐つて、やさしく女を舐めながら、先刻からの同じ言葉を、いくども繰返していつた。小暗い中で、彼女は苦しく蒼褪めた顔に一層惱ましいほど美しい嬌笑を見せた。

この上もない侮辱だと思ひ込んだことが、いふまでもなく、さうしすにゐられなかつた男の、心からの愛撫だつたといふことを、彼女は素直に受け容れるやうになつた。(細田源吉)

彼が戀してゐるといふ事實については、彼はもう一點も疑はなかつた。徴候がみんな其處にあつた。彼は戀に、正真正銘なまことの戀に落ちたことを知つた。そして彼はこの知識で仕合せであつた。さうだ、従兄弟のハンスはいかにも仕合せだつたので、他の時なら自分の權利を主張せずにはゐなかつた彼が——雑沓してゐる町を、自分の前にある物にぢつと目を据えながら急いで行く人には是非起らずにはゐないやうな——あらゆる推し合ひへし合ひや、無法な小言や、そ

の他いろんな不愉快なことなどを、静かな、嬉しさうな微笑で受けた。(ケラン・前田晁譯)

そしてあの、晴々とした顔付と沈んだ心を持つて、世の中を渡つて行かうとしてゐる人は！ 二度とまた彼に逢ふだらうか？ 若しまた彼に逢はねばならぬとしたら、何處に彼女は身を匿さう？ 彼は彼女のすべての疑惑と苦痛とから離すことの出来ない部分であつた。併し彼女は彼を憎まうとも怨まうとも思はなかつた。彼女の苦しんだすべてのことが彼女を一層密接に彼に結び付けた。彼は決して彼女の考へから去らなかつた。(ケラン・前田晁譯)

彼女は父親の大きな悲みを知つてゐた。彼がかなる幸福を享けて、さうして失つたかを知つてゐた。

彼女が冬の夜の間に、聲高く讀んだ書物の中の戀人の様々な運命を、極めて暖かな同情を以て追つて行つた。彼女の心は、極めて高い喜びを持つても來れば、また極めて深い悲みを招きもする戀といふものを理解した。けれども不仕合せな戀の悲みを別にして、彼女は他の何物かの——理解することの出來ない恐ろしい何物かの閃きを捉へた。暗い形が時々戀の樂園を迂り出して、恥かしい、卑しいものとなつて目に着いた。戀といふ神聖な名は、極めて恐ろしい恥と極めて深い不幸とに繋がれてゐた。彼女が知つてゐる人々の間には、彼女が夢にも思つたことのないやうな事が絶えず起つた。そして、厳しい、併し慎重な言葉で、父親がふと道德の腐敗といふことについて話すやうなことの

あつた時は、彼女はそれから數時間の間、父親の目に出會ふことを恐れて避けるやうにした。

(ケラン・前田晁譯)

私は磊落な横柄な外見をよそほつて、そのかけにかくれて人知れず私の心の奥の破れた戀の悲みを痛んでゐた。私はイザベルの側近くに生きて遠くにゐて人を忍ぶ時のやうにかの女を完全に愛してやり度いと思つてゐたのであつた。それなのに日が暮れて夜になると私はその朝どろかして嫌ひになるやうにと自分に云ひきかせた、かの女の不用心と、かの女の不透明な魂と、かの女の透明な着物と、容易く下品にかの女が人に身を任せることを、またしても私が愛してゐるのを見て驚くのであつた。(モオラン・堀口大學譯)

——妾も彼を愛してゐます。彼は巧みに歡樂の最中に唇をもれる下品な言葉を使ふのです。妾たち二人は、磁石と鐵のやうにいきなり戀仲になつてしまつたのでした。さう云つたらあなたは妾を蔑視なさるかも知れませんが、彼の黒い大きな手を額に當てる時妾の頭痛は消えるやうに治つてしまふのです。母は妾を御し難い娘だと云ふのですけれども、妾はあべこべに至極御し易い女なのです！ 他人の人々にとつて轉地がきゝめがあるやうに戀人を換へることが妾には大さうきゝめがあるのです。(モオラン・堀口大學譯)

の人を慕つてゐたので、相手の男の名前などはたづねようともしなかつたのです。丁度まる一月の間でした。いつもある山の上で二人はお陽様を、海から上る時にも一緒に迎へ、崖の彼方へ没む時にも一緒に送りました。さうしてまる一月の間と言ふもの二人は此上もなく幸福でした。一月の間ですよ……それがね、長い生涯の中でたつた一月きりだつたんですよ」と彼女は愁はしげに何の飾り氣もなく附足した。「その後で二人はもう別れなければなりません。若い人は、自分が長老の息子であることを白狀して、もう立たねばならぬのだと打明けました。そして其の人は行つて了ひました。二人が別れようとした一番最後の時でした、其の娘は其の人に「どうぞ仕合せでゐて下さいませ

し。」「つて言ひました「仕合せでゐて下さいまし」つてね、全く其の娘は、別段そねむ気もなければ悪気もなく言つたんですの、それから尙「私の事はね、もう是きりでお忘れ下さいまし。けれどもねえ、あなたがずっと長生きをなすつて、其の最後の時、死の時が来た時丈けに、昔ドジュリーヤと言ふ女がゐて、自分を戀した事があつたと思出して下さいまし。そしたらきつと思残す事なくお死にする事が出来るだらうと思ひますから」……」(テレシヨフ・白葉譯)

◇悲哀の心理

この時、二人の頭の上を、ギヤア、ギヤア、と鳴いて、白鳥の群が棹のやうに列をなして、北の方へ

飛んで行くのが見えました。
正一は、黙つて、それを見てゐるうちに、昨日、壊してしまつた、母の土産に買つて来て呉れた鶴の置物のことを思ひ出しました。その珍らしい品物も、すでに過去の存在になつた事を思ふとしみじみと自分の樂しみなさが感じられて、もう二たび自分の手には戻つて来ない鶴の幻影を消えて行く白鳥の姿を見送りながら、眼に描いたのでした。

「濱猫だね……あれは、鶴ではないね」
忠吉は、何を感じてか、両方の眼を涙ぐんで、かう

正一にいつたのでした。(未明)

私は聲も揚げ得ず、齒を喰ひしはつて、息を飲んだ。私は誰か来て庇つて呉れるか、伯父がもつと優

しい顔をして居たかすると、どんなに大聲に泣き叫んだかもしれなかつた。けれども泣けば尙ほ酷く打擲されるだらうことを知つて居たので、堪へ忍んだ。ぼろツ／＼と玉の様な涙が唐筵の上に音をたて、落ちた。私は何の爲に叩かれたのか理由が分らなかつた。只おど／＼しながらしかし逃げることもせず、更に第二の打擲の来るのを警戒して居た。此時若し私が大聲に泣き叫んで逃出して行きでもしたなら、それが子供らしく可愛氣があつて、伯父の怒を和けたであらうが、しかし私には逃出すだけの勇氣がなかつた。無邪氣さがなかつた。此の場合逃るのは悪いといふ小賢しい智慧が働いて居た。私は尙ほ頭を抱へたまゝ其處に立ちすくんで居た。(加能作次郎)

同じ言葉でも、父の口を透して言はれるのと、繼母の口を透して言はれるのと、その味なり氣分なりに、斯くも著しい羞の生ずるのは誠に悲しい事實であつた。私の繼母は實際善良な人である。私に對しては全く眞實の母のやうに親切にして呉れてゐる。それには私の父自身が深く感謝してゐる位である。私もまた心から母を尊敬し感謝し、また愛さうとしてゐる。けれどもそこに見えざる或も力が働いてゐるのを如何したものだらう。私は血といふものゝ不思議さを思はずにゐられなかつた。(加能作次郎)

怪しげな絶望の影は、やがて彼女の胸一杯掩ひかぶさつて來た。餘りに深い悲みは、彼女から理性といふものを根こそぎに奪つてしまつたので、もう何を

考へる力もなくなつてしまつた。唯この廣い天地の間に自分ひとりか置き去りにされたやうな気がして、涙ばかり留めどもなく流れ落ちて来た。(長田幹彦)

私は泣出したいやうな氣持で歩いて行きました。自分ほど不幸なものはないといふ情なさ、背中央まで沁み通つて来る雨の不快な感じにつれて、心ちゆう、といふより身體ぢゆう一杯に擴がつて來ました。(廣津和郎)

彼は卒然として起つた哀愁に身を委ねた。涙の眼を上げると、明るい光線が空の遠くにちらちらと光つてゐた。立ち並んだ屋根の上にはほんのりとした温みがあつた。彼はそれを頼りないものに見た。

(豊島與志雄)

アマブル爺さんは畑の中の細い路を歩いてゐた。彼は若い小麦や若い燕麥やを眺めながら、自分の息子は、あの哀れな息子は、今は土の下にゐるのだと考へた。彼はいつもの歩調で、跛を引き引き後ろに脚を引きすりながら、歩いて行つた。そして野原に自分一人になると、青空の下に、生長してゐる作物の中に自分一人になると、其の輕快な歌は聞かずに、頭の上を高く飛んでゐるのを見た雲雀の外は自分一人になると、彼は道を進みながら泣き始めた。

(モウバツサン・前田晃譯)

初めのうち子供はかあちやんが死んだといふので悲しんで見やうとした。子供は彼女を抱いてゐたズイレ小母さんから離れて、自分の小さい椅子に寄りか

かり、いろんな慰めの言葉などには耳も藉さずに、たつた一人で、皆の涙を合はしたよりもつと餘計に泣いて見た。

子供は兩手を膝におき、見向きもせず、只壁を眺めてゐた。そして、學者が自然の現象を見極めるとでもいつたやうな素振り、何か邪魔でもされることを恐れるやうに身動きもせず、壁をまじまじと見つめながらさめざめと泣くのだった。

(フイリップ・小牧近江譯)

◇惱みの心理

くどく心持をうちあけながら、傍へすり寄つて來て、肩などへ手をかけたりした男の仕打が、商賣

女かなんかにでもするやうに思へて、除いてもらつた後で、少しいひ過ぎたやうな氣がして、つい愛想をしたのがわるかつたのだと、保子はおもひ返した。あれから男が以前の座へ返つてお酒を快くすゝめるので、だん／＼酔ひが廻つて來て、胸苦しくなつた。少し身體を崩して、俯伏してゐようとしたら、丁度傍にゐてお酌をしてゐた女中さんが、隣の部屋の方で、ちよつとお休みになつてはといつた。このまゝでゐると斷つても、井口と二人してすゝめるものだから、二三十分と思つて、ついこの部屋の方へ入つたのがわるかつたのだ。女中さんは、それから井口のお相手をしてゐてくれたらしいのに、少しうとうとしかけたら、ふと自分の傍に井口が來てゐて、隔ての襖は暗くきつしりと

締めてあつた……。

そんなことまで思つて来ると、心の中が切なくなつた。今日、出がけに入浴した身體が、それこそ、透きとほるほど爽快感が快かつたのに、今はまるで違つたものになつてしまつたことを、彼女は思ひ浮べた。顚頭や、身體中が、血にあふられてゐるやうで、吐いても吐ききれないやうな苦しい吐息が出た。(細田源吉)

ほんとにもう何も無いやうに片づいてしまつた。一體、あれだけ幸福だつたことが、これつきりでお終ひなのだらうか。保子は妙な空虚を感じた。自分を抱いてくれたあの力強い双の手が、今はどこに探し出しようもないと思ふと、變に恐ろしくさへなつた。長い間自分と何もかも一しよに生活して来た人が、こ

れから何年経つても自分の傍に見出せないのだ。これは何といふ事實だらう。彼女は、前のやうに泣き悲しむ代りに、ちつと、これから見限りのない月日につづいて来る怖ろしい空虚を見つめずにはゐられなかつた。(細田源吉)

放縦な血を盛つた重いこの女の身體が、この先き何十年と云ふ長い間を自分の脆弱な腕の先きに纏繞つて暮らすのかと思ふと、男はたまらなかつた。結婚してからの一年近くのたどぐし生活の中を、女の眞實をもつた優しい言葉に彩られた事は一度もなかつたと思つた。振返つて見ると、その貧しい生活の中心には、いつもみだらな血で刻印をした女のだらけた笑ひ顔ばかりが色を鮮明にしてゐた。さうして柔かい肉

をもつた女の身體がいつも自分の眼の前に或る匂ひを含んでのそくしてゐた。(田村俊子)

爽やかな朝風が、さつと身體に私をからかつて、やんちゃに笑ひながら、態笹の茂みを谷の方へと轉がつて行く。

ひろびろとした丘の上だ。光と風とが思ふさま飛び廻り、駆け廻つてゐる丘の上だ。私は立ち止つて、ちつと眼をつぶる。と、思ひがけなく私の明るい心の片隅へ、ポツリと小さな汚點が落ち込む。見る間にそれが全身に擴がつて、私といふ人間が見るに堪えない一塊の汚點と化して了ふ。(川合仁)

翌朝眼を開くと、私は口をあんど開いて仰向に臥て居た。一晩の間閉め切つた四疊半の空氣ランプ

の油煙や人蒸氣で息がつまるやうに熱苦しい。寢床の上の硝子窓から朝日が毒々しく照つて、瞳がくらくする。私の頭の中は瓶のやうに空虚になつて居て、石ころが二つ三つ入れてあるらしく、それが頸を振る度に毎に中で彼方此方へゴロゴロと轉がり廻つた。(谷崎潤一郎)

「戀つてことを疑ふのはお止し、」と男は力強い調子で少女の言葉を遮つた。そして熱心の籠つた流暢な辯で、一體戀つてものは、お互ひの弱點を忍び合ふことを我々に教へて、それで人道を高めて行くものであることや、又下らぬ些細な不和はいくらあらうとも美しくい紐が我々を結びつけてあつて、それで、世にまたと無い仕合せを我々に受けさせるものであること

やを、事こまかに諄々と説いた。
 が、少女は唯だ耳を貸してゐたばかりだ。目は凋落して行く庭園の上に放たれて、胸には深く、枯れて行く草木の重苦しい大氣を吸ひ込んだ。——そして、心の浮き立つ春の頃や、希望や、又、今は秋の花のやうに萎れつゝある戀の、まだ十分に力の充ち満ちた時分のことをやを、それからそれへと思ひつゞけた。
 『枯葉だわ、』と靜かに少女は呟いて立ち上ると、足で、風が心を籠めて吹き寄せて置いた美しい落葉をすつかりかき散らした。(ケラン・前田晁譯)

不安の心理

此處から小さな丘のうねりを越えて古い椎の並

木の間に彼の住んでゐる家の屋根が見える。窓のあたりには白い翳がくつきりと樹の間がくれにうかんでゐるのは、月の光が窓ガラスにうつつてゐるせいであらうか。それとも彼のゐないのに氣のついた妻が慌てて電燈をつけたためであらうか。玄作の頭には蒲團の上に悄然として坐つてゐる妻のうしろ姿が見えるやうな氣がする。それは彼の心にさまざまな記憶を運んでくる。彼はあの森にかこまれた小さい家の中に自分を不幸にするため暮してきたのだ。何故なら、彼は何よりも自分を幸福にしなければならなかつたから。そして今は——今はどうだ。彼の「現實」は死滅してしまつてゐるではないか。いや、現實だけではない。妻は彼の空想を知つてゐる。空想の方向を知つてゐる。しかし急に

彼はある一つのおそれのためにうしろをふりむいた。そこに彼は彼の妻でない一人の女が蒼ざめた顔をして立つてゐるやうな氣がしたからだ。(尾崎士郎)
 若い身空中で居乍ら、私はもう自分の生活に疲れ居る、どんなに努力しても、自分の現在を振り返つて見ると、私はなんにも獲ては居ない、それどころか、私は始終自分の物を何か失ひつゞけて居るやうな氣ばかりして居る。さうして、いつまで行つても私の努力の盡きていゝ時は來さうに無い。先きの方にモウ何の空想も描かなくなつた私、振り向いて見ると、たゞ現在を何もせず休んで居たいと、そればかりをいつもひたすらに望み考へて居る私、——その私の生命も、一體いつまで續いて行くといふのだらう？(藤森成吉)

彼は目的を達したといふ喜びも、盗みをしたといふ恐怖も感じなかつた。初めの意圖も行爲の結果もはつきり意識しなかつた。たゞ或る未知の世界にふみ込んだやうな漠然とした懸念にのみ囚へられた。そして頭りに自分の前後左右が氣味悪く感ぜられた。そして頭をぢつと脊骨の上に据ゑながら、ゆる／＼と歩き出した。(豊島與志雄)

怪しい誘惑がいつしか壯助の心に蜘蛛の糸のやうに絡みついて來た。机に向つてゐてもふと氣をゆるめると、彼の耳はぢつと階下の物音に澄されてゐた。そして彼の眼の前には老婆の赤黴い顔が浮んだ。彼女は障子の側の火鉢によりかゝるやうにして坐つたまゝあたりをぢろ／＼見廻してゐる。その丁度膝に當る疊

の下に、夜彼女の枕が置かれる所に、古ぼけた鬱金木綿の袋があつて、その中に銀行の通帳とまた新しい紙幣とがはいつてゐる。……ちつと空間を見つめてゐる

壯助の眼は熱くほてつてきた。(豊島與志雄)

家の門をくぐると、博士の淋しい興奮は急にぼんやりした倦怠と荒廢とのうちに消えてしまつた。そして彼は身體の心に大きい疲労を覺えた。

いつものやうに二階からは淋しい光りが洩れてゐる。茶の間の火影が植込の間にちらちらと見えてゐる。そして庭の木立の上に月の無い夜の空と星とが懸つてゐる。

「俺の屋敷は退屈に疲れてゐる。さうだ俺の心が疲れてゐるやうに。」

彼は大きく右手をうち振つて、そして頭を二三度軽く横に動かした。(豊島與志雄)

その時ふと何か暗い影が彼の心を過ぎた。梯子

段の上に電燈がぼんやりついてゐた。階段の一つ／＼が妙に薄暗かつた。頭の上に中途までつき出た壁がちつと何かを待つてゐるやうだつた。そこらに盲た影が立ち罩めてそれが彼の心に迫つて来る。(豊島與志雄)

博士はちつと久子の姿を眺めた。昔のまゝの

艶々しい髪の毛や、柔い頬の曲線や、綺麗な指先や、それらが今の氣持にそぐはない妙な淋しさを彼に與へた。そして思はず左手の先で額の髪の毛をなで上げた時、彼の頬の筋肉は或る痙攣的な震へを帯びた。

「家は人數のわりに屋敷が廣すぎるやうだね。」と博士

は云つてみた。

「え」と云つて久子は顔を上げた。

「も少し狭い屋敷の方が住み心地がよさうに思はないか。」

「それもさうですけど、……若い者が居るとこれも賑かなんですがね。」

「さうかも知れない。俺も年取つたからな。然しお前なんかまだ若いぢやないか。」

久子は黙つてたゞ口元に微笑を浮べたが、それもすぐに消えてしまつた。

心苦しい沈黙が続いた。さういふ時二人の心には徒らに生きてゐるまゝの二つの生命が映じてゐた。

(豊島與志雄)

彼は妙にぼんやりしてゐた。頭の中に何かと動きを止めたやうな氣持であつた。明るい大通りを通つたり、うす暗い横町を通つたりした。そして小母さんの顔に沸き立つた鐵瓶をぶつつけたこと、金さんが恐ろしい聲をして立ち上つたこと、を、きれ／＼に思ひ出した。そして妙に心が何物かに脅かされてたゞむやみに歩くのを餘儀なくされた。(豊島與志雄)

彼は少しでも土地の低い方へ低い方へと歩いて行つた。丁度低きにつく水の流るゝやうなものであつた。彼はたゞ低い方へ流れていつた。そして街路を通る人達は皆彼と反對の方向へ行く者のやうに彼には思へた。雨の中を、傘をさして通る人々の冷たい無關心な限附の中を、そしてちら／＼光る軒燈の中を、彼は

一人歩いてゐた。(豊島與志雄)

私は沈黙のうちに漸々と私の心に働きかけてくる或不可解な力を覚えて来た。その心の戦きは、いつか筋肉の間にまで移つて、私はいくら抑へようとしても、五體の底から湧きあがつて来る戦慄を抑へることが出来なかつた。(長田幹彦)

恰も空中に爪を現はして輪なりに舞つて居る鷲かなどのやうに、彼女の上には常に不安と心配とが、不信の叫びと漠然とした凶々しい前兆とを以て、追つて来るが如くに思はれてならなかつたのであつた。彼女は窓の近くに腰をかどめて、蹲りながら、血ばしつた眼を、輝く曙の方に向けて、長い間、真心の籠つた祈禱をさしげた。そして、どんな運命でも来るなら来

いと云ふ強い意志を固めてたちあがつた。

(レイモント・朝島譯)

彼は一寸笑ひたいやうな気がしたが、それと同時に痛い程胸を押しつけるものがあつた。何處か深い水底に、下の方に、彼の足許に、凡ての過去の偉が、以前の思想が、以前の問題が、以前の題目と以前の印象とが、眼前の全光景が、彼自身が、そしてあらゆる一切の物が、見えつ隠れつしてゐるやうに思はれた。彼は何だか自分が何處か高い處へ飛び去つて、一切の物がその眼界から消えて了つたやうな氣もした……そしてわれにもなく手をひと振動かしたはずみに、ふと拳の中に握りつめてゐた二十カペイカに氣がついた。彼は手を開いて、ちつと銀貨を見詰めてゐたが、

又手をひと振りして、それを水の中へ投げ込んだ。それから、踵を轉じて家路に向つた。彼には、此瞬間に、剃刀か何かで自分といふものを、一切の人、一切の物から、ぶつりと切り放したやうな氣がした。

(ドストエーフスキイ・白葉譯)

◇喜びの心理

私はその瞬間、全く豫期しなかつた、自分にも不思議に思はれる位、何とも言はれぬ嬉しい懐しい感情で胸が一ぱいになつた。それはどうしたわけであつたかは知らない、——まだ何もお互に話さないうちにたゞ一寸對ひ合つて坐つたばかりなのに。けれどもそれは極めて自然な情の流れであつた。私はこれまで、

誰からもこれほど深い情愛を味はされたことがなかつた。私が生れ落ちるとから今まで、無意識のうちに求めわび、憧れわびて居たであらうやうな眞の愛情といふものを、その時不意に感じた嬉しさであつたのか。私はその時いきなりおたみさんの胸にだきついて、その白い柔かい頬や、唇や、額やに、夢中に接吻の雨を浴びせたい氣持であつた。もし習慣がさうすることを許すやうになつてゐたなら、私はきつとさうしたに違ひない。私はほんの一瞬の間、さうした場合の光景を幻影に像いた。——私が「従姉さん！」といつてすりつく、おたみさんは、私をその胸の中へ、柔かい肌を私を抱きしめてくれる。私は熱い涙を流して止度なく嬉し泣きに泣いてゐる。……(加能作次郎)

彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉を呼びかけて祝福したいやうな子供らしい気軽さが、自分の心に湧き出るのを彼は知つた。さうしてこの楽しい流れがあゝ家の前を流れて居るであらうと想ふのが彼にはうれしかつた。(佐藤春夫)

パシカは自分の古い着物を脱いで、嬉しそうに新しい着物に着替へた。シャツや、ズボンや、鼠色の上衣を着て了ふと、彼はほく／＼して自分の身の廻りを見た。そして、この新しい着物で、村の中を歩いたならば、どんなによからうかと考へた。想像は、彼が母親に吩咐かつて、川の傍の菜園畑へ豚にやるキャベツの葉をむしりに行く時、村の男の子や女の子が、彼の廻りに立つて、羨ましさうに、口をぽかんと開け

て、彼の着物を見てゐるさまを描き出した。

(チエエホフ・前田昇譯)

◇追憶の心理

また一人で浴室に残つて、丁度いゝ頃合の熱さの湯に涵りながら、保子はこの頃から起つた縁談のことや、亡くなつた良人のことから心を離すことが出来なかつた。體重が十八貫もあつて、もしや／＼した硬い胸毛のある身體、三十そこ／＼から前禿に髪を抜け上つた頭、その美しい圓味、それから潤達な氣象を見せた柔和な眼、それらがはつきりと眼の前に浮んで來た。一日の中でいくらかでも酒氣を帯びてゐないことのなかつたほど、酒好きでゐて、しかもちつとも

亂れたといふことのなかつた、それだけまた他人から敬重されてゐた良人の性格なども思ひ出された。しかし今の彼女には、あの半年以前に感じたやうな、壓倒されきつた悲哀はなかつた。不意の、良人の死によつて、過去になつた二人の同棲生活が、どれほどとり返しのつかない尊いものだつたかといふことを、彼女はしみ／＼と回顧する心持で占められてゐた。(細田源吉)

始めて京都へ出て來てから、五六年の間に起つた、私の周囲の多くの人々の生活、それから私が居なくなつてから今日まで、前と殆ど同じ年數の間の變轉——それは全く複雑な、蜘蛛の巢のやうにこんぐらがつた、どこに始まつて、どこに終つてゐるのか、殆ど一つ／＼に引き放して考へることの出来ないやうな、縦

にも横にも、上にも下にも擴がつて居るやうな生活の流れの光景である。それらのことを今はつきり序を追うて思ひ浮べるには、あまりに雑然として居て、何が何やら見分けがつかぬ位であつた。それほどすべてのことが、いよくたになつて現れて來た。いろ／＼の繪具をこつちやになすりつけてあつて、何かしら一種の印象、感じを與へるが、さてその描かれた物象が何であるか見分けがたいやうな油繪にでも對したやうな心持であつた。(加能作次郎)

彼は未だ一度だつて追想して見た覺えのないそんな少年時代を今ふとこんな思ひもかけぬ場所へひよつくり思ひ出すのであつた。さうしてそんな思ひ出した瞬間「おゝ！俺にももう追想するやうな昔が出來

たか』愕いてさう気がついた刹那に、彼はさながら浦島傳説の主人公のやうに、一秒時に淺ましく年とつた心持の自分を見出した。(佐藤春夫)

マルチン・マルチーヌイツチは首を後ろへ反らせながら、まるで昔と同じやうな聲を聞いた。

『ねえマルト、わたしの青い部屋を覚えておらして。カバールを被せたピアノがあつて、ピアノの上には木でこさへた馬の灰皿があつたでせう、わたしが弾いてると、あなたが後ろからやつて来て……』

さうだ、あの晩宇宙が創造されたのだ、そして素晴らしい精巧さうな月の顔も、鶯の鳴き聲のやうな廊下のベルの音も。

『それから覚えてらして、マルト、窓が開いて、緑

色をした空が覗いてゐると——下からはまるで別の世界から来るやうな、流しの手風琴の音が聞える。』
手風琴弾き、あの素的な手風琴弾き——お前は今何處にゐるのだ？

『それから河岸通りでは……覚えてらして？——木の枝がまだ素裸で、水は赤味をさしてゐましたわね。するとまるで棺のやうな恰好をした、冬の名残りの青い氷の塊りが流れてゐたでせう。その棺を見てもただ可笑しいばかりでしたわ——だつてわたし達は、決して死ぬなんてことがないんですもの。覚えてらして？』(ザミヤーチン・米川正夫譯)

◇夢の心理

月夜で一めんに、深く、霧が下りてゐた。水の底でもあるやうだつた。はじめ、お住は、谷中の墓地——日暮里の寺へ墓まわりに行くときいつも通る谷中の墓地だと思つた。だが、遠くに、彼の音の聞こえてゐる工合が、どこか、海の近くらしかつた。——燈火といつてはどこにもみえなかつた。

二三間さきを男と女があるいてゐる。女はお千代だつた。
『まあ、お千代さん、ほんたうに以前の人とあつてゐるんだよ。——おしげのいふ通りだ。』お住はさう思つた。『男も男だ。——大抵にすればいゝ。』

あるいてゐるうちに、段々、二人に近くなつた。厭でも顔をみなければならなくなつた。——みると、男は廣吉だつた。

『あなた。』
お住は、思はず、聲を立てようとした。だが、駄目だつた。聲が出なかつた。——途端に眼が覺めた。

(久保田万太郎)
私は次のやうな夢を見た。眞黒な素敵に大きい鳥が一羽空中を舞つてゐた。『空中に舞ふ』といふのは後で私が形容した言葉であつて、その時實際さう感じたのではない。たゞ大きな黒い鳥がぼつりと私の頭に映じてゐたのである。外に何物も見えない。何物も聞えない。そしてその鳥はどうしても動いてゐなければ

いけなかつた。で、眞黒な素敵に大きい鳥が一羽空中に舞つてゐた。ちつと見てゐると、その羽が一本づゝ抜け落ちていつた。頸筋から翼から背中から尾まで、皆何處といはず一本づゝ毛が抜け落ちていつた。見てゐる間に眞黒な羽毛が薄くなつて、白い肌が見えてゐるやうになつた。羽の抜けた後には、白い肌には、毛の抜けた後の肌と粟粒ほどの鳥肌が立つた。……毛の抜けた後の肌はさらさらと掌に感ずると共に、不気味な肌の温氣が私の全身に傳はつた。はつと思つて手を引かうとする時、私は夢から醒めた。(豊島與志雄)

そして其處に妙な男が一人立つてゐた。姿は何にも見えなかつたが、兎に角、或る男が立つてゐることは事實だつた。恐らく黒い布で覆面してゐるのであらう。……そして何らか……盗みが今されやうとしてゐた。男は疊の敷を一枚一枚敷へていつた。がいつまでも疊の敷が盡きなかつた。(豊島與志雄)

夜になると彼女は時々恐ろしい夢を見た。昔、一緒に住んでゐた年寄の巫祝が、彼女の肩をゆすぶつて、寒い朝、造花を作り追ひやつたことなどを再びしみんと感ずることもあつた。

さういふ時は、彼女はいつも寢床の中で跳び上つて、死ぬほどの恐ろしさに暗闇の中をちつと見詰めた。けれども直ちに絹の上掛と柔かな枕とを探つた。指は贅

澤な寢臺の高價な彫刻を撫でた。そして眠たい小さな子供の天使達が重たい夢の帳をそろりと引きのけるうちに、彼女は、我々がいやな恐ろしい夢が夢であつて何でもなかつたことを發見した時に覺えるやうな、一種特別な、何とも言へない幸福を深い一息に味つた。(ケラン・前田晁譯)

彼女は妙な夢を見た。彼女は誰か知らない人達と、ツアリチノ湖でボートを泛べて居るやうに思つた。彼等は黙つて静かに坐つて居るばかりで、誰も漕ぐ者はないが、ボートは自然に動いて居る。エレナは怖いとは思はないが、たゞ退屈であつた。この人達は誰だらう？ 私は何故この人達と一緒に居るのだらう？と思ふ。見ると、湖がだんだん廣くなつて、土手が見

えなくなる——それはもう湖ではなくて、荒海である。碧い無言の大濤が、大きくボートを揺つて行く。何か脅し唸るやうなものが、底の方から押し寄せて来る。誰だか解らない伴侶の人達が飛び上つて、何か叫びながら手を振る……その顔がエレナに解つて来た。父親の顔もその中であつた。が白い旋風のやうなものが濤の上を襲つて来る——あらゆるものがぐるぐると廻り出して、凡てが一緒に交り合つてしまふ。

(ツルゲエネフ・田中純譯)

◇雑

眼を擧げると、障子には淡い日がさしてゐた。その日影を見守つてゐると、遠い野が心に見えて来た。

……郊外に家を持たう、光子の病氣のために、生命のために、それは、妻といふ形式でも、妹といふ形式でも、または他人の形式でも、そんなことはかまはない。只彼女が生きてさへくれたら……。そして自分はおかろう。

壯助は、凡てが光子の生命といふ一點から發して來たのであることを見た。そして凡てが今またその一點に落ちて行つた。生命を愛することがそんなにつらいことなのか？……野には樹の梢から、黒い土地から、青い芽が萌え出てゐる。

壯助は立ち上つた。彼の心には、只一筋の細い糸に縋つてちつと震へてゐるやうな光子の生が映じた。そしてその露はな眼が大きく靜かに開かれてゐた。「光

子！」彼はまた心にさう叫んだ。(豊島與志雄)

至る所に力ある生活の燈火が在つた。あらゆる活動と力とが今は安らかな家庭のうちに憩つてゐた。頭の、手の、また額の汗に依る生活が、夜の燈の下に融け合つて温い雰圍氣を作つてゐた。そして其處には育てる者と育てられる者とが居た。

格子の奥から、また二階の戸の隙間から洩れる燈火の光りは、博士にとつて縁遠い而もなつかしい人生の啓示であつた。そしてそれをすつと透し見ることは、やがて彼にとつては自己の荒涼たる孤獨の感に浸ることであつた。(豊島與志雄)

子供の頃、夏季河に泳ぎに行つて、脚の達かぬ青い深淵の底にもぐつて行くと、其處には上層を流れ

がたくと戦いた。(有島武郎)

保子は良人が仆れた夜のことを思ひ出した。姉は夫婦してすぐ駆けつけて來た。醫者が最後の望みのなくなつたことを告げてから、間もなくだつた。保子はその死の部屋のことをはつきりと覚えてゐた。床の上に横へた死人の枕許で、姉は腹から出るやうな、低いけれど、人を動かすやうな聲で泣いた。勿論保子自身も泣いた。それは姉以上のものだつた。が、その瞬間のうちで、彼女は、姉の泣聲に一度は良人として侍づいた親しみを見出してゐた。ある嫉妬さへ感じたのだつた。(細田源吉)

彼の席はテエブルの中央に嫁と向ひ合つて作られた。と、彼は坐るが早いか、食へはじめた。金を拂

てゐる水と違つた冷たい水があつて、それが肌を觸るとぞつとするやうな戦慄を覺えしめた。私はお前の今度の決心の底に丁度さういふものを聯想した。そしてその冷くなつてゐる心を感じると急に何とも言へない孤獨の寂寞に襲はれた。(秋江)

僕ですらが眞青になつてゐた。聲を放つて怒鳴らない爲めには、碎けるまで齒を喰ひしぼつてゐなければならなかつた。彼女の神經が昂奮からゆるんで行つて、名状し難くだるい快い眠りに陥るのを見ますと、僕は野獸のやうに顔を擡げて、かさ／＼に乾いた眼でその寝顔を嚙むやうにいつまでも眺めた。その場をさらす、すふりとその美しい喉に刺通したい敵意と、その血肥りに盛り上つた胸にのしかゝりたい衝動とに

つたのが自分の息子であつて見れば、自分の分け前を取るのは當然であつた。胃の中へ落ちて行くスープの一掬ひ毎に、齒齦の下で押し潰されるパンや肉の一口毎に、咽喉を通つて行く林檎酒や葡萄酒の一ばい毎に、彼は自分の財産の幾らかを取り返してゐるのだ、此處にゐる大食家達が貪り食つてゐる彼の金の多少を取り戻してゐるのだ。つまり、自分の身上の一部を儉約してゐるのだと考へてゐた。そして彼は、自分の錢を隠して置く守銭奴のあの片意地で、彼が以前辛抱強く働いてゐた時に示したやうなあの陰氣な強情で、黙つて食べてゐた。(モウパッサン・前田晁譯)

界に悩む魂のためにアベ・マリアの名を繰り返し繰りかへして口籠りながら言つて見たのであつた。

✿ 検事は顔に子供の息のかゝるを覺え、頬に子供の髪の毛のさはるを感じた。と不意に暖いやさしい氣持が胸に起つて、そのやさしさが彼の手ばかりではなく、其の全靈がセレウジャの上衣の天鵞絨の上に置かれてあるやうな思ひをさせた。で子供の大きい黒い目をぢつと見入ると、其の大きい瞳から、母親や、妻や、かつて愛した人達がみんな自分を見てゐるやうに思はれた。(チエエホフ・前田晁譯)

と、整ひかけた顔の表情と、彼にはすべてのものが、茲に本來の美しい天性があつて、腐敗の氣に染ままいとしてもがいてゐることを示すやうに思はれた。彼は金持の胸に浮んで来る無数の氣まぐれの一つに動かされて、其の不幸な子供を救つて見ようと心をきめた。

(ケラン・前田晁譯)

✿ 彼は亡妻の名を呼んだ。そしてマリイの葬式を此の春やつて以來のことを想ひ出して見た。娘のユズカはぐつすりと重い寢呼吸を通はせながら寝てゐる。思へば自分は哀れな孤獨者である。荒んだ魂の持ち主で、此の世に誰一人彼の爲めに眞からの忠告を與へて呉れるものが無い。深い深い溜息を吐いて、十字を切つて、死に別れたもの、その他一切の、苦悶淨滌の世

氣分

✿ 庄吉はたゞむやみと駆け續けた。赤い灯がちらちらと彼の眼に映じた。そしてそれが益々彼の心に向うへ向うへと追ひ立てた。然しいつしか彼は呼吸が苦しくなり足が疲れて、今にも倒れさうになつた。立ち留ると誰も彼を追つかけて来る者もなかつた。彼は夢を見てゐるやうな心地でぼかんと立つてゐた。(豊島與志雄)

✿ 私の心は再び暗くなつた。私はこの一日か二日かの短かい間に會はねばならぬ幾人かの人々の顔を思ひ浮べた。それらの人達は、何等かの意味で私から彼

等に頭を下げることをひそかに期待してゐるやうな人達であつた。それは私自身の個人的な關係からばかりでなく、私の生れた「家」そのもの、傳統的な關係の故でもあつた。故郷に歸つた私は、個人としてよりも、寧ろ傳統的の存在として振舞はねばならぬことが多かつた。私は私の私ではなく、私の「家」の私であつた。

わけもなき憂鬱と焦燥のうちに、私は一歩々々故郷の村に近づいた。(加能作次郎)

苦み、餓ゑ、疲れた旅の一日は次第に暮れて行つた。彼は朝飯を食つたばかりで、水一口も飲まずである。村はづれの家々、立ち登る烟、夕暮を急ぐ人々の顔、何もかも彼の眼には一緒に成つて、グラ／＼動

いて見えた。橋の下には音のしない水が流れて居る。欄の上から覗き込むと、急に彼は眩暈がして来て、その水の中へ轉げ落ちさうな氣がした。(藤村)

弟を泣かした末、私は終日土藏の中に押し込められて泣き叫んだ。その窓の下には露草の仄かな花が咲いてゐた。哀れな小さい囚人はかうして泣き疲れたあと、何時もその潤んだ眸に幽かな燐のほひの沁み入る薄暗い空氣のけはひを感じた。(白秋)

自分はまるで誰かに欺かれたやうな、寂しい心持を味ひながら、壁にはめこんだ鏡の前の卓へ行つて腰を下した。さうして用を聞きに來た給仕に珈琲を云ひつけると、思ひ出したやうに葉巻を出して、何本となくマツチを摺つた揚句、やつとそれに火をつけた。

すると間もなく、湯氣の立つた珈琲茶碗が自分の卓の上に残れたが、それでも一度洗んだ氣は、外に下りてゐる露のやうに、容易な事では晴れさうもない。

(芥川龍之介)

その一歩毎に、今外で考へたすべての決心をくつがへしてしまふやうな、堪らない憂鬱が心に迫つて來るのであつた。すべての理屈、またすべての反省を絶して、唯たまらなく厭だと云ふ感じが、込み上げて來るのであつた。——まるで何か毒瓦斯のいつばい漲つてゐる場所にも入つたやうな、息もつけない苦しさを感じて來るのであつた。(廣津和郎)

昨夜ふりそびれた持越しが、今朝も、まだ、空をハツキリさせなかつた。どこにも日のいろはなかつ

た。——何とはなく、お住に、泣いて／＼泣きあかしたあとのやうな心もち——さういつた、空々しい、白々した心もちが感じられた。(久保田万太郎)

女の心に、一時に悲しみが突ツかけて來た。絶叫したいやうな悲しみが突ツかけて來たけれども、草のやうなもので心臓を引き絞られてるやうな苦しさが残つて胸が乾いてゐた。唇も眼も乾いてゐた。口尻から耳朶へかけての筋肉が引き吊るやうに思ひながら彼女は泣くことが出來なかつた。顔から喉へかけての肉の繊維がふるへてゐながら涙がのぼつて來なかつた。

(田村俊子)

春の形のない追懐は、人の心にかすかに残つてゐる過去の記憶ではあるまいか。もしこの現在が旅で

あつて、昔、吾等の魂の住んでゐた國があり、過去の世界があつたらば、その世はこの春のやうな夢と夢とをつなぎ合せて行く安らかな歡樂の國であらう。その遠いかすかな記憶を聞くために耳をかたむけ、眼を視張つても、現在の肉體からは聴き得られないので、この悲しみと心淋しさが、春の心に大波をさわがせて静かな心を擾されるのであらう。(葉舟)

彼は初め叔父を見た時から何かとしきりに感染して来るやうな氣がしてゐた。その漠然としたものが次第にある中心を定めて凝結して來た。其處に先刻叔父が話した尼僧の生活と云つたやうなものがあるやうに思へた。只一人離れてちつと何か淡々しいものに浸り乍ら眼を見開いてゐたい、といふやうな感情が彼の

心に甘えてゐた。(豊島與志雄)

年毎に彼の身體に悪影響を傳へる初春の季節が過ぎ去つた後、彼はまた静かなる書齋の生活をはじめた、去つてゆく時の足跡をちつと見守つてゐるやうな心地をし乍ら。木蓮の花が散つて、燕が飛び廻るのを見守つては、只悠久なるものゝ影をのみ追つた。然しその影の淡々しいのを彼の心が見た。(豊島與志雄)

庭の樹影がかさ／＼と搖いだので彼は耳を澄すと、あたりが寂然と静まり返つた。その沈黙のうちに、何かと物影からちつと彼の方へ窺ひ寄らうとしてゐるのを感じた。それで縁側を歩き廻つて、自分にも分らない妙に興奮した考へを振り落さうとするやうに肩を引きしめてみたりした。丁度柱時計が十時を打つて、

その空粗な響きが室の中に鳴り渡つた。それを静寂な夜が四方から押へつけてゐる。彼は廢墟の跡を訪ふやうな氣分に包まれて、今一度遠い昔の世をふり返つてみるやうな心地で、我知らず長い間立ち盡してゐた。(豊島與志雄)

空の中は明るくなつた。眼がはつきりしてきた。と共に頭の中が急に薄暗くなつてきた。意識の上に深い霧がかゝつてゐるやうな氣がした。凡てのことが夢のやうな間隔を隔て、蘇つてきた。彼は眼をつぶつた。そして静かにその光景をくり返した。凡ては底のないやうな静けさに包まれてゐた。(豊島與志雄)

自分はやはり其時代でも外部のすべての事物に何の交渉を感じる事もなく、たゞ自分と自分の仕事と

だけを、一人薄暗く見入つてゐたのは變らなかつた。それが自分に取つては、黒い水にばかり生きてゐる生物が、わが水の黒いといふ比較をとつたことがないやうに、それで何の缺損をも意味しない、平靜な状態なのである。(鈴木三重吉)

おさよは誰の事も、胸に浮んで居なかつた。ただ自分の身體がたゞ一つ庭の紅い花のやうに、日に照されて、華々しい色を見せてゐるやうに思はれる。ただ何かにうつとりとなつて當も無しに庭を見詰めて居る。(葉舟)

彼は濡つた枯草の上に腰を下した。而して全く身心が疲れ切つたやうに茫然として眼を水の上に落してゐた。眼の中はうるんでゐて燃え盡した蠟燭の終り

に放つやうな、淋しい光がどんよりと宿つてゐた。彼
 はかうしてゐる間にも眠つてゐるやうな氣分であつた。
 此頃は自分でさへ自分が眠つてゐるのか、眼を醒して
 ゐるのか、それすら分らないやうな時がたび／＼あ
 る。今もやはりそんなやうな氣分であつた。(未明)

水を汲み上げようと繩つるべを持ち上げたが、
 ふと底を覗き込むと、其處には涯知らぬ蒼穹を徑三尺
 の圓に區切つて、底知れぬ瑠璃を靜平にのべて、井戸
 水はそれ自身が内部から光り透きとほるものやうに
 さへ見えた。彼はつるべを落す手を躊躇せずには居ら
 れない。それを覗き込んで居るうちに、彼の氣分は井
 戸水のやうに落着いた。汲み上げた水は、寧ろ、連日
 の雨に濁つて居たけれど、彼の靜かな氣分はそれ位を

怒すには充分であつた。(佐藤春夫)

彼は何處へも出ないで、日の暮れる迄旅宿の一
 室に籠つて茶を呑んで考へに耽つてゐた。昨日の夕方
 から彼を捉へてゐる重苦しい氣分が、尙長く、彼が訪
 間を初めて、家族が來た後迄も彼を苦しめた。此氣分
 は、數日を神祕な物音に満ちた祕密の森で自由に送つ
 た後に、冬籠りの爲めに灰色の霧深く立單めたペテル
 ブルグの夕暮に、井戸のやうに狭い庭へ突出した窓を
 持った五階の自分の室へ歸つて來た首都の住民の憂愁
 に似てゐた。(ラザレーフスキイ・白葉譯)

夕暮の霧が丘のあたりに漂ひ始め、地上のあら
 ゆる香が我々を酔はせるあの薄明の頃に、我々を居て
 も立つてもゐられなくする柔らかな味の切なる求めは、

抒情詩の祈願のうちに溢れてゐる。でパチツツ君も、
 他の者と同じやうに、手をしかと握りしめて、撓み易
 い肥つた姿を抱擁しながら、夕日の落ちて行く小徑沿
 ひで與へられる柔らかな味に向つての、柔らかな接吻に
 向つてのあこがれに捉はれた。(モウパッサン・前田晁譯)

彼女は恐れと疑ひとに身を嚙まれて、思つたり、
 考へたり、思案したり、泣いたりした。さうするうち
 に、彼女の楽しい若い靈魂はまた晴れやかになつて、
 彼女は一つの冒険を企て始めて、彼女の讀んだ詩的小
 説のすべての記憶の上に立てられた異状な、劇的な身
 分を想像し始めた。彼女は感動させるやうな境遇の變
 化や、悲しい、腸を斷つやうな物語やを思ひ出して、
 それを一緒に混ぜ合せて、自分の物語を作り上げて、

それで彼女の生活を包んでゐる半解の神祕を飾つた。
 (モウパッサン・前田晁譯)

其の日は極く暖かな好い天氣であつた。喜ばし
 げな日光は草を暖めてゐた。水は鏡のやうに光つてゐ
 た。シモンは暫くの間、泣いた後に來るだるい嬉しさ
 を覚えて、眞晝の光でぼか／＼と暖い草の上に、其の
 儘寝てしまひたいやうな心さへ起つた。
 (モウパッサン・前田晁譯)

裸根の間を水際まで走つてゐる小徑を通つて、
 コウリンは、鶴を驚かしたり、二羽の鴨を騒がしたり
 しながら降りて行つた。暗い松の木には入日の光が輝
 いてゐたが、河の面には暗闇がもう落ちてゐた。コウ
 リンは流れを渡つた。彼の前には今しも若いライ麥で

蔽はれた廣い野が展けた。人の住家も人影も遙かに見られないで、小徑は、日は既に没した——がなほ、渺茫と果てしもなく莊嚴に、夕曉の燃えてゐる西方のまだ探検されない謎の國へ導いて行くものゝやうに思はれた。(チエエホフ・前田晁譯)

灣はまるで生きてでもゐるやうに、その澤山な明るい暗い藍色の日から、トルコ玉と火との目からちつと彼を見て、手招いた。暖い息のつまりさうな晩だつたので、彼は浴びたらどんなにか氣持がよからうと思つた！(チエエホフ・前田晁譯)

死といふことを話す時、吾々が考へるやうな、はねかへすやうな恐ろしさは此の室内にはなかつた。昏々としてゐる全體の様も、母親の姿勢も、父親の平

氣な顔付も、何かかう人を惹き付けるやうな、傷ましいやうな物を吐いた。分析することも叙述することも出来ないで、獨り音楽のみが表白することの出来るやうな、微妙な、觸れても知れない人間の悲哀の美を吐いた。(チエエホフ・前田晁譯)

神 經

かれの心は、曾て經驗した事のないほどに暗い佗しいものであつた。體が底の底に陥ちて行くやうにさへ思はれた。かれはじつと電燈の細い赤い線を見て居た。赤い線は丸い電球の中に影をつくつて三筋にも

四筋にもなつて見えた。あたりはしんとして居た。その静かな夜が却つてかれの心を動揺させた。(花袋)

血！一面の血だ！そこら中一面に赤い血で埋まつて居る、とその時私は思つた。三人の醫者達は皆な手頸まで眞赤にして、何かぼそ／＼囁きながら、私の絶叫にも拘らず殆ど無關心の様に彼等の仕事を續けて居た。主任役の副部長は何かを掴み出さうとでもするやうに、傷の中へ深く手頸までも突込んで見たり、熊手のやうなもので掻き出したりして居た。時々筋を掴んでぐいと引抜かれるのではないかと思はれる様な、異様な、何とも名状しがたい激烈な痛みを、總身に感じた。私は其の度に『きやつ！』と悲鳴をあげた。

(加能作次郎)

何處か廣間の遠くの方で、誰かどちつと彼の横顔を見て居たやうな氣がした。彼が顔を揚げたので誰かどあわてゝ視線を反けたやうな氣がした。水の上の船の通つて行つた跡がすつと平らになつて残るやうに、此の廣間の空氣の中に、誰かしらが彼の顔にちつと注いで居た視線の跡が其のまゝにちやんと残つてゐるやうに思はれた。(谷崎精二)

それから一月とたゝないある日の午後、正太の母はその松の樹の處にやつて来て、ハツとして立ちすくんだ。

クルリ クルリ

正太が松の樹を廻つてゐる。片手を樽のやうな樹の幹にかけて、小さいあの正太が。だが、今ではもう此

世にゐない筈であるあの正太が。母親は立ちすくんで、その姿をちつと眺めた。だが、眺めてゐる内に、その姿は煙りのやうに消えてしまつた。後には荒いウロコのやうな樹の皮の處々に、干乾びた蟲の殻が幾つもくくつ付いてゐた。彼女は暫く佇んで、透明な秋の空氣の中に立つてゐるその松の樹の幹を眺め入つた。然しもう正太の姿は現はれなかつた。大氣が移りつゝあるのか、冷い風が吹くともなく、松の幹を吹いてゐた。その時、その松の幹が、母親に何と淋しく味氣なく見えたことであつたらう。正太はゐない。ゐなくなつたのだ。そこには干乾びた幾つかの蟲殻ばかり。それから何日かたち。

それから幾月かたち。母親は樹の周圍を廻つてゐる正太の姿を見たのである。クルリ、クルリ、と、小さい正太の姿（坪田讓治）其の子供の泣聲はいつまでも止まなかつた。頭が其の泣聲に掻き亂されて、いつしか目に見てゐる自然も、其の苦しさを泣聲と同じ色の赤い色で彩られて、今にでも火が附いて木も草も燃え始めさうになつて見えて來ました。而して耳にはひり／＼と針線で刺すやうに、ます／＼鋭く感じられて、自分までが氣が茫然として來るのを覺えました。（未明）

夜遅く仕事をしておいて、ふと顔を上げると壁に懸つてゐる額面の硝子に自分の姿が映じてゐる。黒い

陰影の中に電氣の光りを受けた自分の頬と額とが氣味悪く浮んで見える。それを博士はちつと他人をでも見るやうな氣で眺める。薄いベールをでも被つたやうな生氣のない皮膚の色がある。手を上げると、それが魔物の指かのやうに硝子の中に蠢めく。ちつとそれを見てゐる彼の頭は妙に緊張したまゝ働きを止めてしまふ。そしてしーんとかすかな音のする静けさがあたりに籠めてゐる。額面の硝子の中の自分の映像は、次第に遠くなるやうに思へて來る。そして種々な不吉な豫感と幻とが其處から湧き上る。……あの梯子段の所に誰か立つてゐるやうな氣もする。梯子段をかけ下りてゆく自分の姿が頭にはつきり浮んでくる。（豊島與志雄）

突然、彼女がふり返つて彼に微笑んだ。蒼白い月の光りが彼女の髪を滑つて流れた。その髪に隠された火影の中に灰白い彼女の顔がにつと笑つた。眞白な齒並と眞黒な瞳の輝きとが同時に、彼の眼の中に飛び込んだ。そしてばかりと彼の鼻先に白張の提灯がゆらめいたやうな氣がした。と白い細い指先が、その上をすつと刷いた。彼は全身にぞつと悪寒を感じた。ぶるぶると手足が震えた。凡てが朦朧として彼の眼界から消え去つた。何か大きい打撃のやうなものを身に感じて、彼ははつと我に返つた。（豊島與志雄）

眼瞼は妙に重くなるのに、頭の心が冴えて種々な妄想が湧いて來た。何やらこと／＼と戸を叩くやうなのでちつと耳を澄すと、大きい影のやうなものが明